
魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫

キャビア伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫

【Nコード】

N0978W

【作者名】

キャビア伯爵

【あらすじ】

これは作者の処女作品、『魔法少女リリカルなのは 純白の騎士姫』のIFであり、全く違う世界を奏でる物語。

天才ピアニストとして名を馳せていた17の少年、天城音色。彼は

コンサートからタクシーで帰宅中にトラック事故に遭ってしまふ。
そして目覚めた先に居たのはテンプレ通り神様。

「え？ あ、俺死んだの？」

彼はどこで何を見て、そして何を奏でるのか。

本作品は純白の騎士姫の世界に若干の訂正や能力変更、カップリングの変更と男の娘成分と若干のコジマ粒子が含まれて居ます。一応主人公最強モノ、転生、男の娘モノ要素が入ります。ニガテな方はブラウザバックしてね

第1話 そして始まる物語（前書き）

ついに始まります。

第1話　そして始まる物語

「はぁ……。」

スマートフォンを弄りながらため息をついた。

……俺の名前は天城音色。

ただの高校生で……世界的に有名なピアニストだ。

年の離れた8才の妹が一人と、楽器屋を営む親父に同じくピアニストの母。

だけど両親とは絶縁気味。妹の天音とは毎日欠かさずメールをやり取りしてる。

コンサートのチケットなんてもう送って無い。妹の分も……だ。

まさか送り返されるとは思わなかった。

そんなどうでもいい事を譜面表を見ながら考えていると……。

目の前からトラックが……。

「……で？」

「すまん。」

この人は神様……だけど1年前からの知り合いだ。

一年前、俺はこの人と会った事がある……。

「死んじゃったのか？」

「……うむ。こちらのミスでな。」

「や、やりたいことまだあったんだけど……。」

ピアノ弾いてピアノ弾いてピアノ弾いてピアノ弾いてピアノ弾いて
……。

うん。ごめんピアノしかないや……。

「久しぶりじゃな。会ったのは1年前か？」

「うん。まさかコンサートをサボった時に・・・」

「・・・？」

「神じゃ。」

「・・・え、あのこの白い空間なんですか？」

「頼む。ピアノを弾いてくれんか？」

「あの俺は・・・」

「お願いじゃ。君のファンなんじゃ。この老骨の楽しみのために・・・」

「でも俺・・・」

「頼む。一生のお願いじゃ。」

「だ、出してくださいよ……。」

「ならん。コンサートをすると確約せんと出さん。」

「コイツ身勝手だっ!？」

「えと、久し振り?」

「……じゃな。こんな形で出会いたくなかったのじゃが……。」

部下の不手際で君が死んでしまうことになったのじゃ。」

俺がパニックにならないように顔見知りのこの人が選ばれたのかな?

「うむ。そこで『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生してもら
うぞい?」

……えっ?

「えーっと、それってテンプレな？」

「うむ。チートもありじゃ。」

・・・欲望には・・・負けない・・・！！

一回、妹の天音に「お兄ちゃんこついうの好きなの？」

と言われながら友達の勧めで買ったフィギュアを・・・
持ってこられたときは俺はもう・・・。

「ふむ。容姿はセイバーリリイじゃな。」

「おい、ちよつと待て。思いつきり男の娘じゃないか。」

「お前の欲求を満たただけじゃ。」

「こちとら遠慮なんてしてもらいたくは無いの。」

俺の欲望が丸裸にされてるっ！？

待て！ 確かに嬉しいけどそれはなんか男として・・・。

FFシリーズの魔法一式、技一式。魔力ランクはEX

そしてFF13のガンブレイド型デバイスの設計図を頭の中に。

「こんなもんで。」

「……この能力を付ける為にちょっと補佐を入れてみんか？」

「……補佐？」

補佐ってなんだろう。

「お前の剣を指導したり、お前をいざという時に守ってくれる存在じゃ。」

「あー……。」

それはいるかもしれない。剣と魔法の指導者は大事だ。

唯でさえ真つ黒なりリカルでマジカルな世界。何が起こるか分からない。

「お前には召喚獣、オーディーンを与える。」

「え、あの斬鉄剣とかの・・・？」

「お前のイメージ通りの存在となる。」

んー、やっぱりあのFF13のオーディーンかな。

あのS字型の両剣とあの戦闘力。

そして本来は知識に貪欲な全知全能とも呼ばれてる人だ。

魔法にも詳しいだろう。

「くれぐれも気をつけるのじゃぞ？」

「わかった。」

「それでは、じゃ。」

そして俺は光に飲まれた。

第1話 そして始まる物語（後書き）

次話に続きます。彼は一体どんな運命を辿るのか・・・

この時期の旧約の方は怒涛の更新でしたが、

この作品の更新の速度は期待しないでくださいねw

第2話 そんなこんなで。(前書き)

早速メールが来ましたが、

フロムでコジマなのはキャラクターとか台詞とかです。

旧約と違って、短編でも書いていますが・・・。

ランカー制度が導入されてます。

キャラが魔導師、ACがデバイスと考えていただければ。

ご安心くださいw バランスは取りますw

出してほしいACのキャラがいたらまあ、メールでもくれれば。

アーマードコア好きな人にはニヨニヨできるかもですw

そして、原作(無印)に入るまで非常に時間が掛かります。

その量は旧約のA s入りの3倍を予定。

し注意くださいねw

第2話 そんなこんなで。

こんにちは！

天城音色改め・・・アルトリアですw

いやぁ・・・とりあえず6歳になりましたけども。

早いものだねー。あっという間でした。

ちなみに生まれは新暦48年。なんのこっちゃ。

原作開始の時には・・・いくつだろ。相当な年を食べてるねw

まあそれは置いておいて・・・。

父はタイラー・ムーンライト。豪快でガハハと笑う。

相棒のゼルブロウとともに執務官をやっている。

母はシルヴィア・ムーンライト。

管理局指定のストレージだけど武装隊で無双してるらしい。

月姫の一族という特殊な一族で、俺にもその血が流れてる。

そして・・・俺はちょっと特殊な事情で実家からは離れて暮らしている。

今、俺の実家のムーンライトの家はドタバタしてるのだ。

父のタイラーは潜入捜査で、家族にも危険が及びそうな任務中。

母のシルヴィアも最近忙しくなっちゃってしまい、家に帰れて居ない。

・・・なので、俺は友人の家に預けられている。

いや、5、6歳でこの大人しい態度だから信頼されてるし、

母さんも父さんも下宿するときは泣きながらごめんね？

そしてまたねと言ってくれた。

うん、愛されてるのはわかるけどちょっと寂しいです。

「どうしたのARIA君。」

「あ……テレジアさん……。」

この人が現在の保護者のレステル・U・テレジアさん。

茶髪で超ロングヘア。そしてタレ目に泣き黒子にメガネ。

いかにもなんていうんだろ。母性溢れる人だ。

メガネ取ったらこう……すごい妖艶だけど……。

……で、管理局地上本部の魔導師ランク29だ。

そしてランクが高い人間は優遇される傾向にある。

魔導師ランクについてはおいおい説明するだろう。

ベッドにちょこーんと座ってた俺はテレジアに抱き上げられる。

・・・身長高いなテレジアさん・・・。

「また考え事してたの？」

「・・・ちょっと。」

「この部屋は寒いからリビング行きましょっ？」

「うん。」

抱っこされたままリビングへ。

今季節は冬。やばい。ストーブあったかい。

いかにもハイテクですっていうようなストーブの前にポテンと座る。

「ほえー・・・。」

「ふふ。あったかいね。」

「ねー。」

「ほら、可愛い顔が蕩けてるぞー」

「きゃー」

テレジアさんがいつの間にか隣に来てて、

俺の顔とか体をやんわりくすぐってくる。

いやぁ・・・セイバーボディでよければいくらでもどしどし。

テレジアさん。本当に母さんみたいだしね。絶対に悪い人じゃない。

「あ、今日はタイラーとシルヴィア、帰ってくるって。」

「ほんとっ!?!?」

「うんうん。二人でこ馳走作ろうねー。」

「うんうん。作るー」

「あ、オーディーンは?」

テレジアさんがふと手を止めて聞いてくる。

「お料理のお手伝い?」

「そっそっ。」

この召喚はレアスキル扱いになってるはずだ。

登録するって言ってたし。テレジアさんはそのオーディーンを、

料理の手伝いをさせたいがために召喚をせがんでくる。たまにだが。

「いいよ？ こいや『オーディーン』！」

胸から取り出した白い宝石を、壁へ思いっきり投げつけた。

すると甲高い破砕音と共に白い純白の甲冑に包まれた騎士がやってくる。

・・・はずなんだけど。

「はいはい！！ 呼ばれて飛び出てじゃじゃんじゃーん！」

すっごい優しくていい子で優秀なんだけどテンションが高いんだよねw

俺が5歳の時、テレジアさんの目からちょっと離れてしまった隙に、誘拐に遭いそうになったときはもうやばかった。

絶対にオーディーン怒らせない。うん。

「アリアちゃん、ご両親が帰ってくるんですよね聞いてましたよー

オーディーンはしばし離れちゃいますけど大丈夫ですか？」

「ううん。俺も一緒にお料理する。」

「あ、そうでした・・・じゃあキッチンへGO！」

あーるーけーるーよー・・・。

オーディションに抱えられて移動。

テレジアさんがその後ろからニコニコと笑いながら付いてくる。

そんなまったりとした日常。

・・・ちよつと幸せ、かな。

第2話 そんなこんなで。(後書き)

この幸せが壊れるとは思っても……とかはありませんキャビアです。

テレジアさんが出てきたよ！

勿論ランカーでデバイスはカリオンですw

エンブレム？……もちろんそのままw

オーディーンと悠深は仲良くなりそうですw

次回はどうぞしよう。

まったりしつつ魔法と訓練校フラグかな？

第3話 魔法を始めよう。(前書き)

筆が進む進む・・・進む君。

アリア「エクスカリバー約束された勝利の剣」

なにゆえっ!？

- 伯爵がログアウトしました -

第3話 魔法を始めよう。

「そう、そう、あ、それは悪手です。」

・・・さわっ。

「にゃあっ!?!」

「ほらほらお尻触っちゃいますよー」

「むうー!」

ただいま剣の訓練中。

会話だけ見ると師匠が弟子が失敗するたびにセクハラすると言っモノ。

まあ、年齢的にからかう姉と意地になる弟である。

しかし、視認してみよう。

亜高速の領域で切りかかる6才の少年と、

超人的な身体能力でそれを避け続ける少女の出来上がりだ。

疲れた……。

シャワーでさっぱりした後、牛乳をテーブルで飲む。

「ねえねえ、アリア君。」

「？　なあにテレジアさん。」

「・・・あなた、やっぱり管理局に入るの？」

「やっぱりそれしかないでしょ。」

「うん。だから痛いこともするし、魔法の練習もする。」

「そう・・・いい心がけね」

「えへへ。」

「じゃあ・・・ちょっと相談なんだけど・・・。」

訓練校、入ってみない？

「・・・はえ？」

「陸士になるための訓練校よ」

「まだ早いと思います・・・。」

「結構な人数も通ってるし、あなたも来年から行ってみれば？」

訓練校とはこの場合、陸士訓練校だろう。

15歳になるまで8年間魔導師となるための事を徹底的に教え込まれる。

「んー……。」

「ロストロギアとレアスキル持ちなんて気にしないわよ？」

「それは……テレジアさんとか、父さんとか母さんとかだからで……。」

「大丈夫よ。」

「んー、わかった。行くよ。」

ちよつとこのバカ魔力と聖剣とその鞘で騒がれないか不安なんだけど……。

オーデインも来るだろうな……俺の召喚獣だし。

「あなたに合うデバイスはこっちで用意する。」

大丈夫、いい陸士になれるわ。」

テレジアに撫でられ、思わず頬が緩む俺だった。

sideテレジア

「あなたに合うデバイスはこっちで用意する。」

大丈夫、いい陸士になれるわ。」

そういつて私はアリアの頭を撫でる。

彼に訓練校を勧めたのは確かに彼の夢のため。

というのもあるけど・・・やっぱり友達を作っほしかった。

私は『何もしなくてもお金が入ってくるから』・・・

こっちやって自由に生活できてる。

そのお陰でアリア君の事をよく見るんだけど・・・。

この子は友達がないのだ。

私の家が高いマンションなので年の近い子はあまりいない。

思いつきりクラナガンの都市部で周囲には公園なども無い。

家で自主勉強と、外へお買い物、広いベランダで魔法の訓練。

これじゃダメだ。

そこで考えたのが訓練校。

全寮制だけど、戦友とも言える友達や、クラスメイトの友達もできるだろう。

そういった苦難を共に乗り越えたりした友達はいい友達になれる。

私はアリア君を膝に乗せ、私を見つめてくる瞳を静かに見つめ返す。

彼の中に眠っているのは強い潜在能力。

今のうちからしっかりと力の扱いを覚えさせてあげないと……。

いつか取り返しの付かない事態になってただろう。

それこそ、管理局の上層部が目をつける程の。

私の瞳を見てるうちに眠くなったのか、

アリア君はコックリコックリと船を漕ぎ出す。

……シルヴィアが私を訪ねてきたときはすごく驚いたけど……。

「私がこんな事をするなんてね……。」

感傷に浸ってた時、カリオンから通信が入る。

名前は……有澤隆文。
ありさわたかみ

通信の向こう側からまだ十台後半であろう、青年の声が聞こえる。

『ミセス・テレジア、今日は……』

「待って。寝てる子供がいるの。」

その後、アリア君をベッドへ運び、すぐ傍に書置きを置いてく。

アリア君の頭を撫でて一言だけ言う。

「行って来るわね。」

「待たせたわ。」

「以外だな・・・あんたが子供預かってるだなんて。」

「失礼ね。」

「すまんすまん・・・ランク29への任務だ。」

「全くなんで俺が伝達役なんだか・・・。」

「概要を話して。」

「これも平和に必要なの・・・ってね。」

第3話 魔法を始めよう。(後書き)

こんなもんでしょうか。

眠いので文面がおかしくないか不安です。

しばらく感想待ってから寝ます・・・おやすみなさいw

第4話 まずはデバイス・・・で前夜！

「これがアリア君の臨時デバイスよ」

「・・・おお。」

洗物を終えたテレジアさんが差し出したのは、

一つの・・・なんだこれ。

「待機状態はペンダント。型はブーストよ。」

「ブーストって・・・グローブみたいなの？」

「ええ。通常のデバイスじゃ耐えられそうに無いから・・・」

グローブ型で一番支援系のデバイスにしたわ。」

「ふむふむ。」

「どうせ変なあなた用の魔法を使うんでしょう?」

あ・・・バレてた？ てか『変なあなた用』って・・・。

「だから処理能力の高いこちらにしたわ。

ストレージは丈夫だし・・・どう？」

「うんうん！ ありがとうテレジアさん！」

くすりとテレジアさんは笑うと、俺の首にペンダントをつけた。

まあ、入学式は明日なわけだが。

最近は母さんとはちよくちよく会えてる。

父さんは潜入と二重スパイが大詰めなのか、ここ数ヶ月会ってない。

お酒飲んで俺を抱えながらガハハと話すのはいいけど、

最重要機密ランクAAAレベルの話をしないでほしい。

日々何故か夜道に気をつけなくちゃいけなくなるような気がする。

いや、出歩かないけど……。

そういえば。

オーディーンとテレジアさんが明日入学式に来てくれるらしい。

前から思ってたけどお前は俺のなんなんだ……w

『管理人で召喚獣で師匠でお姉ちゃんですよー』

……まあいいか……。

隣のベッドで眠ってるテレジアさんを横目に、自分は屋上へテレポする。

「……はあ……。」

『どっしたのー????』

「ん……。」

柵へ歩いていき、クラナガンの夜景を一望する。

「……これから守るんだなーって。」

『そだよ？ 頑張ろうねアリアちゃん！』

「うん、頑張ろう、オーデイン。」

『目標は目指せランカー！』

「出来るかな？」

『出来るよ！』

「……まずはデバイスを握れるくらい大きくなりたい。」

『ブレイズエッジを握れるのは来年かなー。』

「え？ そんなもん？」

『サイズ大きいけど今のうちに慣れとかないと。』

唯でさえ扱いにくい武器なんだから……。

「すっぽ抜けそう。」

『手にマグネガ粘着するからだいじょぶ!』

「んー、オーディーン任せた。」

『あー！ ひっどーい！ 召喚獣召喚基準法に反するよー!』

「法律あつたのっ!?!」

『ううん、てきとー。』

「もう抱っこさせてあげない。」

『死活問題っ!?!?』

そんなこんなで前夜は更けて行く。

第4話 まずはデバイス・・・で前夜！（後書き）

オチ？ なにそれ・・・。

訓練校入学！ そろそろオリキャラが・・・。

第5話 三年生に。(前書き)

悠深&鳳凰院出演！w w

ルーデル？ しばし待たれよw w

1年基礎 〓 7歳

2年基礎、実技 〓 8歳

3年基礎、実技 〓 9歳

4年実技、座学 〓 10歳

5年実技、座学 〓 11歳

6年実技、座学 〓 12歳

7年実地で訓練 〓 13歳

8年か引き抜き 〓 14歳

9年か就職 〓 15歳

となってます！

注) 陸士訓練校と士官学校は違います。

第5話 三年生に。

新暦57年。

桜が舞い散る新学期。訓練校に入って3年生……。

全員が9歳になるであろう年に入ったわけだが……。

俺はというと、すごく変わってるクラスメイトとルームメイトに囲まれていた。

「祝！ 同じクラス！」

「なのさあっ！」

叫んだのは赤いツンツン髪と、銀のボブカット。

「僕は悠深仁義！ はるかみい・・・さねよりでえーす

好きな者はアリア君とオーディーン師匠！！」

『うんうん・・・いい子に育った！』

彼女は悠深仁義。通称さつちゃん。

愛され系ラッキーボーイ・・・外見は、だ。

その実態は男装っ子で、中身は女の子。

本当の性格はクールで冷静な子なんだけど・・・。

一年生だった時に色々あって・・・。

オーディーンの弟子、そして表の顔がオーディーンの生き写しみたい・・・。

魔力量は多くない。武器は魔力鋼糸を中心とした支援魔法だ。

しかしそのわずかな魔力を最大活用し、諜報と暗殺を担う……。裏の顔の彼女はなんか怖い。そして本名は裏の時に呼ぶが……。今はいいだろう。

「……なんせ、我が主はアリア君なのですから。」

「ひゅーひゅーぐべらっ!?!」

こんな感じだ。茶化したトッキーはお仕置きな？

「最後は俺？ アルトリア・ムーンライト。」

トッキーの親友にして、さっちゃんの……。主？

好きな物はパスタ系とデニッシュかな。」

まあ俺は……。変わったところは無いな。

あ、デバイスの変更だ。

ガンブレード型デバイス『ブレイズエッジ』だ。

コイツの外見的な最大の特徴は……。

「しっかしゴツイなあ……アリアのデバイス。」

「だねー……僕もそう思うよ。」

待機モードのオミットだ。

なので、いつも後腰のホルスターに入っている。

無論、このまま訓練などを受けることに異論など無い。

前から使ってるストレージも全て補助に回ってる。

まあ……そこそこしておいてと。

「今年も頑張ろうね！ アリア君！ トッキー！」

「もちろんだよ。さっちゃん。ね、トッキー。」

「おつよ！ まかせとけ！ いつも通りの陣形で今年も行くぜ。」

フロントアタッカーが俺。

センターガードはトッキー。

フルバックがさっちゃんだ。

ガードウィング？ いない理由は後日話そう。

去年の訓練生内でのランキングはトップだった。

いやね。さっちゃんが特に性能良すぎてw

トッキーと俺がドンパチやってる間に、

いつのまにかあいてのフルバックを片付けてるといっう……。

「さっちゃんはどっちかってーとアサシンだろ……。」

「ああ！ ひどいんだアリア君！」

「ハッハッハ！ それは俺も思ったな！」

「えーん！ 二人がいじめるうー。」

そういつて友達の女の子のグループへ駆け出すさっちゃん。

あれに二重人格じゃない裏があるんだもんなあ……。

「大丈夫かな？」

「何言っただよいつもの事だろ？」

まあそうかと一人ごちてからデスクに深く座る。

なんか今年も大変そうだ……。

第5話 三年生に。(後書き)

今日は顔みせでした。

色々訂正。

第6話 母親と里親。(前書き)

テレジアがお母さんやってますW

シルヴィアの初登場はまだ先。

タイラーは・・・お仕事中ですW

第6話 母親と里親。

「どうしたのレステル？ 最近落ち着きがないわよ？」

「ええ？」

私はレステル・U・テレジアは、指摘された事実に関心を示さなかった。

「……はあ。そう思う？」

「ええ。」

「でもあなたもよ。リンディ。」

「……はあ。」

リンディの息子のクロノ君は一昨年からグラム提督の使い魔、

リ・ゼ姉妹に魔法の訓練を受けているという。

「やっぱり寂しいわね。息子に会えないと。」

「シルヴィアの方が私は不安よ、リンディ。」

あの子は一ヶ月に一度のペースでしか会えないのよ？

それに比べれば毎日家に帰ってきてるあなたの息子と、

一週間に一回会える私たちはまだ恵まれてるわ。」

私は紅茶を啜りながら言う。リンディは言葉を紡ぐ。

59

「あなたの事情は知ってるから何を言わないけど……レストル、」

「いいの、いいのよ……私はあの子を愛してる。」

息子も同然よ。アリアは本当に可愛いわ……」

リンディはふーんと眉を吊り上げる。

「うちのクロノのほ」

「もちろん！ クロノ君もすっごく可愛いわ」

「あらそうじ？」

・・・。

「おほほほほほほほほ。」

私はリンディにシルヴィアの近況を話す。

「日曜日にアリアは帰ってきてるけど・・・。」

シルヴィアの方が予定があってないなんて・・・。」

上層部の嫌がらせだろう。

ただでさえ部下や同僚からの信頼を得て人望の厚いシルヴィアは、そのおっとりとして糸目な外見に似合わず・・・。

度々命令違反や、上層部に直訴、果ては上司に殴りかかったこともある。

これが俗に言う『開眼』である。

管理局のお偉い方にはさぞ目障りな存在になってしまっているだろう。

だからといって放し飼いにすれば彼女を信頼する多くの人間が、管理局の上層部に疑いをかけたりする可能性も捨てきれない……。

だからこそその、飼い殺しである。

その過密ともいえるスケジュールはもはや殺人的だ。

そしてシルヴィアはちゃんと業務をこなしているし、

そのシフトの記録も保存し……。

『いつか公表するのよ？ うふふふ……。』

と黒い笑みを浮かべていた。

「外見に似合わずひどい事するわよね、シルヴィアは。」

リンディは緑茶に角砂糖を何個も入れて呑む。

・・・はあ。見てるだけで胃が痛いわ・・・。

「・・・ねえ、レステル。」

「なあにリンディ。」

「もしアリア君に子供が出来たら・・・。」

「できたら？」

「糸目な絶世の美形だと思わない？」

同感。何故かそう思った。

おまけ

「誰か呼んだ……？」

俺は後ろを振り向いた。が、誰もいない。

「……？」

……なんだ？ そう思って思考していると。

「あーちゃん！ 折角のデート兼お買い物なのにボーっとしちゃダメでしょ！」

「あ、ああ、ごめん。なんか聞こえてさ。」

「今日は世界の矯正を30秒で撃破したお祝いするんだから！」

……それにしても弱かったね。もっと強いと思ってた。」

「あはは……。」

「まあ元六課の人達とトーマ君にアインハルトに加えて、

ナンバーズの皆と私とあーちゃんに敗れない敵はいないかつ！」

「あれはオーバーキルだったね。特に父さんと母さんが。」

「魔石強化は卑怯だよ！ シグナムさんはなんかもう・・・」

「もう?」

「ゴットバード!! って感じだった。うん。」

「ゴットバードね・・・。」

「アリアお兄ちゃんは言わずもがなでしょ!」

「父さんはもう別次元でしょ。」

「あーちゃんはアリアお兄ちゃん以上って事自覚してる?」

「え。」

「・・・時間停止して24時間掛かる儀式魔法が出来た瞬間に停止解除して、

それを解き放った後今度は世界の矯正の時を止めて、

全員でリンチするように大声で呼びかけたあーちゃんは絶対鬼畜
!」

「え、ええつ!?!」

「あーちゃんはあ・・・ベッドでもあ・・・鬼畜だよねえ・・・」

「ちょ！？ 何言ってるのっ！？」

「いゃん / /」

「周囲からの視線が痛い！ なんかごめんなさい！」

「ていう事で、お買い物へGO」

「わっ！？ ヴイヴィオっ！？ 転ぶ転ぶ！」

「こないだ20になったしお酒飲むぞー」

さっきのは空耳かな。

背中にある大剣を担ぎなおしてヴィヴィオと手を取り、
クラナガンの歩道を俺達は走り始めた。

第6話 母親と里親。(後書き)

はい、最後のおまけは旧約を最後まで見ていただければ。

次回は・・・どうなるんでしょうかw

第7話 グランディア・アリーナ

5年前に作られたばかりの陸士第4訓練校には、

他の訓練校には無い、最新の設備が追加されている。

それが、第4訓練校、一番の名物。

『グランディア・アリーナ』

その防御性能の高い、堅牢なバリアジャケットと、安定した火力適正が売りのデバイス類を手がける……。

Global Armaments

略してGA社の技術を使って建設されたアリーナだ。

陸士の戦力向上に繋がればと善意で建設され、

内装は物凄いことになっている。

全教室に空調とシステムデスクはもちろん、

射撃魔法を基礎から応用、制圧まで訓練できるシューティングルームや、

かなりの広さを持つグラウンドに、開閉式のギミック式天井。

体を鍛えるジムもウェイト用の機材が充実している。

そして、「逆に一息つきたい」・・・そんなときは、

中央エントランスにある自販機で飲み物でも飲みながら友達と談笑も出来、

そこから行ける、超！ 大型の大浴場でさっぱり汗を流そう。

それが終わったら食堂で安くて美味しいご飯を食べ、

ふかふかのベッドのある綺麗でおしゃれなマイルームで、

ルームメイトと明日のプランを組みながら眠る。

そしてアリーナを管理する職員室・・・いや、

グランディアアリーナの全てを管理するアリーナ・オペレーション・
ルームも完備。

この陸士第4訓練校は簡単に説明すると、

海も顔負けの訓練施設。

寮と教室と施設が一体化した大型アミューズメントパークと茶化せ
るだろう。

海に設備を提供してるオーメルグループに対抗してGAも。
という意味合いもあるかもしれない。

もちろん払うものは払ってるらしいが……。

「陸には！ お金が……無い！

なーんて……大嘘かも……しれないねえー

アリア君と……ふっ……はっ……トツキーはどっか思っっ」

「だーいぶ……安く！ して、はあ！ もらって……るんじや
ないか？」

「んー、俺も……速度上げよう……トツキーと同じかな。」

放課後、この全ての施設は開放される。

第4訓練校のモットーは自主自立。

カリキュラムは一日16時頃プログラム終了。

あとは敷地から出ない限り寮の門限まで自由時間だ。

まあ、日曜日は町にいけるしその辺はゆるゆる。

「でも……ふっ……実技は……死ぬほど……キツイよな……」

そう。実技が半端無いのだ。

基本、4人組で1年を共にする。連帯責任や体罰なんて当たり前。

規則違反した日なんて、明日の太陽を無事に拝めるかどうか。

ようするに、やる時はちゃんとやる。

しっかりと自主自立！ がモットー。

現に俺達も今、ウェイトルームでランニングマシンを使っている。

「じゅめん……！ 僕……そろそろ……！」

「さっちゃん、無理すんなよ。」

「うん、ベンチに……いるね。」

一足先にマシンを降りたさっちゃんは後ろにあるベンチに。

「さっちゃんも頑張るね。」

「ああ、さっちゃんは努力家だからな。」

俺は肩をすくめて言った。

「女の子だし・・・無理しないか心配。」

「ま、唯でさえ4人じゃなくて3人のチームなんだ。

無理せずまったりだ。それが俺たちのモットー。」

・・・そいじゃ、いつものやってあがるっ。」

ランニングマシンを降りてアームレスリング用の台へ向かう。

んー。台に寄りかかっている先輩・・・8年生か。

「先輩、ここ空いてますか？」

「？ ああ、使って無い無い。悪いな。」

「すみません。」

「おう、気にすんな。」

台を空けてもらい、トッキーと向かい合う。

「魔力強化！」

・・・ズ・・・!

魔力が俺たちの体を薄く包み込む。その魔力量を見たのか周囲がざわつく。

俺たちは手を出して握手し、そのまま台へ肘を付き手を組みかえる。

「・・・レフェリーは俺がやる。」

さっきどいてくれた先輩が俺たちの手を包み込んで言う。

「3カウントだ・・・」

「2

ただ、気合を入れて。

「3

わわ・・・

わわ・・・

わわ・・・

「うおおおおおおおおおおお……！」

至福毎シユース一本のひと時を賭けた勝負がここに始まった。

第7話 グランディア・アリーナ（後書き）

またーりな訓練校ライフをお楽しみください。

次回もまったりっていうかゆっくりw

企業の出演としては今のところ、

GAグループ、オメルグループ、

インテリオルユニオン系統の出演は決定済みです。

第8話 休憩室での1コマ

プシッ！

綾時の手元からタブを開けた軽快な音が聞こえる。

そして一口ぐりと飲んで一言。

「やっぱり齎って貰うジュースは旨さが格別だな！」

「むう。。。。。」

負けた・・・拮抗したところを一気に崩されて終わった・・・。

「まあ、筋肉付いてるもんねえ、トッキーは」

「ふふん」

「・・・。」

「あれ？ アリア君悔しいの？」

ぬふふー・・・いいんだよ僕の胸でたーんと・・・」

「あーん悔しいよさっちゃん！」

俺はさっちゃんの胸へ飛び込んだ。

「だ、だだだだだいじょうぶだよアリア君！」

つきはきつとかてるよかてるたぶんかてる／／／／／／／／

「づうづ・・・。」

「おい、さっちゃんが裏になっちゃうぞ。」

あ、まずい。

「あ、ああ・・・主が私の胸の中へ・・・。

この鼻腔をくすぐる花のような香り・・・。

私よりもか細く華奢で今にも折れてしまいそうなこの体・・・
／／
」

なんだかすごいマズい予感がっ!?

そう思って離れようとした瞬間。

「ソウジシマスヨー、ソウジシマスヨー。」

「「うわあっ!?!」」

なんだか四角いダンボールみたいなのが足元を通り抜け、

俺とさっちゃんは無わずパツと離れた。

「なあ、あのダンボール被っててGAって書いてあるやつなんなん
だろうな。」

「びーくーる／／・・・お掃除ロボットにしては変なデザインだ

よねえ」

「んー、可愛いからいいんじゃない？」

さっちゃんもまだ顔が赤いけど平静を取り戻したようだ。

高い天井を見上げながら、一角のソファへ座る。

エントランスの角。一番空調が一年間を通して丁度いいところだ。

そこは俺達の定位置。

一つのソファに綾時が座り、低いテーブルを挟んだ対面に俺達二人が座る。

そしてすぐ側にはゴミ箱と、色々なものが出てくる自販機が二つ。

まさに絶好の定位置。神域の如きポジション。

定位置の侵害？ 侵害した連中は盛大に天誅させてもらった。

たとえ上級生であろうが。である。

そんな事ばかりやってるうちに『色々』と噂が広がって、
すっかりこの場所は俺たちのチームの定位置だ。

流石に傍にある自販機の使用には目くじらは立てないけど。

「何故か新入生もここを避けるよね……。」

「ああ、ここの自販機に来るのはお隣さん達だけだろ。」

お隣とは俺たちの後ろの1ブロックを占領してる、

ウィン・D・ファンション、

エイ＝プール、

ロイ・ザーランドの3人組だ。

俺たちと同じ4人組じゃないので色々と気が合ったりするけど……。

「アリア君、お隣お留守だよ?」

「今日はオフにしたのかもね。」

「めつずらしーなー・・・あのウィンディがオフ取るなんて。」

「でもでも！ えいぷーちゃんが最近胸が痛いって言ってたから・・・」

えいぷーとはエイ＝プールの事である。

「そっか、さっちゃんといいぷーは親友だったもんな！」

「うん・・・ちょっと心配だよ・・・。」

「胸だったらリンカーコアの痛みかもしれないね。」

ウィンディも訓練メニュー見直すかな？」

別のクラスなので演習をしたことが無いが、

ウィンディ達の訓練は相当キツイらしい。

話す分にはお堅いけどいい奴なんだけどなあ・・・。

と、適当にだべっていると・・・。

「ここで突然の写真集タアアアアアーム!!」

「.....」

「はい！ このね、温度差が非常に気になるところですが.....」

「「「いえええええええええええええええええい!!!」」」

「「誰だお前達っ!?!」」

どこからとも無く取り出したブ厚いアルバムをぱらぱらとめくるトッキー。

そして何故か周囲にいた生徒達が、床に正座してうずうずと.....

「トッキー、変な写真出したら唯じゃおかないからね.....」

「お前な、お前と悠深、二人合わせて金銀天使の写真なんかよ、

すぐに売り切れるぜ？ うへへへへへへへへへへ.....」

「「はあ.....」」

もはや半分諦めモードだ。

だったらトッキーの傍について出回るのを阻止しなければ……。

「さてみなさん！ 最初のお品物です！」

そう言って写真をアルバムから取り出し……。

「金銀天使の片割れ！！ アリアの幻惑マーメイドコスチューム！

！！」

「クロロホルム（キリッ）」

「か、返してっ！／＼／」

ひょいっ！ とトッキーが写真を揺らす。

「……！」

「……。」

周囲は何故か「また痴話喧嘩が始まったよ」と離れていく。

よし、今集まっていた奴らは後で死刑だ。

ひょいっ！ ひょいっ！ ひょいっ！

・・・。

「・・・ぐすっ・・・。」

「お、涙目パシヤリ！」

そんなトツキーを尻目に、目に涙を溜めてさっちゃんを見る。

さっちゃんは「うん。」と頷いて鋼糸を・・・。

「焼き増しを頼む
僕も欲しい!!」

「さっちゃんも本音と建前が・・・ってどっちも本音だったっ!?
//」

そうだった! この子も地味に変態さんだったんだ!!

「な、なんでみんなこんな写真欲しがるのっ!?!//」

「そりゃあ可愛いから。」

「何に使うのさ!!//」

「……そ、それは……なあ？……／／」

「えっちなのは嫌いだあああああああああああ！！！！／／
／／」

目から心の汗を流しながら中央エントランスから逃げ出した。

第8話 休憩室での1コマ(後書き)

最近なんだか男っぽいアリアも、

トッキーの手にかかれれば女の子に逆戻り。

次回は・・・バトルフラグでも立てようかと予定。

第9話 燻っている火種。(前書き)

精神年齢は総じて高いですw

訓練校だし、大人な考えの子もちゃんといいますw

ちなみにトツキーの宣言に集まった人たちの中には、

ちゃんと上級生や女の子、たまに教師、教官もいるとか。

さっちゃんのアリアのコンビは色々倒錯的な感じなんじゃ・・・？w

個人的にお似合いだとは思いますがけどね！

そしてフロム脳の皆へ。

少佐登場。

第9話 燻っている火種。

ああ、気付いてたよ気付いてさ……。

俺の写真が、その、夜の……お、おおお、おおお、おおかずになってるなんて／＼／

しかも売れ筋トップランク……。

「ふう……ぐすつ……。」

とぼとぼとあても無く道を歩く。

ああ、後腰のブレイズエッジの重みしか信用できなくなっちゃっよ……。

ズゴオ……ッッ!!

・・・？

これ・・・グラウンドから・・・？

二階の通路から観客席へ降りる。

そこには制服をピッチリ着た子が観客席に座ってデバイスを組んでいた。

俺はその子の隣へ座る。

「・・・？ ああ、アリアか。」

「ティード、こんにちは。」

「ああ・・・聞きたいのはこの騒ぎの原因か？」

「良く分かってるね。」

ティードは同じ年とは思えない落ち着いた口調で言う。

「上級生の『場所取り』……じゃない？」

「……何年生？」

「三ツ星。態度からして『転入生』」

「9年か……大人気ない……。」

「あの子達は2年……。」

あの9年生は別の訓練校からの転入生だろう。

総じて設備を求めて転入してくる「グループ」はタチが悪いと決まっている。

こうやって規則の緩い俺たちを舐めきって、

他の訓練校から移籍してきて我が物顔で設備を使う。

そんな奴らは群を成さないと強く振舞えないからグループになる。

そしてそのグループはタチ悪いって事だ。

正式に移籍する際に面接や素行調査せず、技能のみ見てるから尚更だ。

「中途半端に強くて吠える奴らは・・・僕は嫌いだな。」

「・・・ちよーつとそう思わないか？　アリア。」

「ちよつと好戦的な思考が過ぎると思うよ、ティード。」

「・・・ああ、分かってるけど・・・。」

「ちなみに俺も『同感』だよ？　行ってきます。」

「あ、ちよっ!?!?・・・僕まだデバイスの調節してないのに・・・。」

「

そう言ってグラウンドの客席から飛び降りた。

と、とっつっつても困りました・・・

明日テストだから射撃魔法を練習しないといけないのに・・・。

急に地面に9年の人たちが魔力弾を打ち込んで威嚇してきました。

「悪いけどさあ、俺たち使いたいんだよねー。」

「頼むよー。」

「明日テストなんだよねー・・・。」

「そうそう、だから俺たちに譲ってくれないかなー？」

「断るわけないよねー上級生に。」

僕たちもテストなのに・・・。

「い、ごめんなさい、私たちもテストなんです・・・。」

「いいから譲れっつてのー!!」

「きゃあっ!?!」

隣の女の子が押され地面に倒れた時。

「その先輩方ー!」

「「「「「ああ?」「」「」「」

「決闘しましょうよー!」

3年生の先輩が、5人の9年生に決闘を・・・

決闘っ!?!

え、えっと、学年が下克上する場合は上級生に拒否権は無いつていう・・・。

「「「「「・・・は?」「」「」「」

啞然とする9年の先輩達を尻目に、

大きなデバイスを後ろの腰に下げた3年の先輩はどこかに通信を入れました。

「3・C、アルトリア・ムーンライトです。AOR、聞こえますか？」

『こちらAOR・・・ああ、また君ね？』

アリーナオペレーションルームって事は本気でっ!？

「目の前の9年生5人に決闘を申し込みます。」

『了解しました。・・・9年生、聞こえましたね？』

「叩き潰してやる!!」

「勝てると思ってるのか？」

「雑魚が生きがるなよ？」

「違いを見せてやる」

「こいつ頭おかしいんじゃないか？」

・・・あ、あわわわわわ・・・。

そのとき、「全校放送で」放送が響き渡った。

『ただいまより、グラウンドにて、1対5の、デュエルを、行います。』

敗者への、ペナルティは、日曜日の、休日に、特別奉仕活動。

メンバーは、ブルー、3-C、アルトリア・ムーンライト対……
』。

もしかして大変なことになっちゃたんじゃ……？

『……となります。なお、決闘への、「乱入」は、

人数規定により、双方、4人、まで可能です。

決闘は、10分後に、開始します。

座標は、アリーナ内部、グラウンドの、右、退出通路、付近です。

』

呆然としながら僕達が間延びした放送を聞いていると、そのムーンライト先輩が歩み寄ってきた。

「ほら、みんながグラウンドの一部は俺達が使つから、

ほかの場所使つて練習してね？」

そう言つてそそくさとデュエルエリアへ向かつてしまいます。

「……あ！」

さっき突き飛ばされた女の子が声を上げました。

「金髪に、待機モードをオミットしてるデバイス……。」

女の子なのに「俺」……って去年話題になった……。」

s i d e アリア

「ねえ、先輩方。」

「あんだよ?」

「今年から転入してきたみたいだからわかんないかもだけど……。」

……ジャキーン!!

ブレイズエッジをホルスターから引き抜きつつ剣を展開。

「今年の3年生の結束手、舐めないでね?」

開始のブザーが響き渡った。

side 悠深仁義 本名・・・クワイア。

中央エントランスいつもの場所。

「綾時。」

「ああ。」

放送が聞こえた瞬間、思考を変える、仮面を解く。

「主が呼んでいます。」

「おお、さっちゃんじゃなくて・・・。」

「・・・今はクワイアです。参りましょう。」

「おつよ。」

綾時はパンを啜え立ち上がり、私は髪をロングヘヤーに戻した。

銀の腰まで届くストレート。あの人が好きと言ってくれた髪型。

「ただいま参ります。主。」

「待ってるよアリア！」

sideティード・ランスター

アリーナ内部グラウンド観客席

「さあて。」

はあ・・・ま、煽ったのは僕だし・・・。

デバイスセッティング用のPCを閉め、

近くにいた同じクラスの子に荷物を預ける。

「ランスターの弾丸に撃ちぬけないものは無い・・・ってね。」

僕は観客席を一つ飛びし一気にデュエルエリアの結界へ乱入した。

「行くよ ミミラー ジュトライン」

『OK』

side ウィン・D・ファンシヨン

アリーナ内部グラウンド更衣室前廊下。

「……む？」

ふむ……あいつが戦ってるのか。

1対5とは無茶をする……。

「エイ、ロイ。」

「な、なんですー？ あ、乱入ですか？」

「早く行かないと定員になっちまうぜ？」

「感謝する。」

私はグラウンドの方へ駆け出した。

エイが不調だから今日は3人でランニングのみだったが……。

久々に暴れられる。

「レイテルパッシュー！」

『Set up』

次回、初戦闘。

第9話 燻っている火種。(後書き)

まあこんな感じですよ W

今日は出かけ先から友達のPCで書いてます W W W

次話、ご期待下さい W

誤字修正。

第10話 アッパービート。

「ブレイズエッジ!!」

『Set up』

全身がライトニングゴスチュームに包まれる。

俺はそれと同時に走り出した。

「なっ!? はええ!!」

「うるたえんな!! これしき訓練どおりに……!!」

「『真空破』!!」

振りかぶったブレイズエッジの刃が真空の刃を生み出し、

敵へ接近。相手をバラバラに拡散する。

「へっ！ 多方向からの攻撃を招くようなマネしやがって!!」

全員からの魔力弾が俺を中心に迫る。

が。

「『クロスファイア・・・シュート』!!」

おびたしい数のオレンジの弾丸が地面に突き刺さり、

巻き上がる土砂と魔力弾自体で大きく数を減らす。

「ティータ!」

「行って!」

俺は敵の一人に切りかかろうとし・・・。

「『フラッシュインパ・・・』」

「どこを見ている？」

ギャキイイイイン！！

「「「「・・・へ？」「「「「

ブレイズエッジは目くらましのため切りかかった相手の足元に突き刺さした。

そして、両手には輝くSの字を二つに割ったような双剣。

『絶影』

見えない神速の切り込み。相手は糸が切れるように倒れた。

攻撃が終了した瞬間双剣は消え、ブレイズエッジを磁力魔法で手元に戻す。

残りの4人が再起動したとき、更に俺は指示を下した。

「クワイア。」

「抜かりはありません。」

「はっ！？ これ・・・魔力ワイヤー!!」

俺の背後に現れたさっちゃん・・・もといクワイアは、

魔力ワイヤーで二人を一気に捕縛し・・・。

「弦想曲『かごめかごめ』」

次々とワイヤーが撒きついていき、最後にはさなぎのような形へ。

「二人捕縛！」

「ビューティフル」

「感激の極み。」

ティードと俺が銃弾で弾幕を張り、

クワイアが相手の魔力弾をサナギとワイヤーで防御。

そして上空から一つの影が。

・・・あ。

「クワイア、ティード!! 離れて!!」

振り返って後一つ……！

「油断したな……ガキがつ！！」

「！」

後ろには光を称えた杖を持つ最後の一人。

「『ファントム……」

』」

ヤバイ。直撃……。

「『メリエスキャノン』！！！！」

そこへ真横から二本のレーザーが渦を巻きながら飛来。

吹き飛んだ先輩の直線状にブリツツアクションで現れた影は、

「葬らん!!」

ガキイイイイイイイン!!!

そのままホームランの要領で上へカチ上げた。

遙か上空へ昇っていく先輩。

「『ウインディ！』」

「あいつはリーダー格だったな……。」

特徴的な大剣を担ぎ、遙か上にいる先輩を見てウインディーは言う。

「……切り刻め。」

「『イエッサー！ 少佐！』」

全員が悪乗りして……。

side AORオペレーター訓練生。

わ、私はその時、放送を担当した後・・・

先輩が受領した決闘を見たんです・・・。

ええ、次々と3年生の襟章をつけた子達が集まって・・・。

特に最後乱入した子が貫通型のキャノン砲を撃った後は悲惨でした・
・・・。

ええ、ええ。

大剣で上へ打ち上げられた後……。

まずは金髪の子が「ただの」ジャンプで10mくらい飛び上がったから……

空中で切り刻み 地面へ叩き落とし 地面にクレーターが出来て、

茶髪の大人しそうな子が頭踏みつけ 股間へ二丁拳銃乱射 上へ蹴り飛ばし、

銀のお人形さんみたいな子のサナギ巻きつけ 叩き上げ 叩き降ろしの繰り返し、

おまけに赤いツンツン髪の子がサナギを思う存分サンドバックボレーシュート、

最後の子がリチャージしたであろうキャノン砲でサナギを失速させた後……。

ええ、全員がいつの間にか一箇所にまとめられてたんです。

そこへ……赤い髪の子が……。

あー……えっと……。

『派手に行くぜ……どっかああああああああああん……!』

なんだか大きい握りこぶしの一撃で、

その5人を首までグラウンドに埋めました。

『勝者、ブルーチーム。敗者は週末、特別奉仕活動となります。』

その後、その5人組は負け犬という看板を下げたまま、

門限を過ぎても帰らないことを不審に思った寮監が探しに来るまで、

そのまま地面に埋まり続けていたと言っ。

第10話 アッパービート。(後書き)

次回はまた中央エントランスでの一幕？

もしくは戦後を書きますw

第11話 食堂はもはや戦場。

一つのテーブルに5人が座る。そこには一人一品の料理が並べられ、
彼らは各々好きなジュースと垂涎モノの夕飯で勝利の祝杯を挙げる。

円形のテーブルに座る中で一番目を引くのはこいつだ。

赤いツンツン髪、鳳凰院綾時。

そしてその隣がさっちゃんこと……。

銀髪の男装っ子、悠深仁義。本名……クワイア。

その隣はそれと相反するような外見の……。

金髪三つ編みの男の娘、アルトリア・ムーンライト。

その隣はきちんとした優等生チックな・・・。

茶髪で天パの男の子、ティーダ・ランスター。

その隣は黙々とハンバーガーを食べ続ける・・・。

小麦色の髪をショートにした女の子、ウィン・D・ファンション。

第2訓練校からの転入生の9年生5人を呆気なく撃破した5人組。

彼らは決闘に勝ったご褒美として食券一週間分が授与される。

そんな9歳の彼らの食事と会話風景を除いてみよう。

side台詞オンリー。

アリア「みんな今日はありがとうね？」

トッキー「気にすんな。」

ウィンディ「ああ、久々に発散できた。」

ティーダ「煽ったのは僕だしね。」

さっちゃん「よし、ティーダ覚悟。」

ティーダ「ええっ!？」

さっちゃん「あまつさえアリア君を決闘なんかに……。」

トッキー&アリア「おいおい。」

ウィンディ「……もぐもぐ」

さっちゃん「喰らえメントス爆弾!」

ポイツ! ポチャン……シュワワワワワワ!……!

ティーダ「僕のコーラがああああああああああっ!!!!?」

アリア「うひゃあっ!?!」

トッキー「まさかのメントスwww」

ティーダ「僕は平気だけどアリアが……」

さっちゃん&トッキー「!!」

ウィンディ「……まぐまぐ」

アリア「あ……制服のズボンが濡れちゃった……」

さっちゃん「じゅめんなさい……」

アリア「平気平気。0カロリーでしょ?」

ティーダ「あ、ああ。だからべたべたにも……」

アリア「成らないから平気　クリーニング出せるしw」

さっちゃん「……」

トッキー「どうした?」

ウィンディ」……むぐむぐ

SATTYAN「綺麗に全て舐め取らせてもらいます……！」

バツ！！
(SATTYANが屈む音

ガッ！！
(アリアが口を抑える音

ギリギリ……(拮抗する音

アリア「さ、さっちゃんっ！？」

ティータ「と、とりあえず布巾を持ってくる！」

トッキー「早くしろ……！ アリアの貞操(主に太腿)の危機だ……！」

ウィンディ「……。」

メキメキメキメキイ!!!

SATTYAN「痛い痛い痛い！ 僕の頭が軋んで……。」

パキヨツ！

SATTYAN「ちんぽっ!?!」

……ドサツ。

ウィンディ「騒がしい。」

アリア「あ、ありがとうウィンディ……。」

ウィンディ「ああ、早く部屋に戻って洗濯だけでもしておいたほう

「がいいぞ?」

トッキー「ああ、その死体も持っていけよ?」

アリア「うん。」

ウィンディ「? 男と女なのに相部屋なのか?」

トッキー「ああ。なんでも男女共に奇数になっちまってな。

部屋も余ってないから、男女で仲がいいこの二人が相部屋になっただ。」

アリア「女の子だし色々気を使うけどね。」

ウィンディ「ふむ・・・こいつは裏の時は頼りに成るからな。」

トッキー「アリアも裏の時の銀髪ロングにはいつも見とれてるしなあー?」

アリア「へっ!?!?/ / / .. ああ、うん。だからこの子は『悠深』なんだよ。」

トッキー「(リアクション薄いな)」

ウィンディ「と、早く洗濯して来い。」

アリア「はい ほら、さっちゃん?」

さっちゃん「……むっ……すっ……。」

アリア「……クワイア。」

さっちゃん「はっ!」

トッキー「起き上がりから起立までが見えなかったぞ……?」

ウィンディ「ああ、私もだ。」

アリア「お洗濯物したいからお部屋戻ろ?」

さっちゃん「畏まりました。」

アリア&さっちゃん(クワイア)退場。

ティーダ「おい……ってあれ？」

トッキー「あの二人は先に上がった。」

ティーダ「なんだ……あ、ウィンディ、コーヒー。」

ウィンディ「ありがとう……わかってるじゃないか。」

ティーダ「うん。アイスでミルクと砂糖タップリが好きだったよね？」

ウィンディ「ばっ!?!?! 言うな！」

ニヤニヤ……。

トッキー「……へえ……??？」

ウィンディ「ええい！ 甘いもの好きで悪いかっ!！」

トッキー「ナンノコト？」

ウィンディ「ニヤニヤするんじゃない！ ティーダ！ お前……
!！」

ティーダ「……めんウィンディ！」

ウィンディ「ぬがあああ！！ レイテルパラ……」

ガシッ (ウィンディの肩が誰かに捕まれる音。)

「……？？？」殊勝な羊ね……自分から特別補習受けたいだなんて……」

ティーダ「！ シャミア教官！！」

シャミア「ここではデバイスの使用は禁止よ？」

ウィンディ「……は、はい……(ダラダラダラダラ……)……」

トッキー「南無……。」

シャミア「……じゃあ、教官室へ行きましょつか。」

ズルズル (ウィンディをシャミアが引きずる音。)

ウィンディ「え、ぐ……くううっ!!?」

トッキー&ティータ「……合掌」

ウィンディ「ほ、鳳凰院！　助けてくれたら写真集を撮らせて・
」

トッキー「切捨てごめえええええええええええええええええん！！
」

ティーダ「驚くくらい欲望に忠実だっ！？」

シャミア「ふんっ！」

ズドンッ！！！！

（ シャミアの細くしなやかな足がトッキーの股間を撃ち碎いた音。
）

トッキー「まあそつなるよね。」

ドサツ・・・ッ

ウィンディ「鳳凰iiん！！
！！」

ティーダ「待つてっ！？ スラッグガンみたいな音したよっ！？」

シャミア「二人まとめて教官室ね。」

ズルズル……（トツキー&ウィンディ退出。）

ティード「……僕も戻ろう。」

こんな日常である。

第11話 食堂はもはや戦場。(後書き)

トッキーと少佐ファンのみんな・・・ごめんなさい・・・。

トッキーさん特にゴメンナサイ・・・。

第12話 遅いけど熱中症には気をつけよう。

新暦61年。

夏。

ミッドチルダは地球に天候が良く似ている。

そしてやっぱり熱い、暑い、厚い、篤い……。

最高気温35度。天気は……。

「ド快晴ですよこのヤロー……。」

トッキーがグラウンドを走りながら愚痴る。

「……死にそう……。」

俺も言葉を漏らした。

「頑張りよ二人とも……きつと……きつともつすぐ終わる……。」

そんなエールを送ってくれるさっちゃんもがすでに危なそうなんだけど……。

俗に言う7年生で13歳になって、もうすでに夏である。

何が変わっただろう。

1、16歳で教官を務めていたシャミア教官が、

先日20歳を迎えたと同時にド・ス教官とゴールインした事。

2、最近、三つ下の後輩の面倒を良く見る。

ヴァイス・グランセニックだ。あいつの射撃の腕はいい。

3、あと今年の二学期からは実地訓練……実際に勤務をする事になる。

基本的に陸士部隊の下っ端としての手伝いだが。

この辺は人手不足の地上ならではだろう。

もう、この時点で能力が高かったら引き抜かれるよつだ。

んー。俺個人としては15までここにいて、

ちゃんと面接とか、そういうのを受けてからだね・・・。

「おおーい！！ その班遅れてるぞおおおおおー！！！！

しっかり走らんかああああー！！！！」

「「「さーせん」「」

「舐めてんのかああああああああっっ！！！！！！」

「「「うへへー!」」」

「上等だ貴様ら……ってうへへってなんだっ!?! うへへってっ
!?!」

教官がなんか言ってるけどスルー。もう走りたくない……。

「さっちゃん、平気?」

「うん……平気……!」

結構体力は付いた感じのさっちゃん……ないすばでーな男装っ子
に。

普段はサラシ巻いてるけど……部屋着は……マズイ……。

それと、あー、まあ、うん。

すごい可愛いです。身長抜かされました。

・・・？

「身長抜かされた！！」

「昨日と同じ、事・・・ふう・・・言ってたよ？」

「ああ、よほど、悔しいんだなつと・・・。」

「もう！ これだから！ これだからさっちゃんは！！」

「さっちゃん。アリアの様子がおかしい。早く走りきろつ。」

そんな発言をするのはトッキー。

数年前、炎熱変換が確認された。後天性のモノらしく、初めて使ったときは俺の髪を燃やしかけた。うん。

高身長になってイケメンのオーラが滲み出てる。

そして彼女はいないけどリア充だ。

そしてこの俺は特に変わってない。

背が伸びて、少しセイバーさんに近づいたくらいか。

あー。頭がクラクラするよー。。。

「。。。。。」

「。。。。? アリア?」

「アリア君?」

中央エントランスロビー

放課後。

「珍しいな。お前が熱中症だなんて……。」

「あーうー。」

「気をつけてね、アリア君。」

何故か通りかかった人が鼻から愛を噴き出していく。

なんでだ……？

「・・・お前のその際どい格好だからだろ？」

「シャツ1枚と短パンだけど・・・？」

「違うよトッキー。タレ目になりつつどこかうるうるとした目元と瞳。まるで情事の最中のように薄く赤色に染まる肌。万歳して氷嚢を当ててるから若干沿ってる背中にシャツから見えるへそチラ、腋チラ、極め付けは短パンの履き具合だよ。チャックはしまってるけどトップのボタンは閉めてない・・・故に見えそつで見えないパンツ！ さあ！ 寝返って！ こっち向いて身じろきしてっ！・・・成るわけだよ。どう？分かった？ あ、トッキーそのドーナツ取って？」

「途中からSATTYANに成るかと思った。」

「うん。俺も。」

トッキーの言葉に同意する。そしてトッキーはドーナツを取る時、懐に手を伸ばして隠し撮りの姿勢・・・だが甘いな。

「俺のカメラが・・・っ!？」

すでに破壊させてもらった。

第12話 遅いけど熱中症には気をつけよう。(後書き)

オチツテナンスカーw

第13話 熱中症の正しい処置。

こんにちは。主、アリア様の従者、クワイアです。

性格が違う？ ええ、私は今・・・全力で裏の顔を出し、

アリア様に処置を施しますから。

エントランスロビーでは落ち着けなかったようなので、

私達のマイルームへ移動しました。

教官には、私もアリア様も明日は休むと伝えてあります。

そしたら教官は・・・。

「面倒を見てやってくれ。悠深。お前ら、仲がいいだろう?」

・・・。

「ねって、お世話していいフラグですよね。」

「ふう・・・アリア様？」

「・・・んうー・・・。」

今では私のほうがかなり身長が大きくなりました。

私はアリア様を背負ってマイルームへのドアを開けます。

しばらくは悠深は封印です！

・・・まずはソファで座らせます。

「・・・（とろーん）」

・・ふう。落ち着け私。例えそのとろんとした表情がすごくエロいとしても、

決してそんな風に感じてはいけません。主と従者で今は十分なんです。

・・・えっと。熱中症の主な応急処置・・・。

『軽度の熱中症・・・ですか？』

正しい処置としては首筋など血流のいい所に氷嚢を当てたりする。

生理食塩水に近い成分の水分を補給するとか。』

『すみません、エイ。助かります。』

『いやいや！マジメなさっちゃん見たらほっとけなくて』

『いい友人を持ちました。』

『えへへ。あ！そうださっちゃん！』

『・・・？』

『37度以上のぬるま湯に浸かるのもいいそうですよ？』

・・・？

『37度以上のぬるま湯に浸かるのもいいそうですよ？』

聞き間違い・・・か・・・？

『37度以上のぬるま湯に浸かるのもいいそうですよ？』

なん・・・だと・・・？

「け、決して他意はありません！！／／／　だ、大体！／／／

肌などアリア様を襲う時にいつも晒し晒されではないですか！／
／／」

未だに実行には至っておらず、寸でのところで目を覚まされてしま
いますけど。

何故平気で襲えるのに風呂に入れるのは焦るのか？

・・・ぜ、全裸を見るのは・・・初めてなのです／／／

で、でもまずは服を脱がさなくては……。

「あ、アリア様、服を脱がしますよ？」

「……んうー……。」「

コクリと頷く……肯定ですね、わかりました！

……さあ、どこから脱がそう。

……残念ですが、何もありませんでしたよ？

その後は・・・。

「・・・。」

何をやってるクワイア。体を洗うのだろう。

い、いやいやいや。。。。

は、早くしないと風邪を引いてしまう!!

。。。。

「・・・。」

「・・・。」

アリア様は今、ソファにとろーんと座って、ごしごしと頭を拭かれています。

「ほら、入れてあげたよ？」

「すみませんティーダ……。」

ティーダはどこか慣れた手つきでアリア様の頭を拭く。

偶然部屋に訪れたティーダにやってもらいました。

彼ならば劣情も抱かないでしょうし。

「いやいや、むしろ洗ってたら困るよ。(アリアの真摯的にね。)

「……どういう意味ですか。」

「なんでもないさ。ほら、アリア、皆からのお見舞い品だよ?」

……?

ティーダが持つてる袋には、実に様々な物が。

「僕はこれを届けに来たんだ。」

「……てーだ……ありがとう……。」

「うん、どういたしまして。」

「何入ってるんでしょう……。」

「あ、僕も気になる。」

「見てないんですか?」

「うん。何が・・・。」

私、アリア様、ティーダの3人で中を覗いてみる。

7 - C トッキーより、アクエリアスとソイツシュとアイスクリーム（バニラ

7 - C ウィンディより、アイスクリーム（チョコ

7 - C エイプルより、おかゆの元。（離乳食

7 - C ロイ・ザーランドより、アイスクリーム（エスプレッソ

4 - C ヴァイス・グランゼニックより、アイスクリーム（キャラメル

8 - A 霞スミカより、アイスクリーム（イチゴミルク

シャミア教官より、アイスクリーム（ラズベリー

ド・ス教官より・アイスクリーム（マロン）

エミール技術仕官より、アイスクリーム（ブルーベリー）

銀翁こと、ネオニダス教頭より、アイスクリーム。（抹茶）

「腹壊すわ!!!!!!」

なんですかコレっ!? しかもなんか教頭からもアイスが……。

ちよ、誰ですか送り主不明で『冷えた牛乳』送った人!

それとエイ、あなたは抜けています。今度みっちりお話ししよう。

「……わぁー……あいすがたくさん……。」

「……。」

……はぁ。

「元気になったら食べましょう、アリア様。」

「んうー。」

「じゃあ、僕は戻るね？」

あ。

「ありがとうございましたティード。」

「いや、気にしないで？」

「じゃあ、最近君もお疲れみたいだし・・・」

・・・ゆっくり主従で仲を深めてね

「言われずとも、です。」

ティードは何考えてるかわからないんですよ・・・。

私はアリア様と同じベッドに入って考える。

その寝顔は本当に可愛くて。

「……………」

「……………ZZZ……………しゅーまい……………」

「……………ふふっ。」

本当に、愛おしい人。

その唇に、自らのを重ねる。

「……………可愛い寝顔……………」

「……………ZZZ……………おっ、ちゅーちゅ……………」

「……………」

┌	┌		
•	•	•	•
•	•	•	•
•	•	•	•
Z	Z		Z
Z	Z		Z
Z	Z		Z
└	└		└

第13話 熱中症の正しい処置。(後書き)

そんなこんなでさっちゃん視点。

たまには、いいでしょう？w w

第14話 病み上がりなんだけどな。

夏真っ盛り。

結論から言つと、俺は復活した。

BGM 初音ミク 『ハト』

「
〳〵〵
〳〵〵
」

機嫌よく鼻歌を歌ってお買い物。珍しく一人だ。

クラナガンの街中はまだ近代化……ってヤツだろうか。

今の服装はライトさんコスチューム。

うん。BJじゃない、普通の服装です。

腋の下がスースーするけどこれが一番動き易い。

そんな事をこの間チラッとさっちゃんの前で言ったら・・・。

『ふざけんな!!--!』

そう言っつて俺のクローゼットを開けるさっちゃん。

俺は冷えタオルを首へ当ててつつため息。

なんでも、さっちゃんの知り合いが俺の不調を聞いて届けてくれたらしい。

ありがたく使わせてもらっている。

さっちゃん。中身を検分中。

ジーンズと袖なしYシャツとショートネクタイ（黒）と、

制服一式が4着くらいとホルスターの予備とこの服の二着目しかないのに。

『そんなアリア君修正してやるっっ!!』

と危つく貞操の危機になったけど無事に生還して今ここにいます。

その後さっちゃんは財布を握り締めてどこかへ消えていった。

うん。ヒュババツ!!……って擬音が似合うくらい……。

まあ、さっちゃんだし。としか思わないけどねw

トッキーたちは驚く。あれがジャパニーズNINJAかって。

・・・なんか違うと思うのは俺だけなのかな。

でも真剣にさっちゃんとなんじんの関連性を語るウィンディとトッキーを前に、

そんな無粋な事は言えない訳であつて。

「ま・・・その内収まるだろうなつと・・・。」

『アリアちゃんくん通りすぎちゃっうよー?』

「ああ、ごめんオーディーン」

『平気平気ー』

来た場所はクラナガン中央の大型デパート。

この辺で一番大きく、今日はここへあるものを食べに来た。

『限定パフエ?』

「うん。新しいのが出たらしいから・・・」

『私も食べたいー』

「んー、いいけど。」

『やったあー』

「お小遣いからその分減るけど。」

『解せぬ。』

そして裏路地へ入ってオーディーンをエコモードで召喚。

「「待ってるよパフェ！ うおおおおおおお！！！！！」」

なんだかんだで息のピッタリな二人である。

サーティ・ツーというそれなりに有名なお店。

そこのベランダっぽい屋外の3人席に陣取り、

ブレイズエッジのホルスターを空いてるイスへ置く。

注文した後、オーデインは何度も何度も。

「早く来ないかな？」

「そうだね」

と繰り返す。これがあの全知全能だと・・・？w

「しかしアリアちゃんも大きくなった。うん。」

「あはは。13歳だしね。」

「いやー・・・。それにしても先週はごめんねー？」

そう。熱中症になったときオーデインは俺の中にいなかったのだ。

なんでも召喚獣の友達と遊園地に行ってきたらしい。

本当にフリーダムだな・・・。

「へーきへーき。さっちゃんが面倒見てくれたし。」

「そっかそっか。なら平気だね」

オーデインは基本、武器のみの行使となる。

それはする意味がないというのもあるけど、

オーデインは俺のカードの一枚だから一目にあまり出したくないというのもある。

召喚するのはエコモードに双剣を持たせて年に4回くらい・・・かな？

俺達の1つと2つ下の後輩が血気盛んで、よく決闘を吹っかけられる。

人手が足りない時とか、調子が出ない時に召喚したり。

はっきり言ってオーバーキルだけでもw

「ねーねー、アリアちゃん・・・。」

「んー？」

考えてる間にオーディエンスがどこかの一点を見ていた。

「いやな予感がある・・・」

「・・・？ 特に何も感じないけど・・・。」

「・・・！」

オーディーンはテーブルを見ていた方向に蹴倒し、

俺へ覆いかぶさった。

その瞬間。

第15話 反管理局組織。

アリアが出かける二ヶ月前。

反管理局組織。

管理局制度を非難し、有象無象の嫌がらせ。

時に大規模のテロなども行っていた。

あまりの被害に堪忍袋の緒が切れた本局は、

今までの事件の『被害』の全てを公表し、大義名分を得たところで
。。。

管理してゐる次元世界全てにおける粛清を実行。

特に反管理局組織の事実上トップであつた『自由の短剣』は、
構成員の殆どと、トップを含む上層部全てが『行方不明』となつた。

・・・この不審な点は置いておこつ。

トップを失つた反管理局組織は即座に瓦解・・・。

するかと思われた。

肅清から一カ月後、また新たなリーダーが出てきたのだ。

その人物は、反管理局思想を持つ人々を『憎しみ』で纏め上げた。

これが、反管理局グループ、『ヘイトレッド・チエイン』

通称、HCの出現である。

もはや、彼らに以前の気高い革命の魂は無かった。

ただ管理局に甘んじる人々を喰らい、殺し、蹂躪する獣へと成り果てたのである。

そしてその『お披露目会』は……。

日曜日の笑顔溢れる大型デパートを。

地獄に変えると同時に始まった。

s i d e アリア

「…………ん…………うう…………。」

目を覚ますと同時に身構える。

先程の爆発は明らかに大規模の爆発だった。

「…………テロ…………?」

それしか考えられない。

「…………! オーティーン!」

彼女はエコモード…………小さい少女のまま先程の衝撃を受けた。

耐えられるはずも無い。気絶してしまっている彼女を召喚破棄し、近くへ落ちていたガンブレードのホルスターを身に着けB Jを展開する。

・・・同時に。

魔力反応を捉えた。それも大多数の。

向かってきているのだ。この現場に。管理局の対応はこんなに早くは無い。

今の管理局の情緒、世界情勢、テロという出来事。

そして、向かってきている多数の魔力反応。

それが意味する事は。

「……無差別攻撃テロ……？」

すなわち、民間人の虐殺……？

「救出と護衛を急がないと……！」

俺はすぐに管理局のデバイスへ『全周波』で連絡を始めた。

「これが聞こえる方……！ 陸士第4訓練校のムーンライトです……！」

大型シヨッピングモール&デパート、『ウインディア』がテロを受けました……！

しかも、魔導師が大多数向かってきています……！！

最悪、無差別の民間人への攻撃が始まるかもしれない……！！

誰か……！ 誰でもいいから……！！ 助けを……！！

ブツン。と通信が遮断される。

「ジャミングッ!？」

辺りを見回すと。

「・・・生き残りか。」

「外へ知らされたが計画通りだ。」

「ああ。」

・・・ああ。

「
確実に殺せ。全て・・・」

確定だ。

「ブレイズエッジ!!」

戦闘、開始。

第15話 反管理局組織 (後書き)

誤字修正。

最後の敵の台詞に「」を追加。

第16話 止まらない涙。

「ブレイズエッジ!!」

魔力コーティングを施し、容赦なく切りつける。

一人はデバイスごと切断。そのまま鳩尾へ一撃した後、

スライドターンでやや位置を右へずらし、首筋へ一撃。

気絶し倒れる一人の影から、剣型のデバイスを持つもう一人が剣を振り下ろす。

気絶してる障害物を蹴飛ばして道を空け、左手を翳す。

「『ルイン』!!!!」

「なっ・・・」

「

キュボウ!!!!

相手が吹き飛んで間合いが開くが・・・逃がさない。

ガンモードにシフト。魔力の弾丸を数発撃ち込む。

その弾丸は狂うことなく額、喉、鳩尾へと直撃し意識を刈り取った。

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・っ！」

初めての『実践』、息が上がリ動悸が激しくなるが、すぐに息を整える。

「・・・救出を・・・」

すぐに駆け出す。間に合わなくなるから。

・・・だけど。見つけてしまった。

店が多く並んでいた場所。

さっきまで、笑顔が溢れていた場所。

俺達・・・陸士が、守らなくちゃいけない場所。

そこはもうすでに。

全身に火傷を負い、上半身だけの青年が倒れ。

首の無い息子を抱き締めたまま絶命してる母親。

さっきメニューを注文したウェイトレスは腹部に大穴が開いていた。

小さい体の右半分が無い赤子が路上に転がっていて。

「……あ？」

何か踏んだ。

そう足元を見たら、

「……あ……ああ……」

そこには、煤で汚れた結婚指輪を付けた『左手』だけ。

「・・・間違ってる・・・」

握られたブレイズエッジが軋みをあげる。

「こんなの！！ 間違ってるよ！！！！」

涙が止まらなかった。もう、みんな死んでる。

「なんで！ こんなに、人が死ななくちゃいけないのっ！！！！」

一時間前の平和は。

「なんで!… なんで!… なんで!…」

もう、戻ってこなくて。

膝が崩れ、両手を地面に付き、ブレイズエッジを地面に取り落とし
ても。

涙は止まる事を知らなくて。

「きゃあああああああああああああああああああ……!…」

「……っ!…」

悲鳴が、聞こえる。

悲鳴が・・・。

断末魔が・・・!!!

すぐに声のするほうに駆け出す。

そこにあっただのは。

槍型のデバイスを『振り下ろした』男と。

もう、槍が刺さってる女の子。

「ああ？ まだ生き残りが居やがったか？」

死んだ。

「おいおい、返事も無しか？」

人が。

「・・・はあ、つまんねーな。お前も死ね」

いつのまにか、目の前には槍が迫っていて。

俺は。

「
・
・
・
」
『絶影』
「

上半身と下半身が上下に別れた男を踏みつけ、

もう息の無い女の子を抱え上げる。

お腹の傷を『フルケア』で塞ぎ、血を拭い。

「……魔導師……さんっ……」

「!!! 声を出しちゃダメ!!! すぐに助けが……」

「助け、て……くれて……」

「・・・」

「あ、ああ・・・あり・・・が・・・」

「
ッ
」!

バギンッ!!

side反管理局グループ構成員

俺たちが叫び声に引かれて集まると、そこにはガキを抱き締める女がいた。

全員がそいつにデバイスを向ける。

近くに真っ二つの死体があったからな。

「ちっちと殺すぞ」

ああ、ちっちと殺して楽にしてや

？

なんだ視界が右にズレてきてるぞこんなありえ

・・・ああ、レアスキル持ちは待遇もいいなあ。

ん？　ああ。もう一人か・・・。

それと第4訓練校所属アルトリア・ムーンライト訓練生。

発見時には全身に血を浴びた状態で発見されたために捕縛。

28人殺害の容疑で本局から罪へ問われたが地上本部の強い反発と、

彼自身が判断能力を失っていたことから無罪へ。

彼は精神崩壊を起こし、クラナガン中央病院に入院中。

・・・忌むべき事件だな。俺達も動くか？

・・・分かった。すぐに準備する。

第16話 止まらない涙。(後書き)

次話と同時投稿!!

ドラクエ魔法を使わないのにイオを使っていたため、

ルインに変更。9月12日。

第17話 支えられる人達。

side ムービービデオ

ミッションの内容を説明する。

依頼主はいつものGA。

目標は第5管理世界『ユユサ』にあるハイトレード・チェインの拠
点破壊だ。

場所は『ユユサ』の海岸地区の廃棄された要塞。

過去の大戦期の頃のモノでその守りは堅牢だな。

要塞の内部には質量兵器を装備した非魔導師と高位魔導師の混同部隊。

・・・だが、要塞内部の地下にあるエネルギーシャフトを壊しちまえば、

少しした後、基地ごとドカンと吹き飛ぶって寸法さ。

注意する点はエネルギーシャフトの破壊した後、脱出を急ぐ程度か。

ちなみに・・・僚機としてランク16、有澤にも同じミッションが通知されてる。

仲良く協動して、ミッションを達成してくれ。

・・・どうせ、仲のいいミセスに出ろって脅されたんだろつよ。

息子も同然の子に、この間のテロで何かあったらしいしな。

・・・スマン。過ぎた話だったな。

報酬も相応のモノを用意した。

危険なミッションだが、見返りも十分大きいぞ？

連絡を待ってる。

sideアリア

精神崩壊、って診断はされたけど。

3週間でハイパー鬱モードから脱した。

最初はすごくひどい感じで。

泣いて、叫んで、怒って。

魔力の暴走で病室をメチャクチャにした回数すら覚えてない。

テレジアさんが抱き締めてくれたらしいけど……。

けどってのは自分に記憶が無いから。

記憶が病院に来てからハッキリしてるのは……。

父さんと母さんの抱擁……からかなあ。

その辺からだ。記憶があるのは。

そんな時から訓練校のヤツらが日曜日に押しかけるようになつてきて、

でもショックで声と感情が出なくなっちゃってた俺は、筆談で会話してたな。

我ながらいい友人と家族に恵まれたものである。

・・・でも。

復帰できた極めつけは・・・。

「お兄ちゃん、どうしたの?」

「ううん。なんでもない」

あの子の女の子が生きていてくれたことだ。

・・・まあ、当然傷ついた体に『フルケア』したんだからそら生きてるだろう。

まるで死んでしまったかのように眠ってしまったのを見て暴走した俺。

・・・その結果が、大量殺人。

・・・。

・・・。

きゅーっとして右手が握られる。

「・・・私は生きてるよ。お兄ちゃん」

「・・・ん。」

この子が積極的に話しかけてくれたお陰で、

感情も声も元通りになった。

PTSDには、成ってないと思っけど。

「教会には戻らなくていいの?」

「・・・あ・・・許可貰ってるもん」

「早く帰りんしゃい」

「・・・また今度ね!」

そう言って金髪を振りながら駆け出す女の子。

入れ替わりに、シルヴィア・・・母さんが入ってくる。

「元気？」

「うん。結構いい感じだよ。母さん」

「私も休暇取ってきたから、面会期間中はいつも傍にいれるわよ？」

「そ、そうなの？」

「嬉しいなら嬉しいって言えばいいのに・・・」

「・・・うん・・・ちょっと、嬉しい」

「・・・あらあら」

糸目を下げ、コロコロと笑う母さん。

なんだか無性に恥ずかしくなって、窓の外に顔を向ける。

「明日はリンディとテレジアとレティも連れて来るわよ？」

「・・・」

「あらあら。黙っちゃった・・・可愛いわぁ・・・」

ええいつるさいぞ母さん!!--!!

俺は今外にいるトツキーとさっちゃんの数を知るのに夢中・・・。

・・・？

「トツキーとさっちゃんめっちゃんいるーっ！っ！っ！？」

窓の外にいる沢山のトツキーは、こっちに手を振った後消える。

間違いなくティーダの幻影魔法だ。

更に見ると、学友がズラリ勢ぞろいして病院へ入っていく。

「……母さんね」

「……？」

「嬉しいわ。アリアに友達が沢山居て……」

「うん。みんなのお陰かも」

「テレジアとリンディには感謝しなさいよ？」

「……あなたの面倒を一番見てくれたんだから。」

「……母さん、そんな事……気にしないで？」

「母さんは父さんと一緒にちゃんと来て抱き締めてくれた」

「うん。だから。」

「それだけで、俺は十分！……あ。」

「ティーダがティアナちゃん抱っこしてたな。」

「……ええと、会話は何すればいいんだろっ」

side シルヴィア

「アリア」

「……？ うわっち……」

おでこにキスした後、額と額をあわせる。

「あなたは、私とタイラーの最高の息子よ？」

「……っ」

「アリア……！ いますかー！」

外から病院の中にいるとは思えない声。

「あ、トッキー！」

アリアは目を輝かせドアを見る。

友達……ね。

「いいわよ。入ってらっしやい？」

アリアを支えてあげてね？

「あれっ！？ シルヴィアさんの声っ！？

第18話 新暦63年。(前書き)

原作に近づいてまいりました。

第18話 新暦63年。

俺が精神崩壊を経験してから2年後。

俺は無事・・・といひかなんといひか、部隊へ引き抜かれていた。

陸士296部隊。

トッキーは首都防衛隊、ティードは首都航空隊。

ウィンディ、エイ、ロイは3人同じ陸士部隊。

俺だけハブられちゃったのである。

さっちゃん？ さっちゃんのお仕事は296のHQ。

まあ、それでも休日は結構重なるのでたまに集まってバカしたりしてる。

大半がティーダの家だ。

以前ティーダの家に遊びに行った時にドンちゃん騒ぎした後、

俺が帰るときにティアナちゃんに謝ったのだ。

騒いでごめんね、うるさかったでしょ？と。

するとティアナちゃん。

「……や。みんな帰らないで……」

この言葉に俺達の心は満場一致。

休日や騒いだりするときはティーダの家に決定となった。

すでに人数分の毛布もあつたりする。

4歳の子に孤独は耐えがたい。

1年前にティーダの両親が事故でなくなってから、

ティアナちゃんはうちで面倒を見ていた。

・・・テレジアさん。マジで頼りになる・・・。

でもやっぱり実家から離しすぎるのも良くないと思った俺たちは、

ティーダの休日と遊びに来るときだけはランスターの家へ。

「アリアさーんおかえりいー!」

「おお、ただいま」

・・・今思ったけど、登場人物なんだよね。Stsの。

原作知識なんてもう無いけど、この子は覚えてる。

・・・あれ？ ティーダは・・・？ ま、いいか・・・。

「テレジアさんはね、おかいものー」

「そかそか。一緒に行かなかったの？」

「おるすばんしてたのー！」

あー、偉い・・・。

マンションの郵便受けに刺さってた紙束をテーブルに置いて上着を脱ぐ。

夕飯はテレジアさんが帰ってきてからか・・・。

ソファに座ってふう・・・と一息つく。

今日は面倒だった。なんせ拠点を3つほど潰してきたのだから。

いやね・・・部隊長がね・・・。

「あーーーーっっ！」

「・・・ん？」

ティアナちゃんがテーブルの上に置いてあった束の一つ、

雑誌のようなものをトタトタと持ってくる。

「アリアさん！ アリアさんっっってるよ！」

「・・・あー」

特攻部隊に現れた新星、HTの大型支部を単機で壊滅！！

新星、「エクレール」の仇名の由来とはっ

レジアス・ゲイズ氏、アインヘリアル建造計画発表・・・

地上の人・第67回はゼスト・グランガイツ氏にインタビュー！

部隊長と副部隊長と俺が3人で並んで写ってる。

ちなみに・・・

左の大口を開けて仁王立ちなのがルーデル部隊長。

右の真面目そうなのがガードルマン副部隊長。

中央のやや困ってるセイバーが俺。

・・・そう。

陸士296部隊は別名、『特攻部隊』

部隊長、ハリス・U・ルーデル率いる『陸士中最強部隊』だ。

ほらこの部隊長、副部隊長、ランカー候補へのインタビュー、

・最強の部隊に必要なものはなんですか？

「出撃とおいしい牛乳だ！……！」

……と、応えたのだ。うちの部隊長は。

ガードルマン副隊長にも同じ問いが投げられたが……

「○田胃散の胃薬ですね。いい薬です！」

という言葉にインタビューアさんは全てを悟ったのか、
ガードルマン副部長へ何だか優しく接していた。

俺？

俺は・・・

「たったひとつのエクレアで頑張れます！ か・・・

アリアさん、これは・・・めいげんだね・・・」

「ティアナちゃん、エクレアは好きかい？」

「大好き！ あ！ ティアって呼んでよー！」

ぶくーんと頬を膨らませるティアナちゃんに、

冷蔵庫から出したエクレアにちゅーさせる。

「・・・もぐもぐ」

そのまま口を開き食べるティアナちゃん。ああ、なごむ。

「・・・おいしい」

「そかそか」

「ティアって呼んでー!」

話題は逸らせなかったか・・・。

「ああ、はいはい。わかったよティア」

やっぱり成長するようです。

今日はティードがこっちにご飯を食べに来るって言うし・・・

『緊急呼び出し！ ルーデルのおじちゃんから！』

『・・・またウチの管轄外の所に行くのか・・・？』

『あー・・・ごめん、機嫌悪かったり？』

『いや、なんでもないよ。すぐ行く』

ストレージからの通信を切り、再び制服を着始める。

同時にティータにメールを打つ。

『ごめん出動だ。早く帰ってこないとティアが泣いちゃう』

「アリアさん、しゅっどー？」

「うん。しゅめんね・・・でも・・・」

『すぐかえる』

「・・・多分、そろそろ帰ってきてくれるから」

変換すらしらないとは・・・きっと亜高速で仕事を終わらせてるんだろっなw

「ティア、お留守番できるよ!」

「そっか・・・ごめん・・・」

そのままブレイズエッジのホルスターを巻きつけ家を出る。

「おーし、おつおつと終わらせよう」

現時刻・
・
・
1
8
:
1
3

第19話 FPSっていいよね。

ミッドチルダ、東地区……。

アスタリカ銀行本社ビル、2 - 3階の中間の外壁。

『こちらストウーカー1 エクレール、聞こえるか？』

「こちらエクレール、準備は完了してます」

『いい返事だ……お前のステルス魔法を使って人質の居る2階を制圧。』

敵の人数は4人。1人は人質の近くに居る。そいつを最優先だ』

「了解」

ブレイズエッジの銃口と動作を確認する。

この際、魔力を感知されてはいけない。

魔力に鋭敏な者がいたりするかもしれないからだ。

わかっているのは人数だけ。持つてるのは……恐らく質量兵器。

姿を消す魔法、『バニシュ』を使用しビルの外壁に張り付いている俺は、

壊れたまま修理をしていないという二階の男子トイレの窓の近くへ移動する。

本当に必要最小限の魔力で『バニシュ』と『グラビデ』……。

繊細な魔力操作……額に脂汗が滲む。

『潜入を開始してくれ』

「了解、エクレール……突入します」

窓を静かに開け内部へ侵入。着地の瞬間、

グラビデを浮遊魔法『レビテト』に切り替え、脚を数ミリ浮かす。

通路を右、右、左、三番目のドア・・・いいね、開きっぱなしだ。

閉まってたら突入をしなくてはいけなかったが・・・。

透明化したまま中へ。幽霊のように絶好のポジションへ移動する。

窓際の二人、壁に寄りかかりタバコを吸う一人、人質の傍にいる一人。

魔力を最小限にしているバニシュは他人との接触や攻撃魔法の使用で解除される。

『いいか?』

『はい。絶好のポジションです』

『・・・3カウントだ』

他フロアへの突入と、人質のいる二階フロアの制圧の同時進行。

『3』

人数は4人。

『2』

各階で爆発音が同時にすると同時に俺は動いた。

目の前に居た人質監視役の後頭部を魔力弾で一撃。

「「「なあつつ!?!」」」

スローモーション……。

FPSゲームのチート、『オートエイム』というものをご存知だろうか。

敵が近くに居ると自動、そして高速でその頭部をロックオンするという、

大変えげつなく……理不尽極まりないものである。

俺のスピードはまさにそれ。

窓際の二人を高速で眉間を打ち抜き……。

「くそがつー!!」

ジャキン!

壁際の一人がカラシニコフを……

ヒュ……ガキンッ!!

構える前に、ブレイズエッジをブレードにして投擲。

ブーメランのように舞うブレイズエッジはカラシニコフの薬室に突き立つ。

「うおおおおああああああああああああっっ！！！！」

『バーニングアロー』

障害物をなぎ倒しながら一直線に進むまるで炎の矢の様な蹴りを、

男のドテっ腹に思いつきりぶち込み、壁に陥没させる。

まあまあのプロテスを男の腹と背中に張ってあげたから、

死んではないだろう。びくびく痙攣してるけど。

「こちらエクレール、制圧完了。人質は全員無事。」

『だったらこっちを手伝いに来てくれ！！！！』

今気付いたけど、まだ他の階では戦闘が続いている。

……でも……。

「……人質の護衛をします」

『ん？ おう！！ そうだったな！！ 頼m』

ゴギヤアアアン！！！！

数階上のフロアだろうか、建物全体が大きく揺れる。

『イテエな畜生!!』

『ぶ、部隊長!! 腹が貫通してます!!』

『ハリス!! 馬鹿ですかあなたは!! 早く・・・』

『ええい黙れガードルマン!! 私は落ちん!!』

行くぞシュトゥーカ!!!! カートリッジロード!!!!』

『ちょ、ハリス!! 5発ロードなんて・・・』

なんだか嫌な予感がする。

人質をリフレガの保護膜で覆い、全員にレビテトを掛け浮かす。

『カノーネン・・・フォーゲルウウアアアアアア!!!!』

ビル全体が揺れる中思う。何やってるんだあの部隊長は・・・。

第20話 さっちゃんのお気持ち。

陸士296部隊・・・隊舎。PM22:45

「ハツハツハ！！ まあ、全員生きてるんだよしとしよう！！」

全員がロビーへ集合し、整列して部隊長の声を聞く。

部隊長・・・ハリス・U・ルーデル。

29歳、魔力ランクS+、ベルカ式の『砲撃魔導師』

使用デバイスはバズーカ型ストレージデバイス『シュトウーカ』

形状は脇に抱えるタイプの大型キャノン砲のような形状、

究極の出撃中毒、乗り越えた戦場は数知れず・・・

そして別名、『特攻野郎』『不死身』『出撃王』『色々問題ありの
エース』

「・・・で、その突入、アリアはよくやってくれた！！拍手！！」

色々思ってるうちに話が進んでいたようで、拍手がまばらに起きる。

「次！！ クリス！ 確保数最多だ！！ 誇れ！！ 畜生！！」

ムキムキのマツチヨな隊員が「うりいいい」と腕を振り上げる。

この部隊は色々とおかしい点が多い。

まあ、その中で部隊を支えているといっても過言ではない人が・・・

「はぁ・・・腹に穴が開いたのになんでピンピンしてるんだ・・・

「？」

この人・・・エレノア・ガードルマンさん。

副部隊長であると同時にこの部隊の女医さんも担当している人だ。

部隊長とは幼馴染ですつとの腐れ縁らしい。

結婚すればいいのにか思ったのは俺だけじゃないと思う。

胃薬とタバコをこなよく愛する人。

そして常識人であり俺がこの部隊でさっちゃん以外に頼れる唯一の人だ。

だって・・・男性隊員の半分が・・・その、おホモな人で、

もう半分は『なにかしら変な趣味の人』だ・・・。

この間、デスクでうつかりお昼寝をしてしまった時、

後ろから「アリアきゅん可愛いよ可愛いはあはあはあ・・・」

と聞こえたのは結構思いたしたくない記憶だったりする。

女性陣は一部を除いて結構まともだ。

さっちゃん？ 変わってないと思う。うん、きっと。

終礼が終わり、夜勤以外の召集された人達は帰宅の準備を始める。

「アリア君・・・？」

「・・・？ さっちゃんか。どうしたの？」

「あ・・・あはー、何だかほら、機嫌悪かったから・・・」

「・・・あ、あー・・・ごめん」

ちよっとトゲトゲしかったかもしれない。申し訳ない事したな・・・。

そう思って顔を見ると、さっちゃんの目の色がクワイアに変わる。

唐突だ。しかし俺はその口から発せられる声を聞く。

「・・・HCの活動が最近活発になってきています・・・」

「・・・最近、テロや殺傷事件があまりにも多い・・・」

「・・・そうだね」

「そして近々・・・あなたの『ランカー入り』を上層部が決議し始めました」

「・・・」

「それと同時に複数の拠点やアジトへの同時進入、

本格的な撃滅戦が開始されるでしょう・・・」

ランカー入り。

ランクとは管理局地上本部での『総合戦力階級』

恐らく上層部は空席になっている9番の穴を、

俺に活躍させて埋めようとしてるのだろう。

ランカーは自由が利く。

だが・・・『ミッション』という依頼を請け負うことがあり、

それ以外でも強制的に出撃を命令されることになる。

・・・メリットは犯罪発生率の著しい低下、局内での優遇。

デメリットは・・・時期的な強制拘束と殺人を侵す可能性があること。

判断できないのは『殺人の合法化』

「・・・アリア様、私はランカー入りをあまり薦めません。

あの精神崩壊が無かったらこんな気持ちは無かったのですが・・・

」

そう。結構いい条件なのだ。

任務での人殺しが許容できるのなら。

一度壊れた心はその分脆くなる。

だけど・・・最近の次元世界全体での犯罪率は高い。高すぎるのだ。

あの、デパートの時みたいに惨劇が今も起きているかもしれない。

いや、間違いなく起きている。

「・・・クワイア」

「・・・」

「罪の無い人が死ぬなら、それを防ぐ為に自分が血を汚してもいい。

・・・思わず血を吐いてしまいそうなくらい偽善者な考え方だ。」

本気でそう思ってるから、心が壊れそうになる。

でも・・・あの爆発を、人の悲鳴を、叫びを聞いてしまった。

「……俺の考え、どう……思っっ。」

「そうですね。」

さっちゃんは眉をひそめて言う。

「周りの人々の「気持ち」を考える。です。」

ああ、さっちゃんは、クワイアはいつも通りだ。

「ですが私は嫌いじゃありません。」

「血に濡れた手は私が拭いてあげます」

だから。

「皆で一緒にご飯食べに行こう！」

ほらほーら見てくださいよじゃじゃーん

集まれ女子どもー！ 今日のアリア君と飲み会だぞー！ー！ー！ー！

うっわぁ台無し。

その言葉を聞いた・・・20代くらいの方々が寄って来る。

俺達を囲むようにつてひゃあっ!?

「ちよ、誰ですか脇腹触ったの!! セクっひゃあっ!?!?・・・」

もみくちやにされる男の娘。自らの主の赤面した姿。

それでも笑顔を浮かべて、人形だった私は愛しき人を見る。

恋人じゃなくていい。あなたが私を想ってくれなくていいから。

あなたをそつと支えます。傍にいれるだけでいい。

その考えは矛盾してるかもしれない。

守るために血に染まる・・・乖離してるかもしれない。

だけどそれがあなた。『守る』ために全てを掛けられる。

でも、あなたはいつまでも「純白」だと想いますよ？

ね・・・アリア君。

第21話 暗い場所

「最近HCの活動が活発になってきているな」

「ああ、そろそろランカーの空きを埋めなければマズイかもしれん」

「3と9か・・・」

「ファンションを3、ムーンライトの小娘を9にすればいい」

「実力的には逆ではないか？」

「小娘は切り札になりうる・・・それに・・・」

脳に入ったシリンドーがゴポリ・・・と泡を立てた。

「ムーンライトは代々、面白いものも隠し持ってるのだしな・・・」

・・・暗い。

これはなんだろう。

暗くても暖かくて。

暗くても柔らかくて。

暗くても優しくて。

でも、ちょっと息がし辛いかな。

ねえ・・・そこにいるのは・・・誰？

s i d e アリア

「・・・変な夢・・・」

もそもそと仮眠室のベッドから降りる。

ふぁー・・・とあくびをしてのびーっと・・・

「む？ アリア君おは・・・我が人生に悔い無し」

「えっ！？ ちょっと！」

エレノア先生が俺を見たら。

ブッシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

バターン……。

後ろへバターンと倒れた……。

「先生！ 先生！」

「ん……むう………ぐはっ……」

また頭を振ってこっちを見たら今度は吐血して倒れる。

こゝ、困る……めっちゃ困る……。

床を見るとダイニングメツセージが……。

『犯人は上半身』

ビシリと俺が固まると下を見下ろした……ホットパンツだけだ。

確かにちよっとはしたない格好だったな……。

……。

男っぽく振舞ってるつもりなんだけどな……。

……そんなに吐血するほどだろうか。

訓練校では制服を剥がされかけてレイプ寸前まで行った事もある。

その男の結末？ わかりきってるでしょうに。

思わず胸をさわさわと触ってため息を吐く。

・・・まあ、俺は俺。男なんだから堂々としてようかな。

・・・もちろん、周りの迷惑も考えて・・・だけど。

俺は沢山カーテン付きの二段ベッドの中の自分の使ってるベッドから、

Yシャツを取り出してすぐに羽織り着替えを持って仮眠室を出た。

あー。早めにシャワー浴びよう・・・。

俺はストレッチデバイスを起動、チャットを確認しながら通路を行く。

『Fromトッキー：やべえ首都警護隊ヒマすぎる』

『Fromアリア：ちょ、おまwww 仮眠明けなんだけど・・・』

『Fromロイ：おつかれさん。こっちは変わらないぞ』

『Fromトッキー：おおロイ！ おはよう！』

『Fromアリア：おはよ、ロイ。元気？』

『Fromロイ：ああ。ウィンディとエイも元気だ』

『・・・画像が添付されました。』

『Fromトッキー：うほ、なんかの打ち上げか？』

『Fromロイ：昨日のな・・・アリアはどうだ？』

『Fromアリア：ちょっと疲れた・・・ほら、昨日の銀行襲撃・・・』

『・』

『Fromトッキー：だろうつと思ったよ!』

『Fromロイ：落ち着け綾時・・・アリア、無理するなよ?』

『Fromロイ：お前は華奢なんだからな。今度男で飲みに行くか』

『Fromトッキー：ちょｗｗ　ロイ、おっさんくせえｗｗ』

『Fromアリア：俺たち未成年だよ!・・・ジュース飲みに行くのは賛成』

『Fromロイ：今週末はどうだ?』

『Fromトッキー：俺は休暇最近取ってないから平気だな。アリアは?』

『Fromアリア：んー、日曜ならおっけ』

『Fromロイ：決まりだな。クラナガン中央ターミナルで落ち合

『お』

『フロリアア…ほいほい。あ、お風呂行ってくる』

『フロットッキー…濡れて』

『フロロイ…おっぱりして』

あー、なに着て行くのかなー

ちょっと上機嫌になった俺はやや浮かれた足取りになった。

第22話 遅い！bYアリア（前書き）

ほのぼのってか日常の巻。

第22話 遅い！b yアリア

「
~~~~~  
」

父さん、ここしばらく会えて居ませんがお元気ですか？

一昨日・・・正式にランカー入りの発表があり、

同僚のウィンディと俺がランカー入りしました。

ランカー入りはほぼ強制です。

でも、俺はそれを利用し犯罪率の低下を目指します。

あの惨劇が今も間違いない起こってる。

それを止める為に、俺は手を血に染めます。

父さん、父さんなら笑って許してくれると信じています。

この事を話したら母さんとテレジアさんはポロポロと泣いてしまい、

二人にぎゅーっと抱き締められながら半日を過ごしました。

途中からティアナちゃんも加わってちよつと重かったけど。

でも。それでも。俺は変わらず元気です。

そうそう、父さんの部屋から出てきた本は全部燃やされてました。

母さんはニコニコと笑ってたけど若干傷ついてたと思います。

帰ってきたら覚悟しててください。

んーと、今週のお手紙はこれでおしまい。

今からシャイゼで友達とご飯を食べに行ってきます。

私服が少ないって言われるんだけど、

袖なしYシャツにジーンズが一番楽なんだよね。どうしよう。

っと、待ち合わせの時間に遅れるから、今日はこの辺で。

じゃあね。お仕事頑張ってください

あ、ちゃんと読んだら燃やしちゃってね！

貴方の最愛の息子、アルトリア・ムーン

ライト。

クラナガンの中央ターミナル。

そこに2人の若者が集まっていた。

赤いツンツン髪の綾時。金髪三つ編みの俺。

あと一人が……モノローグ風にしてもこない……。

「んー、遅いなあー……あ、悪い俺ちよつと席外すわ」

「はえ？ あ、了解」

遅いなロイ。時間は守るのに。

通信で抜けたトッキーも待たなくちゃ……。

そんな事を思つてると。

「……あ！ おーい！ ロイー！！ こっちこっちー！」

身長の高い黒髪オールバックのイケメンが、

何故か目頭を押さえつつ早歩きでこっちへ来る。

彼こそロイ・ザーランド。通称『インテリオルの傭兵』だ。

『傭兵』とは尊敬、畏怖、侮蔑全てが籠められている。

他にもアスピナの傭兵のジヨシユアさんって人と、

・・・えーつと。

あ、あ、あー・・・アルトリア？ 俺の名前じゃないや。えーつと・・・。

・・・こほん／＼／・・・とにかくその人は伝説の魔導師って言われていて、

今は別の管理世界で活躍してるらしい・・・一回会ってみたいなあ！。

「大声で手を振るなよ恥ずかしい・・・」

「久し振りだねロイ！」

「おう、久し振りだな・・・綾時は？」

「今さっき通信しにいったよ?」

「……そうか」

するとソワソワとし始めるロイ。どうしたんだろ……。

「……」

「ロイ?」

「……あー、相変わらず髪がき、綺麗だな、アリア」

「……ふえ? / / /」

な、なんだ、ロイがなんだかロイじゃない。

時々こういう事も訓練校の時にもあったけど……。

たまにロイが褒め倒したり歯が浮くようなセリフをね。

からかわれるのはもはや俺の使命なのか……。

そついうのはエイとかウィンディに言えばいいのに。

……練習をしてるんだってさっちゃんと言ってたけど。

女の子みたいな俺に、将来女の子を口説くための練習。

黙って付き合っただけで、あげてくださいってさっちゃんは言ってたし。

・・・なんだかさっちゃん、いつもと違ってたなあ。

なんだか必死だった。

「うーん、いつも通りなんだけどな」

「い、いっつも綺麗・・・っつー事だ」

「んもー／／・・・ロイったら照れるじゃんかー」

照れるのは事実！ 多分男の人でも惚れるんじゃないかこれは。

ちょっとテレてどもるのが可愛いとか思ってるけどやめる俺。

ロイは俺で練習してるだけだよっ！ww

それっきり会話が打ち切られ、なんともいえない空気が漂う。

S i d e T ツ キー

『いけ！ イケメン！ アタック！』

『女子顔赤い！ いけるよ！ 男子いけるよ！』

『てかあの金髪ランク9のムーンライトじゃね？』

『そこで黙っちゃダメ！ 今後に響くぞ！』

『リア充否定派で男の俺でもこの組み合わせは応援する！ 何か会話を！』

『もちつけイケメソ、まずはハッピーエンドを妄想しろ』

『そつそつ落ち着いて！』

『お前理解力あるな』

『てかエクレールと傭兵がデートとかスクープすぎるWWW』

『よし、まずは手を繋いでデートコースへ行くんだ』

『久し振りなら積もる話もあるでしょ！ 行け！』

念話展開したら変なチャンネルがあったから、

違和感感じて参加してみたら大変な事になっていた。

ロイエ……。

ここで俺が入っていったら間違いなく修羅場じゃねーか……。

……あ。

アリアはちょっと顔を染めながら『うん？』と小首をかしげる。

ボンツ！ と真っ赤に染まるロイ。

そりゃあじーっと見つめてればアリアも反応を返すさ……。

時間か。そろそろ爆弾になりますか……。

……はあ。

念話のお祭りを予想して、俺はため息をついた。

## 第22話 遅い！b yアリア（後書き）

あ、あれ？

今日はファミレスまで行く予定だったのに・・・？WWW

ザ・インタビューズ始めました！

一つも質問がまだ来てないからかまちょな私は悲しい！！WWW

活動報告とマイページの自己紹介にURLが張ってあります

## 第23話 宣戦布告。

あのご飯を食べてドリンクバーでだらだらと過ごした。

え？ いや、とりとめも無い話だったし・・・。

あと俺がサラダしか食べてないのをいぶかしたロイが、

それで足りるのか？って言うてくれたんだけど・・・。

トッキーがダイエットしてるという事をバラしやがった・・・。

いや、お昼休みの度にお弁当をいろんな人が持ってきてくれてさ。。。

「おいしい。うん。だから食べちゃう。もぐもぐ」

。。。って事を繰り返してたら。。。

## 二週間前

サービスシーンだ！ 妄想で補え！！

脱衣所でYシャツを脱ぎインナーに手にかけて一気に脱ぎ。。。

リボンをしゅるり。。。と解いて本当に生まれた姿のままとなる。

洗面台の大きな鏡の前に立ち、全身に傷が無いかを確認する。

異常無し・・・っと。

・・・。

白くて、女の子みたいな肌・・・。

「・・・//..!.....はあ」

自分で自分に見惚れるとか・・・最低・・・。

ぶんぶんぶんと頭を振り、体重計に乗ってみる。

「・・・?」

えっと・・・?



「彼女はいないよ?」

というとファミレス中がどごおんと揺れた。

……じ、地震だったと思うけど。慌てて皆デバイスを確認してたし。

トッキーも念話チャンネル開いてたしね。

俺はブースト持ってたけど隣の席に座ってたロイに引っ付きちゃったし。

いや、すごい衝撃だったんだよ?

まるでお店の中の人が予想外すぎることに気付いたみたいに……。

そんなこんなで休日は終了。

俺は帰宅ラッシュの中、クラナガンの中央交差点を通過していた。

そして同時に。

『聞こえるか？』

大型、小型問わず全てのモニターが黒く染まり、

深く低い音声がスピーカーから溢れ出した。

聞いているだけで恐怖を煽られる、地獄から響くような声。

『よお・・・ランカー、管理局の犬共・・・』

ああ、間違いない。こいつだ。

『H.C.のトップ・・・オールドキングだ・・・』



第23話 宣戦布告。(後書き)

次話を首長くして待っててくださいw

第24話 境界線上の。(前書き)

ストック投下。

お時間のある読者様は、

私の処女作『魔法少女リリカルなのは 純白の騎士姫』の方もお読み下さい。

諸事情により更新が滞る予定ですので、

旧約を読まれていない方はそっちを読んじゃってくださいな。

旧約、新約は連動しているところに明言します。

ああああ、ストックが少なくなっていく・・・。

そろそろ準備期間は終了します。

## 第24話 境界線上の。

新暦63年。夏。

H Cのトップ、オールドキングが管理局に宣戦布告。

有名な管理世界の全てで大規模なテロが起きた。

そしてそれは、クラナガンも例外ではなく。

すぐさまランカー達が地上本部に招集。

全ての管理世界、管理外世界、観測世界を含めたHCの巢の撃滅を行う。

そして地上本部のランク1、ゼスト・グランガイツがHCのトップである、

オールドキングとHCの本拠地を特定。

・・・しかし。

内部には極めて濃厚な魔力結合妨害装置が張り巡らされており、

数値上ランク1のゼストですら魔力もろくに練れないほどの物だっ

た。

管理局上層部が頭を痛める中、管理局の闇が動きを始める。

「ならば「こちらもそれに対抗できる人材を派遣すればいい」

もつとも黒、最高評議会が推薦したのは。

ランク9、アルトリア・ムーンライトである。

彼のレアスキルの認定されている術式は魔力結合妨害装置の効果を  
受け付けない。

それ以前に、彼が魔法を使わない状況下であつたら史上最強の戦力  
だからだ。

彼の純粋な身体能力と剣の才能、そして不可思議な未知の剣技。

H Cも管理局の新人ランカーには目をつけていなかっただろう。

確実に慢心し、H Cがランク9に屠られる未来が上層部には見えた。

嬉々として上層部は単身で乗り込ませることを決定する。

何故そんな貴重な戦力を大した迷いも、期待も根拠も無く放り込むのか。

事実言おう。これは彼に『死ぬ』と言っているようなものだ。

下の者達は猛反発する。

「もうコレを逃したら二度と補足できないかもしれないぞ」・・・と。

しかし上層部は決定を覆さなかった。

それは便利な保険があったからだ。

もし彼が任務に失敗したときは、

アルカンシエルの一斉砲撃により発生する次元震で、

世界ごと消滅させるといふ。

とても都合のいい保険が……。

指令書。

H C本拠地へ乗り込み大魔法での拠点の殲滅、

及びオールドキングの抹消。

場所は大戦時代に放棄された武装砦。

決行は一週間後、準備を整えて置くように。

憎しみの鎖は断ち切れるのか。

第24話 境界線上の。(後書き)

引っ張ります。

ストックの残りが少ないiiiiii

第25話 往つてらっしやい。

この世界って。

楽つらいやん。

辛いやん。

ただそれだけの、

繰り返しで。

自宅。朝の6時。

ブレイズエッジを自室の机に置き、イスにどっ……と腰掛ける。

そして手に握っていた書類と無造作に机に放られているモノを見た。

それは、厚紙で出来た一枚の指令書。

俺への死刑宣告。冷静で居られるわけがない。

両親には連絡が行っていた。最低限の礼儀は守ってくれるようだ。

出発は今日。

トッキー達が昨日、パーティを開いてくれた。

俺の知り合いは大勢着て、屋上を占領して軽い社交界パーティのようにもなった。

オーデイーンとさっちゃんトッキーがやつぱり酒を周囲に回しまくっていた。

今の屋上は二日酔いのゾンビ達で死屍累々だろう。

「ねー、アリアさん」

寢室のベットから出てきたのだろう。

昨日、一緒に寝たティアナちゃんが体を起こす。

「？ おはよう、ティア。どうしたの？」

「・・・怖い夢、見たの」

「そりゃあいけない・・・大丈夫？」

俺はティアナちゃんの隣に腰掛け、布団にもぐってティアナちゃんを抱き締めた。

「・・・アリアさんがね、ティアを置いてっちゃんごの」

心を、叩き切られた気がした。

「お仕事・・・帰って来るよね・・・？」

「・・・」

「ティア、ちゃんとおかえりって言っからね」

「・・・」

「えへへ・・・そっかあ・・・」

抱き締められるティアナちゃんからは俺の顔が見えないんだろう。

「まだ、おやすみ。ティア」

「うん・・・眠い・・・いってらっしゃい」

「・・・行って・・・行って来ます・・・！」

俺はベッドから抜け出し、ホルスターと指令書を持って家を出る。

すると・・・目の前には母さんとルーデル部隊長がいた。

「・・・いつてらっしゃい。私の可愛い息子」

「・・・うん」

「テレジアとクワイアが転送ポートで待ってるわ」

「・・・わかった」

ひときしり抱き締められた後、部隊長の方を向く。

「・・・短い間でしたが・・・」

「突き進め！！ 出撃せよ！！ さすれば栄光を掴めん！！」

そう叫んだ後、俺の方を見て笑う。

「お前はうちの部隊の看板なんだ・・・必ず帰って来い!!」

「・・・了解、部隊長も先生に迷惑かけないようにね」

「がっはっは！ そいつぁ約束できないな!!」

するとちよつと困ったように笑みを浮かべてルーデル部隊長は言う。

「同僚とは、いいのか？」

「昨日、散々飲んで騒いで喧嘩して殴り合って泣きましたから平気です」

柄でもないですし。と肩をすくめる。

「そうか。じゃあ、行って来い」

「タイラーが来れない事を謝ってたわ・・・」

「うん。手紙で聞いたよ。涙で読めたもんじゃなかったけど」

テレポを発動し、魔素が溢れた。

「・・・これ」

母さんがリボンを解き・・・魔法なのか魔術なのか、

俺の髪が黒いリボンで再び結び直される。

「きつと持ってるという事あるわ」

ジジジジと転移が開始される

「行って来なさい」

「・・・行って来ます。母さん」

転送ポートには早朝で締め切られてるからか人が誰も居なかった。

その最深部の転送ポートのターミナルへ向かう。

「・・・来たわね。ランク9、エクレール」

「うん。ランク29、ミセステレジア」

この先が専用ポートよ。そう言ってテレジアさんはゲートの前からどく。

「転送は敵拠点の上空。転移と降下と同時に大魔法で、

敵対地上戦力を粗方根こそぎにしちゃいなさい。

先程までグランガイツと有澤を初めとする10人のランカーがいたけど、

全員が撤退済みよ・・・地上を焼き尽くしたら地下へ入りなさい。

そこからは・・・何もバックアップできないわ。

頼れるのはマップとあなたの戦闘力よ」

「了解」

テレジアさんはふっと微笑むと俺を抱きしめる。

「……強く。ね」

「……行って来ます。テレジアさん」

そのままバリアジャケットとブレイズエッジを携えゲートをくぐる。

ひし形の魔カスフィアがある大広間。ここから転送を行う。

しかし……転送まで10分。影が俺へ近寄った。

「……アリア様」

「……クワイア」

クワイアは俯き、再び顔を上げると言った。

「行くのですね」

「……ああ」

「……」

……？

「帰ってきてください。必ず」

「……何度目だろうね。この遣り取り」

「貴方が心配だからこうしてるのです」

「君からは2分毎に言われてたけど」

「愛情の裏返しです」

「何その愛情怖い」

「傍にいらればいいのです」

「あれ、意外と健全」

「居られなかつたら死にます」

「前言撤回」

「そぞろいじりやです」

「ぞろいじりやだよ」

「お慕いしております、アリア様。必ず帰ってきてください」

「……ちょっとしたカミングアウトに面喰らってる間に、

そそくさとゲートの外へ出て行くクワイア。

「……約束、ですよ？」

「……ああ」

ゲートが閉じ、スフィアが起動する。

すると胸から声が聞こえた。

『このモテ男めー!』

「リアクションに困るよ?」

『それもそつかな・・・?』

「・・・ごめん、オーデイン。こんな事に巻き込んで」

『アリア君のアホーーーー!!!!』

ゴトゴトと胸の中で何かが揺れる感覚がした

『私たちはいつしんどーたいだよ!!!』

「・・・そつか」

ブン・・・と床の魔方陣が起動する。

「・・・死ぬかな？」

『多分ねー』

「・・・」

『まあ・・・頑張ろうよ　アリア君の大一番だよ！』

「・・・ああ。そうだね！」

床が紫電に包まれ、空気が肌を撫でる感覚。

気が付いたら遙か上空。

「ミッション・・・開始！」

第25話 往つてらっしやい。(後書き)

表現のおかしさを訂正。

## 第26話 憎しみの鎖。

轟音が施設の壁を揺り動かす。

地下階層最深部の大広間の中央には大柄な男が佇んでいた。

生きてる人間は全員逃げた。

ここに残ってるのは男と施設内に居る機械だけ。

男はさっきの一撃で地上の戦力が大ダメージを負ったのがわかったのか、

上の、上の、そのまた上を見上げるように頭を動かす。

「・・・なあ・・・これであってたのか・・・？」

男は胸からロケットを取り出し咳く。

「・・・悪いなあ・・・俺はバカだからよお・・・」

それを握り締め、また、『空』を見た。

「・・・I・m a thinker・・・アウアウアウアウア  
ウアウア・・・」

地上に『メルトン』のエクスチャージを放った後、

地下へと続くルートへ入る。

「・・・なるほど・・・強烈だ・・・」

一体何のエネルギーを使えばここまでの妨害装置を起動できるのか。

・・・アンチ・マギリンクフィールドとかがって言ったな。

丸い楕円形のターゲットをひたすらに魔力弾で打ち抜くことは出来

ない。

ならば自らの膂力とイヴァリース式魔法で殲滅するのみ。

「『連続魔』『ルインガ』」

破滅の名を冠するのにふさわしい威力でターゲット名称……

ガジェットを灰に返していく。

左手のブーストデバイスでグラビデを行使。

通路内を縦横無尽に移動しすれ違いざまに切り捨てていく。

下階層へ続くメインシャフトルーム……。

ここへたどり着けばフロアの移動は問題なく行える。

「オーディーン！ ライブラを常時展開！」

内部からの脱出ルートから出てきた人員の中にオールドキングの姿は無かった。

転移をしようにもこの厄介な装置の維持に一杯一杯のはず。

そして内部のサーチによるとオールドキングと思われる魔力波が感知されてる。

・・・出来すぎてる感は確かに否めない。

だが、間違いなく全ての元凶はそこにいるのだ。

『おっけー・・・ピピンと来たら知らせるよ!』

「頼む」

メインシャフト・・・メインシャフト・・・。

それだけを考え、ただマップどおりに直進していく。

ブレイズエッジを振るい、機械の肌を切り裂く。

そしてメインシャフトへ続く階層へたどり着き、

その10フロア分の空洞を見下ろすと、

おびたらしい数のガジェットがこちらを向くのが分かった。

「・・・オーティーン」

『・・・なあに？』

「行くよ！！」

『っ！ おっよー！！』

エッジをホルスターに戻し白銀の双剣を手取る。

俺はそのまま、奈落の底へ飛び降りた。

「おお？ よくここまで来れたなあ・・・」

最下層フロアの一番奥を吹き飛ばすと大柄な男が一人立っていた。

「おいおいボロボロじゃねえか・・・」

・・・ああそうだと満身創痍だ。腹は一箇所貫通し、

不覚を取った背中をザックリと切られている。

「・・・ミッションだ。お前を・・・殺す・・・」

「おう。待ってたぜ？」

男は両手を広げ、俺のほうへ向く。

「俺が・・・オールドキングだ」

「・・・潔いんだね」

すると男・・・オールドキングはハッと鼻で笑って言う。

「お前みてえなバケモノから逃げられるなんざ思っちゃいねえよ  
．．．それに、ヘイトレッドチェーンはもう終わりだ．．．」

ジャキン

もう妨害装置は作動していない。

双剣を白い粒子に戻すと、ブレイズエッジをホルスターから抜き構える。

「．．．オールドキング．．．一つ聞きたい．．．」

「おう、なんだ？」

「．．．なんで、こんな事をしたんだ．．．？」

「．．．1%の憎悪と99%の革命」

オールドキングはこちらを向き、自嘲的に笑って言う。

「最初はそれだけだった……ただ、その数字が逆になったただけだ」

ただな……とオールドキングも前置きして言う。

「革命なんて……結局は殺すしかないのさ」

言葉だけ聞けば、狂気とも取れるだろう。

だけどその顔は悲痛に塗れていて……。

「何躊躇ってるんだ？」

「っ！ 躊躇ってなんか！！」

「・・・お前、『黄昏の7月』の時の生存者だろうか？」

「！！！」

「ああ、ちなみにな」

オールドキングは突如、声を張り上げて言う。

「あの爆弾仕掛けたのは・・・俺だ」

ガァン！！

引き金を引いた。だけど、俺の中の何かも撃ち抜かれたような気がして。

オールドキングは左胸の貫通した傷を見つめ、ゆっくりと倒れる。

「・・・それでいい・・・なんで躊躇った？」

「・・・悪い人じゃないように見えてしまった。それだけ」

「はっはっは・・・大したガキだ・・・」

おい、ガキ・・・その考えは甘すぎる」

オールドキングは笑った。

「・・・俺が言える台詞じゃないかもしれないが・・・」

その考え、俺はア好きだ・・・いいな。ゾクゾクする」

「狂人が・・・お前が何考えてるのかわかんなくなる」

「・・・いずれわかる」

その言葉に、俺はハッと顔を上げた。

「・・・忠告だ。上層部には注意しろ。特に最高評議会だ」

「・・・まあ、お礼は言う。けど許さない。お前がしたことは」

「・・・厳しいな・・・」

しばしの沈黙が訪れる。

何秒か何分かわからない中、唐突にオールドキングは口を開いた。

「・・・殺してるんだ・・・殺されもするさ・・・」

オールドキングは腕を虚空に上げる。誰かの腕を掴むかのように。

「・・・そ・・・う、だろう・・・リ・・・ザ・・・

」

オールドキング。全ての憎しみの元凶。その男の最後を見届けると、

俺は静かに踵を返した。後は地上に上がるだけだ。

オーデインも消耗してる。ここは迅速に上に上がろう。

・・・家に帰ったら何をしよう・・・？

まあ、おかえりって・・・。

『アリア君!! 後ろ!!』

「IS・・・『ライドインパルス』」

・・・?

後方に吹き飛びつつ、やけに緩んだ頭で考える。

ああ・・・斬られたのか。

『ダメ!! 寝ちゃダメ!! アリア君!!』

・・・もうよくわからない。

女の人がちらへ歩いてくるのが床からの視線で捉える。

「案外簡単だったな・・・すまない。仕事なんだ。」

死体の回収をしたらここの爆弾が起爆する・・・」

女の人が手を振り下ろす。それがどこか他人事のように。

ああ・・・死んだ。

ごめん、ティアナちゃん・・・



第26話 憎しみの鎖。(後書き)

この後数話挟み、舞台が変わります。

## 第27話 黒い服、その手には大剣。（前書き）

この話は旧約、純白の騎士姫のネタバレを含んでいます。

しかしこの小説はEFでもあり旧約の続編という立ち居地でもありません。

もし旧約を読んでおらずネタバレが嫌な人はここの感想板を覗かず、

・・・先に旧約の方を呼んでいただく事をお勧めします。

この話を読んだ時のネタバレについては一切の責任を負いません。

タイトルで、「パッ！」

とあの子が浮かんだ人は、

よく訓練された旧約『純白の騎士姫』のファンですw



第27話 黒い服、その手には大剣。

トーレの右手は無常に振り下ろされる。

彼の召喚獣の叫びを交えながら。

しかし、彼女の凶刃はアリアには届かなかった。

彼女とアリアの間に一つの影。

轟音と共に大剣が地面に突き刺さり、右手はその表面に当たる。

トーレは驚愕し思考が停止。そしてそれは今この瞬間では最大の愚であった。

カチッ……という音と共に、トーレの体が一気に吹き飛ぶ。

右足、左腕、下腹、鳩尾、喉元、顎先、鼻柱、眉間、脳天。

その全てに『何か』が叩き込まれたのである。

戦闘機人であるトーレの頭はすぐに快復。

目標を捉える事に目的を変える。

(なんだこいつは・・・っ!?)

そこには。地面に突き刺さった一本の大剣を引き抜いて。

・・・大剣を一振り持った黒衣の剣士がいた。

「貴様……!!」

トーレはすぐに体勢を整え対象を睨む。

「……助けてももう遅いぞ。時期にここも大型爆弾が起爆し、

アルカンシエルによる一斉照射が始まる……」

だが……とトーレは前置きした。

「……この事件の真相を知られたからには死んでもらう」

剣士は右手で一本の大剣を構えた。そう、構えたのだ。

……その左の手は極めて自然体で。

「『ライドインパルス』!!!!」

神速のスピードでのかく乱攻撃。

それは容易く敵を屠れる彼女の必殺の戦い方だった。

初見潰し。

そしてそれは今ここで彼女の行えるもつとも効率的で勝率の高い事。

しかし剣士は対応する。

まるでその力を何度も見てきたかのように。

一撃目は左下を防ぐ。

二撃目は首の後ろを。

三撃目で・・・動く。

「秘剣『紫電一閃』」

右の黒い大剣で防御し、

「左の輝く何か」で返す刀を狙う。

そしてその炎を纏う一撃はトーレの薄皮一枚を掠め、

トーレはその間合いから飛び下がる。

「見えない・・・剣だと・・・っ!？」

剣士は右の大剣を後ろ・・・アリアを守る様に地面に突き刺した。

「……おおおおおおおおおおおおお……!……!……!」

地獄から這い上がるかのように響く声。

刹那、手の「剣」が光り輝き、烈風を巻き起こす。

http://www.youtube.com/watch?v  
=P4TMYHTLsoQ

BGM 約束された勝利の剣

「な……んだ……?」

トーレは困惑していた。そもそもこんな所に来れる人物など居ない。

彼女は撤退を考えた。行ける。

バックアップにロールアウトしたばかりのセインもいる。

武人である彼女は逃げを考えた。この剣士の、蒼き波動を前に。

勝てるわけがないという恐怖。 剣士は腰溜めに剣を構えた。

「<sup>エクス</sup>約束された・・・」

「あ・・・ああ・・・」

轟音と共に地下全体が軋む。

そして剣士は、

カチッ・・・！



そしてそれはトーレを上空に打ち上げつつ、

各階層の隔壁を薄紙の如く打ち壊し、

10階層ものフロアを抜けて天へ噴出する。

トーレは何故自分が消滅してないかと疑問に思った後、その意識を閉じた。

オーデインは今の戦いを呆然とした表情でアリアの中から眺めていた。

もし、彼女が魔術管制で消耗していなかったら、

オーデインが自動顕現しトーレを殺していたらろう。

アリアは聖剣と鞘を封印した。

上層部が腐っていることを把握した瞬間だ。

この世界では未だに振られたことすらない。

だがあの剣士は何だ？

聖剣との適合率が異常に高い。

いや、それ以前に何故聖剣を持っているんだ？

神の御使いにして彼女自身も全知全能の神。

しかし彼女ほどの知識を持ってしても理解は不可能だった。

・・・当たり前だ。

剣士はそれほどまでに規格外の存在なのだから。

爆弾の起爆が始まるのか、それを告げるように地下全体が揺れる。

剣士は聖剣を粒子に返した後、アリアの元へ歩んだ。

私は無理矢理顕現し、白銀の双剣を構える。

「何・・・者・・・」

「・・・召喚者のダメージはそのまま君にも行ってるはずだよ？」

オーディーンはその優しい声色に驚く。

先程の裂帛の戦いにも似合わない声だからだ。

だが・・・不思議と違和感はなく、どこか心地よい感じ・・・。

「・・・」

「救いに来た・・・けど・・・間に合いそうに無いね・・・」

「何を・・・！」

剣士はオーディーンをスルーしアリアを抱き起こす。

「・・・虚数空間へ行くんだ」

「・・・は？」

「僕がと・・・アリアを魔石化し、次元の海を渡らせる」

「・・・」

オーデインは思考した。

・・・恐らく、アリアは管理局に狙われている。

確かに虚数空間へ入るのは絶対に逃げられる一手だろう。

だが同時に自殺行為だ。

「・・・抜け出せる手段は？」

「近いうちに抜けられるよ。」

世界はそついつ風<sup>.....</sup>に出来てる

オーデインは思う。

「……信じます。我が主をお助け下さい……」

これ以外に無い。無いのだ。

今、アリアはほとんど死んでると言っても過言じゃない。

しかしそれを回避する方法……魔石、クリスタルへの進化だ。

クリスタルや魔石の中では時間が停滞し元へ戻ろうとする。

傷だらけの召喚獣が自らを倒したものに隷属しても

召喚される時に傷だらけでは役には立たない。だからこそその魔石。

それに加えて虚数空間の『曖昧な時間』で十分に快復できるだろう。

「じゃあ、君はどつする？」

「私は魔石になったアリアを守ります」

「そっか。じゃあ始めよう」

アルトリア・ムーンライトのミッション失敗。

オールドキングの仕掛けたロストロギアを用いた爆弾で、

基地を中心に半径10キロのクレーターができる程の爆発。

アルトリアは生死不明認定。

一人の英雄を失い、人々が悲嘆にくれると同時に、

HCという反管理局勢力の撲滅が成功したことを悟る。

人々は知らない。

それが、管理局の陰謀であると。

## 第28話 時よ戻れ。

息子を見送った後、私は任務で聖王教会へ赴いた。

・・・だけど、集中できるわけが無い。

あの子は生存率が限りなく0の任務へ赴いてるというのに。

私はそこでの仕事を終わらせると、少し休みたいと思って裏庭に赴いた。

アリア・・・私とタイラーの宝物。

アリアがまだ小さい時、私と会える日はいつもここで遊んでたっけ。

タイラーの10年耐久大忙し祭りももうそろそろ終わる。

そしたら、3人でここに来て、ゆったりとして……。

私達家族が家に揃うときは両手で数えられるかどうかの回数だった。

そんな事を思い、裏庭を歩く。

……と。

その草木の壁と茂みに何故か……目立たないように穴が空いていた。

そう。隠されているかのように空いている穴。

ちょっとした知的好奇心が刺激された私はその穴へ潜った。

……大丈夫。あとは家に帰るだけなんだから。

もう昼だ。恐らく……決着は付いている。

少しでいい。他の事がしたかった。じっとしていたくはなかった。

・・・最悪の知らせを聞きたくなかった。

穴の先を抜けた草壁の迷路をさ迷うかと思えば、

あっさりとどこかへ開けた場所へ抜けた。

「・・・祭壇・・・違う・・・お墓・・・？」

・ 広間の周囲にはお花畑が広がっていて八角形の台座が中央にあり・

その中央にベルカの剣十字の墓。天は木々が覆い、

木漏れ日を写し出して花畑と剣十字の墓を幻想的に彩る。

「……？ お、お姉さん、どうやって入ってきたのっ!？」

そしてそこには金髪で糸目の……女の子のような少年がいた。

「……きよ、教会の裏庭から迷路を抜けて……だけど……」

「……え、えっと……」

そう話すと少年はうるたえる。

「ね、少年君……ここ……なんて所なの？」

「！ 僕が男の子ってわかるのっ!？」

少年は糸目を薄く開き驚く。そして私は驚いた。

この子……アリアに似てる……？

「ええ。私の息子が女の子っぽくて……それに似てたし」

「……もしかして……？」

そう言っつて少年は私を見つめ、おもむろにポケットから金銀の懐中時計を出す。

じーっと時計盤を見つめると、満足したのかパチンと蓋を閉じて頷いた。

「お姉さん、今、新暦何年？」

「え……？ 新暦63年でしょ？」

「あー、全部分かった。うん……」

えっと……？ この子は何が言いたいのかしら……？

「……はね！ 僕の……僕と僕の「秘密基地！」」

「……え？ あ、そう……」

「……お姉さん、何か悲しいことあったの？」

ぐむ……と口が閉じる。

「……そう。そうね……息子がちょっと……ね……」

「……僕より年下ぐらいの？」

「あら、おませさんね？ 年下が好きなの？ 残念だけど15よ  
ん？」

「ふえっ！？ 15っ！？」

……不思議な子ね……そんなにショックだったのかしら……

……あ、アリアは男の子だった……失敗失敗……

ん？ じゃあなんでこの子は違和感を覚えないで驚いてるんだろう？  
……？

少年は顎に手を当てて考えた後、口を開いた。

「僕とお話、しませんか？」

「……え？」

近くにあったベンチに座り、私は少年に全てを話した。

そして、会話をしてる間にメールが来た。

生死不明通知。

私は言った。その全てを。

……少年がどこか浮世離れしてるような感じだからか、

それとも別なのか……この子には、アリアと似た空気を感じるの  
だ。

赦し、受容し、包み込む・・・そんな空気が。

「アリアって人は・・・じゃあ・・・」

「・・・ええ。もう・・・アリアは帰ってこないでしょうね・・・」

ボロボロと目から涙が流れ出すのを感じる。

「あ、わ！ えっと・・・」

「ごめんね？・・・ちょっと、お姉さん・・・」

「だ、大丈夫です！ ほ、僕が居ますよ！ ぎゅーっとしてあげます！」

彼の同年代の中でも小柄であろう体が私の体に抱きつく。

私は自分の中の気持ちを見る。いや、見せられた。

後悔。

「……管理局を……魔導師をやめればよかった。

それが、それが自分のアイデンティティだからと、

いつまでもいつまでも……ちっばけなプライドにしがみ付いて。

その結果ね……？

私は、あの子の「本当の涙」を一度も見たことが無いのよ……  
「？」

それを聞いた彼は、顔を上げて私を見る。その目は開いていた。

青く輝く吸い込まれそうなブルーの瞳……。

口から出かけた言葉をぐつと呑み込むような仕草をすると、

少年は私の手を引っ張ってベンチから立たせ、広間の奥にある壁へ  
進む。

すると……壁が透過され、通路ができたではないか。

私は少年に手を引かれるがままに進む。

開けた場所に出たのは・・・

「・・・？」

朽ちた神殿、大きな振り子時計、そして中心に突き刺さった大剣・・・。

少年は・・・信じられないが大剣を片手で引き抜き、

私へ柄に触れとでも言いたいかのように・・・

「ん！」

と差し出してきた。もう訳が分からなかった私は柄に触れて・・・。

「僕が助けるから」

その声をBGMに、私は意識を失った。

びっくりした。それ以外に言いようが無い。

「・・・記憶の記録完了、次元跳躍可能、時間跳躍可能」

任務だったのなら朝だろう。

その時間にどこに居るかも分からない人を探すというのは骨が折れる。

僕は普通じゃないからいいけど。あ、ほら見つけた。

シルヴィアお婆ちゃん……お姉様？……に転移を掛け教会へ戻す。

月姫だから……かな……無意識下で世界を超えられるなんて。

「……」

まだ、聖王教会の白い病室で眠る父さんを思う。

「……さっぴん、ほっとけないよ。」

ガシャンと大剣をひつつかみ、懐中時計を開く。

シルヴィアお姉さんはリボンを持っていなかった。

という事は父さんがつけているはず。

あれは一家代々伝わる月姫のリボン。

初代月姫の持ち物なら容易に位置を逆算できる。

「『そう、ひとつ、ひとつでもわがままで』」

「『いつもいつも、こうかいのくりかえし』」

「『だったらとけいのはりを、いじろつか』」

「『やりなおしたいな、かいちゅつどけい』」

「『それをかなえよう、かいちゅつどけい』」

「『ひらいてひらいて、かいちゅつどけい』」

「『私は時間を、世界を超える永遠の旅人』」

「タイムピース・・・起動!!」

S a c r e d C o f f i n - T I M E P I E C E - S t a  
n d b b y . . .

「・・・今行くからね、父さん」

・・・Ready

いや・・・あまりの父さんの惨状に聖剣使っちゃった・・・。  
しょう、しょうがないじゃないですか！

父さんがボロボロでついカツとなっちゃって……。

あ、いや、トーレさんを責めてる訳じゃなくてですね……。

え？ 衛星軌道まで転移で行ってお手紙とか届けましたよ！

はやてお姉ちゃんに……めっちゃ怒られましたけど。

でも、皆優しかったです！ 特にスカさんとクア姉さん！

いつかお話できたらなー。

……あう。お話が逸れましたね。

僕は父さんを魔石にし、大剣で切り裂いて出来た空間にポイっとします。

……世界とは因果と運命で成り立ちます。

あれほどの事件が起きるのなら……父さんはあそこへ行くでしょう。

……あの家とは限らない。

もしかしたら、父さんを拾ってくれるのは只の一般人かもしれない。  
それとも、大きな運命を持った人のところかもしれない。

・・・誰と結ばれるかも分からない。

六課の誰かかもしれないね

僕は生まれないうかもしれない。これを聞いたら母さんは発狂しそう  
だな。

・・・そう思って僕は笑みを浮かべる。

「だから、世界って面白い」

僕はアルカンシエルの照射なんていう『世界』の破壊を許さない。

爆弾は許容できる。だって世界は滅びない。

それによって分岐を辿るだろう。

ただ・・・消えてしまつては発展が、分岐がしないのだ。

つまらない。とてもつまらない。

僕は大剣のみを抜き、聖剣で空けた穴から空へ抜ける。

そのまま加速、加速、加速、加速、加速・・・！！

大気圏を突き破り、宇宙空間へ・・・そして見える兵器。

なるほど、アルカンシエルと動力炉だけを詰めた破壊のみの兵器。

遠隔操作なりなんなりが可能なのかな。

でも、それからは悪意しか感じない。

物を、人を、星を、世界を破壊するためだけの。

「・・・そこまでして父さんを消したいのか・・・！！！！」

すでにチャージが始まっている。僕は太剣に力を注ぎ、構えた。

照射。

音など無い。しかしそれに僕は剣を振るう。

「  
」  
ブ 獅子奮迅  
レ  
イ  
バ  
ー  
」  
」

これが、何故アルカンシエルによる照射が行われず、

自爆装置が起爆し、激戦の爪痕がクレーターのみになった真実である。

管理局としてはどうでもよかった出来事。

アクションは無い……

だが、「何者か」による情報提供によりこの照射の指示が、

一人の高官の自由と共に日の目を見ることになる。

ランカーを初めとする地上本部は本局を猛烈に叩いた。

その結果、「海」とその上層部の一部が逮捕。

H.C.の撲滅に喜び、彼を忘れかけていた人々は想う。

ランク9、エクレール。彼のなんと報われない事が……と。

まあ、こうしてH.C.事変は幕を閉じた。

……彼は、どうなったのだろうか。

黒衣の剣士・・・アルフォンスは、

流星の術式を施し虚数の海へ彼を放った。

4月。

とある管理外世界に、

赤い魔石が零れ落ちる。

それを拾ったのは。

## 第29話 召喚。

私は一人だった。

小学校に上がっても。

友達なんか出来なくて。

誰も私を構ってくれなくて。

私がいい子にしていればいいんだ。

四月の中旬。

私はどのグループの輪にも入れず孤立していた。  
いいの。私は早くお家に帰ってお勉強しないと。  
だって私はいい子で・・・手が掛からないから。

・・・いいなあ。友達。

放課後の道。どうせ、家に帰っても、  
家族って「人達」は誰も居ないんだ。  
両親と手を繋いで歩く男の子を見る。

・・・いいなあ。家族。

家に帰ると、そこにはラップに包まれたご飯。  
チンして食べてね。その、短すぎる書き置き。  
レンジでチンしても、お皿の中心は冷たくて。

・・・いいなあ。暖かいご飯。

寝るときは一人。だけどお星様を見るの。  
昨日拾った、赤くて綺麗な宝石を見るの。  
ベッドに腰掛けて、両方に乗せて見るの。

これだけ綺麗な事が揃ったら、きっとお星様が、願いを叶えてくれるんだ。

「もう、いやです」

だから私は……。

「寂しいのはもういやです」

なのはは・・・願うの。

「一人はもう・・・いや・・・ぐすっ・・・いやあ・・・!!」

ドクン

「なのはを・・・えぐっ・・・一人に・・・し、しないでえ・・・」

刹那、空がはじけた。

満月が輝いて、星が雨のように舞い踊り、

風が桜の花を巻き起こす。

少女は何をすればいいのか、何を言えばいいのかわかった。

「封印解除」

自然と、口からこの言葉が出たのである。

「聖なる枢に永久の思い出を刻め」

召喚

すると、少女……なのはの手から白い純白の極光。

「……あ……」

なのははベッドから吹き飛ばされ、床へ転がり落ちる。

「いたた・・・」

なのはは頭を振って窓のほうを見た。

そこには月光を背負った、白い服の人間。

彼女？ いや、彼は言った。



「

問おう。貴方が、私のマスターか」



第29話 召喚。(後書き)

やっぱりセイバーボディなら。

第30話 どうも。アリアです。(前書き)

お待たせしましたw

第30話 どうも。アリアです。

・・・彼の問いから10分後。

私は目の前に座って、

正座をしつつ「うーん」と考える金髪の男子(?)を見た。

寶石から出てきた不思議な人・・・。

「この子とリンクしてる・・・？ 召喚獣扱い？」

「・・・いや、元の力に戻るまで1、2年かな？」

「え・・・と・・・」

えと、えつと……!!

「あの一!」

「……?」

彼が「うん?」と首を傾げてこちらを見る。

「なのはの傍に、いてくれ……ますか?」

怖い。自然と目を瞑ってしまふ。

そして頭に乗せられる手。

「もちろん。小さなご主人様」  
マイマスター

私は、彼の胸へ飛び込み大泣きした。

今までの分の涙を、流す為に。

「私……なのは！……なのはあ！……ぐすつ……

うえええええええええええええええええん！！！」

「俺はアルトリア。よろしくね」

sideアリア

白状しよう。めっちゃ慌ててた。ただ、目の前の女の子が俺を召喚。

俺とリンクしてるという事がわかった。リンクというのは一心同体という事。

いや・・・使い魔的な位置か。魔力の供給が無きゃ俺はすぐに魔石に・・・。

・・・魔石？

てか俺はその後どうなったんだろう・・・。

・・・まずは休眠に入ってるオーディーンが起きたらでいいか。

俺は泣き疲れて眠ってしまったマスター・・・なのはをベットへ横たえる。

どうしたもんか。

俺は腰のブレイズエッジをホルスターごと外し、  
なのはの机の上に置かせてもらう。

この子にリンカーコアはある。

魔力量も『ナイトオブラウンド』の魔石を召喚しても余りある魔力。

・・・優秀な魔導師になるだろう。この子は。

この子から魔力補給を続けてもらえれば・・・

・・・とりあえず召喚獣からはおさらばだ。

ただ、幼い子に負担をかけないため1、2年掛ける事になるが。

・・・。

家にはこの子一人なのか？

俺はなけなしの魔力でセイバーの部屋着を作ると、（原作参照

階段を下って一階へ。時刻は21時半。

「・・・ああ、大体わかった」

リビングのテーブル。

そこには真っ二つに破れた・・・『チンして食べてね』の書置き。

「・・・話分かる人だといんだけど・・・」

俺は嘆息すると、玄関が開く音がする。

まあ・・・正座だよな。

「ただい  
」

「・・・こ、こんばんは」

入ってきたのは・・・なのはとよく似た女性。年の頃は20代か。

「・・・ええつと、どなたかしら?」

女性は冷静を気取っているが目が泳いで冷や汗が溢れている。

チラチラと電話を見て・・・あ、させませんよ?

「マスターなのはお姉さまですね?」

「え? あ・・・え?」

「まずは落ち着いてください・・・」

10分後

「……ごめんなさい。落ち着きました」

「いえ、当然の反応です」

俺たちはテーブルに座って向かい合っていた。

「……まず、あなたは何者なのかしら？」

「はい。改めまして……アルトリアと申します」

「ええ、高町桃子です」

「よろしくです」

「……何をしに来たんですか？」

「マスターなのは呼び出しに感じました」

「……職業は何かしら？」

・・・このタイミング、だよな。

俺は少ない魔力を使って、炎、水、雷を両の手の平に発生させた。

「・・・魔導師です」

「あら、本当にいたのね・・・」

・・・え？

「あら、もっといいリアクションを期待したのかしら？」

「い、いえ、ただ・・・まあ、はい。そうですね」

「魔導師っていう存在がいるのは夫から聞いているわよ？」

・・・裏家業の人か・・・。

「・・・ここから話が拗れますが・・・」

「ええ。適応力はあるわ」

俺は魔導師だったが任務の途中に命の危機に陥り、

死んだと思ったらいつの間にか『魔石』と呼ばれるアイテムになっていた。

そしてなんらかのアクシデントが偶然でなのは手に渡り、

あの子の強い願いを受けて魔石から召喚された事、

魔力は快復を待っている途中で完全回復まで1、2年掛かること、

魔力無しでも十分強いこと、

今のところ故郷へ帰る術は無いことを説明した。

「そう・・・まるでゲームね・・・」

「あはは、そうですね」

「私もやりこんでたわ・・・あ、あなたの性別だけ・・・」

「・・・ええ、俺はこの言葉遣いの通り男です」

ぽりぽりと頬をかいて伝える。

すると桃子さんがピクリと動いた気がした。なんだろ。

「そうでした・・・なのは願いに応じた・・・と？」

「はい」

「・・・あ・・・あの子の・・・願いつて？」

声が震えているのを自覚しているのか、口に手を当てながら言つ桃子さん。

俺はそれをまっすぐに見つめて・・・言つた。

「寂しいのはもう嫌です。ずっと一緒に居てください」

桃子さんの目が見開かれる。まるで今、気付いたかのように。

「……俺からは何も言いません……家族の、問題ですから」

「……ええ」

「ただ、マスターを思って言います……」

あの子の事を、もう少し考えてあげてください」

桃子さんが俯き、涙を流す。

「……あの子と、お話しなくちゃね……！」

「……失礼ですが、お父様は何時ごろお帰りに……？」

「あ……夫は、入院中……」

・・・夫？

・・・把握。この人マスターのお母さんか。

俺は桃子さんから夫婦と息子達で喫茶店を開いていたこと、

その日、夫は元裏稼業で、古い友人から頼まれ要人の警護をしていた。

しかし警護対象を守り・・・約1年たった今も意識不明の重態という事、

それを言い訳にするわけではないが理由の一つとして、

喫茶店が忙しくなのはに構えなかったことも聞いた。

「・・・そうですか」

「ええ・・・あなたはどつするの?」

「・・・ええ、魔力はなのはから供給されてるので、

食事は取らずとも平気です。なので「もついいわ「・・・?」

桃子さんは立ち上がり。

「ビィッ！」

「あなたは今日からこの高町家の一員ね！……！」

「……シリアスは投げ捨てるものですか、そうですか……。」

「……は、あ……。」

流石の俺もたじたじだった。



第30話 どうも。アリアです。(後書き)

はい。高町家の一員フラグ。

第31話 荷物整理。(前書き)

核心へ迫る話は今度W

### 第31話 荷物整理。

あの後、後から帰って来た恭也と美由希にご挨拶。

なんだかチクチク「幼い」殺気出してたけど・・・

それを上回るのを出してあげたら黙って話を聞いてくれた。

・・・切りかかれるかと思っただけど。

話してみたらすごいいい人達だったしねー。

時刻は朝、場所は高町家のなのはの部屋。

久し振りに座りながら寝たので腰が痛い。

喫茶店へ年長3人は出掛けたそうだ。

「纏まった時間が取れるまでなのは傍にいてあげて」

まあ・・・確かに自覚はあるっばいんだけどな・・・。

俺は言われずともなのはそばに居るさ。

とりあえず家の掃除など家政婦的な仕事をしつつなのはが起床するのを待つ。

今日は金曜日・・・学校あるじゃん、起こさないと・・・。

「あ、う・・・？」

あ、起床を確認！

「おはよ、なのは」

二階から降りてきたマスター、なのはにご挨拶。

ストレートにしてる髪も可愛いな。

「……………」

そしてそのまま黙ってポロポロと涙を零す……………っっっっっ？

「え、ちょ、なのはっ!？」

エプロンで手を拭きなのはの方へ駆け寄る。

するとなのはは涙を「しごししながら言った。

「違うの……………嬉しいの……………おはようが嬉しいの……………」

……………!

「そっか……………」

「……………うん、おはよ……………! アリア君……………」

そしてなんだか憂鬱そうに学校に行くのはを見てため息をついた。

「・・・早急に解決する必要がある・・・」

現状のまま、腹を割って話しても根本的な解決・・・。

3人が忙しくなくなるわけじゃない・・・。

なのはは変わらず一人で、家族の愛を受けなくなる・・・。

「・・・どうしようかな・・・？」

あの子の闇となってしまう前に・・・。

「・・・まずは俺の持ち物の点検かな・・・？」

部屋へ戻りブレイズエッジをテーブルへ持ってくる。

そしてバリアジャケット内の持ち物をスキャン。

ついでにデバイスも両方スキャン。

ガンブレード型デバイス「ブレイズエッジ」(中破

グローブ型ブーストデバイス「オルギア」(大破

薬品と医療用小物の包帯、止血剤、が数点入ったポーチ、

魔力装填済みのカートリッジが36発、

空のカートリッジが50個。

しかしリロードマガジンはなし。

・・・まずはデバイスの修理だ・・・

「無理させたね・・・ちゃんと治してあげるから・・・」

フレームに亀裂の走ったブレイズエッジと、

宝石部分に大きく亀裂の走ったオルギアを見て言う。

あとは・・・。

「意外とカートリッジは残せた・・・な・・・。

ただ、自分の魔力に戻せるわけじゃないし・・・」

ポーチには小物と・・・。

・・・コロコロッ

「・・・ん？」



第31話 荷物整理。(後書き)

更新

ついつた始めた。けど昨日よくわかんない！

よかったら探してみてねー (おい

第32話 実はポーションとは高レベルな薬品。

時刻は巡ってまた深夜。

もう金曜日から土曜日へと日付を変えようとしている。

そんな中……。

海鳴大学病院 PM 23:57

桃子さんから聞いた……海鳴大学病院に行き、鋭敏な感覚を研ぎ澄ませる。

なのはと同じ魔力波・・・魔力波・・・別にリンカーコアを持たずとも、

人とは本当に微弱な魔力を発している。ましてや霊脈でもある海鳴の住人。

魔力波に鋭敏な・・・云わばニュータイプの体質の俺はそれを捕らえられる。

「あそこ・・・かな・・・？」

なんとなくピピピンッ！ と来た所へ移動。

ちなみに壁のぼりだ。グラビデを微弱展開。

・・・死ぬほど辛い。けどなのはのため、なのはのため・・・。

こんなところで貴重なカートリッジは使えない。

限界まで自分の魔力を搾り出して・・・。

窓へ張り付き・・・窓は・・・やたっ！ 開いてる！

中へ進入。いつかビルへこんな事したなとか思いつつ・・・。

魔力の気配を・・・。

ああもっつ！ 感覚も鈍くなってる・・・。

鈍っている感覚に心の中で悪態をつき、廊下を進む。

・・・。そして見つけた。

「ネームプレート・・・」高町士郎『「

ノックもせずに失礼する・・・ごめんなさい・・・っど。

計器が静かに音を経て・・・お若いお父様が静かに寝息を立てていた。

「走査、開始」

・・・4発の銃弾っぽいのが当たったのか・・・。

大手術もするも・・・尚意識不明。

「この程度なら癒せる・・・」ベル・セル・ル・セイル・レディア  
ン「」

カートリッジを6発消費。純粹な魔力の渦を召喚し、

薬品のポーチから「ポーション」をとりだす。

何故、こんな事をするのか。

このポーションは、オーディーンが俺の魔力から作り出した薬品。

・・・ポーションというのを侮る無かれ。

このポーションですら傷を「瞬間的に治癒」できるのだ。

薄く塗り広げれば広く浅く、塗り込めば狭く深く。

今からこれを、カートリッジに入れた俺の魔力で更に濾過。

そして虎の子の「エーテル」と調合。

・・・本当はFFXのポーション×ポーションでウルトラポーションを作りたい。

だがポーションとエーテル、一個ずつしかないのだ。

指を十徳ナイフで切り・・・血が滴り落ちる。

・・・しかし、たったこれだけポーションとエーテルでも。

「イヴァリース式第五魔法・・・我は癒しと安寧を求めるもの、  
等価は魔力、術者の血液・・・我に授けん、パイアンの聖杯」

『調合・エクスポーション』

・・・人一人全快復させられるエクスポーションを作れる。

ただ、カートリッジを6発・・・今、この状況では超高出費だ・・・。

手に生成された装飾過多気味・・・ではないガラス瓶を持つ。

・・・このところから魔力の節約は始まるのだ。

それを全て土郎さんに振り掛ける……。

「……き、君は……？ それに……私……は……？」

「動かないで下さい、高町土郎さん……」

「む……筋肉が落ちていてね、動こうにも動けないよ」

「……では、このままお話を聞いてもらえますか？」

土郎さんは静かに頷いた。

「……事情を話してくれ。君は悪人ではなさそうだ」

「……ええ」

まず土郎さんが倒れて1年近く経ってること、

年長3人が喫茶店で大忙しなこと、

そしてなのはが孤独となってること。

その後自分が魔法使いであり、

桃子さんにしたのと同じ説明をした。

「……そうですか……なのはが……」

「……あと、何か……？ 時事ネタはわかりませんが……」

「ああ、世話をかけたね。時事がわからないのは当たり前さ」

明日、家族を集める。

そう言って、士郎さんはナースコールを押した。

第32話 実はポーションとは高レベルな薬品 (後書き)

次回、高町家救済。

### 第33話 『家族』

海鳴大学病院。 AM 11:12

8時頃から高町家での家族会議が病室で行われていた。

近くの自販機で缶コーヒーを購入し病院のロビーでじっと座って待つ。

「・・・」

・・・ZZZ

「はっ!?!?」

ダメだ眠い・・・寝不足ってヤツだ。

ごしごしと目を擦りスーツの裾を整えた。

家じゃあのスカートでも我慢できるけど・・・外じゃあ・・・ね・・・。

無難なので黒いスーツを着用する。不自然かもしれないけど・・・。

ん？ 普通のエージェントスーツに白のYシャツ、黒のネクタイに黒リボンだけど。

髪はポニテですよみなさま！

さあさあ俺の・・・何言ってるんだろ、深夜テンション怖い。

まだ時間が掛かりそうだと判断した俺はコーヒーを買いに立ち上がる。

「・・・缶コーヒーが買えない・・・だと・・・？」

貰ったお小遣い200円が残り80円しか無いことに気付き戦慄している・・・。

「・・・あの、自販機はこう使っんですよ？」

隣からにゅっと伸びてきた手がお金を入れてボタンを押した。

・・・あれ、もしかして自販機の使い方が分からない人って思われてた？

まあ外国って自販機少ないしね・・・。

「あ、あーゆーおーけー？」

「いや・・・日本語は喋れるよ、ありがとう」

「あ、そないですか・・・すごく綺麗やからいい所の人かと思って・・・」

そして声のするほうを回くと、なのはと同じくらいなの。

茶髪・・・の・・・

『 …… ザザッ …… にザッ …… ちゃん 』



「・・・んあ・・・っ!!」

ガン・・・と何かに頭を殴られたような痛みが走る。

「あ、だ、大丈夫ですかっ!？」

「うん、平気・・・ほら、もうお行き・・・君も用事があるだろう？」

俺は片手で頭を抑えながら、

自販機に入ったままになってる少女のジュースを渡す。

「せ、先生呼んできたほうが・・・」

「ああ、平気だよ・・・今から会いに行くしね」

まあ、嘘だけど・・・この子はこう言わないとずっとここに居る気がする。

「そ、そうですね・・・ほな、じゃあ・・・」

「うん、気をつけるんだよ?」

本当は、車椅子を押し上げてあげるくらいの事、してあげたかったけど・・・。

「・・・なんだこれ・・・？」

頭の痛みは引いていた。虚数空間を抜けたことで何かあったのか。家に帰ったら徹底的に異常検査だな。そう思っていると・・・？

「・・・土郎さんっ!？」

「・・・やあ、アリア君」

前から土郎さん率いる高町家が・・・って・・・。

「も、もう歩いていいんですかっ!？」

「君が治療したんだからよくわかってるだろう」

た、確かにそうだけでも・・・エクスポーション使ったわけだし。

「お医者様なら・・・少し目を瞑って貰ったよ」

ああ、それと・・・と、土郎さんは脇にどいて・・・。

その後ろの陰の中心に隠れていたのは、

未だにえぐえぐとしているのは。

そしてなのはと手を繋いでる美由希と桃子さん、

後ろからなのはの肩に手を置いてる恭也がいた。

「……ありがとう、また僕たちは『家族』に戻れた」

美由希の隣に立ち、土郎さんは言った。

「・・・君のお陰だ。感謝する」

なのはも泣きつつも笑顔を、

恭也は恥ずかしそうに笑顔を、

美由希はにこにここと笑顔を、

桃子さんは嬉しそうに笑顔を、

士郎さんはその顔に微笑を。

「まあ、ありがとく貰っておきます・・・」

俺は顔を背けて言った。

その家族があまりにも眩しかったから。

そう言っと、士郎さんが爆弾を投下した。

「それじゃあ君が故郷に帰るまで、

なのはの従者をよろしく、『高町アリア』君

ああ、戸籍はもう僕が友人に頼みの電話をしておいたからね」

「……へっ?」

そう言いつと、高町家は土郎さんを先頭にロビーを出て行くとする。

「ちよっ!?!? ちよっとっ!?!? 俺が許可した覚えは無い……」

「「「「「高町家へ」「」「」「」

「・・・あー、お邪魔します」

本当に、眩しい家族だ・・・。

あと、なのは・・・笑い泣きもいいけど、

そろそろ泣き止もうな。

俺は走って・・・ロビーの高町家の列に加わった。

第34話 ザンガン、斬岩、ZANGAN。(前書き)

なんだ？ 筆が進むぞ・・・？

第34話 ザンガン、斬岩、ZANGAN。

「……は？」

どうも、アリアです。最近ツイッター始めました。

よければ探してくださいね……ってそんな場合じゃない。

「いや……アリア、君は結構強いだろう？……素手でも、剣でも」

「俺魔法使いですよ？」

朝、朝食の場面で土郎さんが口を開いた。

・・・目玉焼き美味しいです・・・あ、ほんとに美味しい。

「桃子さん、目玉焼き美味しい」

「あら、ありがとう」

「・・・ふむ、魔導師・・・ね・・・」

無視無視・・・なんでかって？ 厄介ごとの匂いしかないから。

「じゃあ、地下室の君の部屋においてある銃とグローブは何かな？」

「・・・っ!!・・・っ!!?・・・!!・・・!!!」

「え、あ、アリア君すっかり・・・えと、えい！」

なのはに背中を叩かれ喉に詰まったご飯が取れ胃に落ちる。

・・・しかしいつの間に・・・？

「・・・いつの間に入ったんですか？」

「・・・いや、中から変な『気』を感じたからね・・・

気になって覗いてしまった訳だ・・・すまない。昨日の話だ」

まあ、見られて困る物は無いけど・・・。

珍しいな、土郎さんが勝手に人の部屋に入るなんて・・・。

「いえいえ、平気ですよ」

「・・・父さんとの差はなんだ・・・？」

俺の返答に対し恭也が頭を振る。

「うるさいよ恭ちゃん」

「お兄ちゃんうるさい」

「静かにね、恭也」

「・・・」

そう・・・察してる人も居るかもしれない。

恭也はこの間、俺の実力を確かめんと寝込みを襲ったことがある。

・・・もちろん、性的な意味ではない。

・・・それで、まあ、お化けと勘違いした俺が、

絹を裂くような悲鳴を上げてしまっただけ・・・。

場所、恭也in俺の部屋

服装、恭也は闇に紛れる真つ黒黒助、俺は一人だったしパン1。

状況、恭也は鋼糸と小太刀、俺は丸腰。

そこに悲鳴が加わると・・・？

あら不思議……。

悲鳴を上げる金髪の少女（パンツ1枚）を襲う犯罪者の出来上がりです。

判決、有罪。

罪状、不法侵入、婦女暴行未遂。

罪状がおかしいのは桃子さん曰くデフォらしい。俺は納得はしてないけど。

……まあ、何はともあれ飛んできた美由希と桃子さんから制裁を受けていた。

なのはからは「お兄ちゃんって変態さんだったんだね」

……というありがたい言葉を貰っていた。

「……武術をやってるのかい？」

「ええ、それなりに強いです」

「・・・普段なら僕と手合わせと行きたい所だが・・・」

士郎さんが新聞を読みながら言う。

「・・・よかつたら恭也とやってくれ。全力で構わない」

「父さんっ!」

「・・・んー・・・」

嬉しそうに士郎さんを見た後、俺を見る恭也。

バトルジャンキーめ・・・ここいらで実力を教えてあげよう

(ノリノリである)

・・・うるさい。

「いいよっ」

「・・・決まりだな」

よし、そうだったら準備しないと、体を鈍らせる訳にも行かないし。

「……ダメ!!」

「「「「「……なのは?」「」「」」」」

なのはが涙目でこっちをみていた。なんぞ。

「やだっ! アリア君が怪我するとこ見たくないのっ!」

ノリ気だった俺と土郎さんと恭也が額を押さえる。

「あー……なのは、えっと……」

「なのはがいるうちはアリア君に戦いなんてさせないからね!」

なのははぶんぶんと怒ってそのまま学校へ行ってしまった。

食器をかたさないまま行っちゃってもう……。

「「「・・・ふう」「」

俺達男3人組はため息をついた・・・

「・・・で、どうするの士郎さん」

桃子さんが食器を片付けながら言う。すると士郎さんは・・・。

「・・・しょうがないけど・・・どれだけ強いのかとか、

なのはの「応は『召喚獣』なんだろう？・・・父として把握しておきたい」

君の実力を・・・ね・・・。

俺は静かに頷いた。

美由希と桃子さんがため息をついていたのは内緒である。

道場、AM09:18

「御神古流二刀剣術・・・師範代、高町恭也」

真剣の小太刀を抜いた恭也が俺の前に立ち、名乗りを……。

……。

名乗り……どうしようw

魔導師じゃなんだか味気ないしそもそも魔法使えないし銃剣未修理だし。

「管理局地上本部陸士296部隊所属、ランク9。」

ザンガン流継承者……アルトリア・ムーンライト」

そう言っつて拳を構えた。

「……武器は？」

「……修理中！」

「そうか・・・じゃあ行くぞ!!」

いつの間にか横に恭也が・・・。

降られる小太刀を屈んでやり過ごし脚払い。

しかし恭也はジャンプすると小太刀を逆手に持ち替え、

空中でのダイナミックな回転斬りを放ってきた。

俺の上を飛び込み前転しつつ斬る・・・まあ、悪くないけど・・・。

「ほい」

「ぐはぁっ!?!」

大振り気味でしかも丁度頭上に来た恭也の腹を昇竜拳。

俺の右手の上でくの字に折れ曲がる恭也。

俺はそれを持ち上げて・・・。

「ちよっ!?!? 腹がすっごい熱い熱い熱い熱い熱いっ!?!?」

「っおおおおおおおおおおおっっっっっっ！！！」

### ザンガン流奥義

「『ゴットフィンガー』！！！！」

「いやそれ違うぎゃあああああああああああっっっ！！！」

この後恭也が全治2週間。なのはからのお説教と（OHANASHIにあらず）、

桃子さんからウェイター（ウェイトレスにあらず）のお仕事を貰ったのは、

ここだけのお話・・・ってことでw

第35話 一目惚れプリンセス。(前書き)

ザンガン流の本気試合を期待した方コメントナサイW

基本ほのぼのへ移行中ですし・・・W

タイトルの内容は誰から誰なのでしょう・・・？W

まさかのあの人が登場ですW あ、ネタ回ですよ？

アリア君のツイッターについて早速メール来ちゃいましたW

ザ・インタビューズの私のページのすみっこにちょこーんとあります。

よければ来て上げてね

フォローする時に「小説のほうから来ました」ってご挨拶とかする  
と、

アリア「嬉しくて嬉しくて堪らなくなっちゃいます」

では……35話をお楽しみ下さい。

### 第35話 一目惚れプリンセス。

新暦63年、5月中旬・・・。

「はぁ・・・」

6人でのいつもの朝食風景。だけど自然とため息が出た。

「じゃあアリア君、今日もよろしくね」

「・・・うう、了解・・・」

恭也を怪我させたお仕置きの真っ最中である。

まあ・・・ウェイターをやる事なんだけどね。

憂鬱な気分を晴らすとテレビをぼちっと……。

『次はお天……えっ？ あ、そ、速報ですっ！』

テレビからリポーターの必死そうな声が聞こえてくる。

『……昨夜未明からゴールドリズン・コーポレーションの御曹司、

ギルバート・ゴールドリズン氏が行方不明となっているそうですっ

のこつ。  
ギルバート氏は日本の横浜での観光中、突然姿を眩ましたと

アメリカ政府は重大な国際問題として……』

「……ゴールドリズン……？ こりゃあ一大事だ」

「……？」

「……どりずん？ と首を傾げると土郎さんが説明してくれた。

「アメリカの一大企業だよ。その御曹司が行方不明……」

……なんで日本観光なんかしたのか僕には疑問だな……」

「一体護衛や側近のエージェントは何を……」

自分の世界に入ってしまった土郎さんを適度に放置しつつ、

俺は食器を片付けて翠屋へ向かった。

……え？　いつもは翠屋で働いてないのだった？

失敬な。何故か遠見市の方の繁華街に行くと、

日雇いのバイトを持ちかけられるんですよ。

だから翠屋でも余裕ですっ！……遠見市は人材不足なのかな……？





HTT・・・『放課後・ティー・タイム』・・・。

それは海鳴や果ては遠見の学生たちが放課後に集う魔の時間帯である。

ちなみにもう夕方だ。はふう・・・あとはちよまちよまと捌けばいいだけ。

### カランコロン

その時、ドアに付いたベルの軽快な音が翠屋の店内に響く。

「いらっしゃいませっ」

一番きつい時間帯を乗り越えた事で、自然と笑顔も今日一番のものとなる。

見ると・・・すごいイケメンさんだった。

金髪の髪の毛に黒い・・・ライダーズーツ・・・だろうか。

その目はちょっと鋭いけどなんだか寂しそう・・・。

そのイケメンさんは、俺の事を驚いたように見つめた。

そう、穴が空くくらいに……。

「お一人様ですか？」

「……」

……ん？

「I s i t o n e?」

「……」

「……え、えっと……」

まずい。涙滲んできた……。

「あ、あの・・・？」

「・・・」

「う、うううう・・・！！」

なんだこのイケメンさんは。

俺を驚いたようにじっと見つめたまま動かない。

難易度高いぞ！！　どんな羞恥プレイだこれは！！

思わず銀のトレーを両手で抱き締めたまま視線がうろろろしてしま  
う。

「あ、あの、お客様・・・？」

「・・・けた・・・」

「・・・？」

その金髪のイケメンさんはやっと唇を動かさそう言った・・・。

「見つけた・・・私の・・・私の・・・っ!!」

「な、何を・・・ひゃああっ!？」

両手を取られ、トレーが床へ落ちる。

「我の・・・プリンセスよ!!!」

・・・えっ？

第35話 一目惚れプリンセス。(後書き)

はい。誰なんでしょうか。次話をお楽しみにW

第36話 海鳴ハートマジック。(前書き)

優しい英雄王、光臨。

日常キャラです。

でももしかしたら・・・アタラクシアのラストのような彼が見れるかも。

・・・あ、重ねて言いますが、ゲームはしてません。

fate関連はウィキやデータベースなどを参考としています。

ありえないって？

ありえないなんて事はありえ(ry

### 第36話 海鳴ハートマジック。

sideギルバート

・・・前世の記憶がある・・・と言ったら、どうだろう。

間違いなく精神病棟行きかもしれんな・・・。

・・・見えるのだ・・・自分の、『ギルガメツシュ』だった時の自分が。

いわば我と『ギルガメツシュ』は別人だ。

ただ、あんなに傲慢で不遜な態度を取っていた『ギルガメツシュ』を、

我は前世の自分とは思いたくはなかった。

た。・・・そして前世の自分と向き合っていくうち、あることに気付いた。

このギルガメツシュという男は一人の女性に本気で恋をしていたのだ。

ただ・・・傲慢で横暴な彼は、その愛を歪んで捉えてしまっていた。第三者の立場から、彼の思考がわかる俺だからわかったのかもしれない。

ギルガメツシュは構って欲しかったのだ。

暴君と呼ばれた嫌な自分を、彼女に愛して欲しくて。

ただ・・・愛情の表現が分からなくて、ぐちゃぐちゃになってしま  
つて。

だから彼は愚かな独占欲と支配欲に身を任せることしか出来なかつ  
たのだ。

・・・そう、我は考える。

そして、我も彼女を好きになってしまっていた。

彼に感化されてるだけかもしれない。だが、彼女の誇り高さとか、

そんな前に・・・我は彼女に一目惚れしたのである。

・・・そう、ギルガメッシュの記憶を見てるうちに・・・だ。

若干10歳から今の17才まで・・・我の初恋だ。

だから、この初恋遂げてみせる。

前世と現世・・・まとめてだ!!

・・・。

まあ、紹介が遅れたな。ギルバート・ゴールドリズンだ。

断片的な前世の記憶がある。そして現在、日本に来て逃亡した。

彼女が居るのは日本の冬木という所だったはず・・・

とりあえず横浜で行方をくらませ、

私の講座から金を下ろしてからまた眩んだ。

そして冬木市へ・・・？

解放されてる図書館のパソコンで調べる。

・・・無い。

冬木市というものが日本に存在していなかったのだ。

まさかグー ルでぐぐっても出ないとは・・・。

我は焦った。大いに焦った。そして一つの考えに至る。

・・・ここは、パラレルワールドではないかと。

そう考えれば辻褄があう。

地名が存在しない事や、魔法が無いという事も・・・。

・・・我は使えるが・・・周囲に魔力を持ったものが居ないのだ。

ああ、「彼」の全てを持っていると思ってくれて構わん。

・・・使うつもりは無いがな。

む、話が脱線した。

俺はとりあえず、横浜から身を隠しやすいところへ移動する事を考えた。

ここは見つかる恐れがある・・・よし、気まぐれだがどこへ・・・。

「すまない、その職員」

「は、はい・・・なんででしょうか？」

「ここいらでお前が行った場所はどこだ？ よかったら教えてくれ」

「え……あー……」

ふむ……どもる女性職員A。安心しろ。我は器が大きい。

「少し遠いのですが……海鳴という所ですね……」

「……ふむ……そこはどんなところだ？」

「ええと……それなりに賑わっていて……あ。

商店街にある『翠屋』っていう喫茶店のシュークリームがおいしいんですよ？」

……彼女は食べることが好きだったという事を覚えている。

行って損は無いか……？

「助かったぞ、礼を言う……職員A」

「え……は、はあ……」

その後職員Aからアクセスも聞き海鳴へ向かう。

・・・我も今風に言うなら『現代っ子』だ。

前世でも電子機器には手間取った覚えがあるな。うむ。

約1時間、電車を乗り継いで海鳴へ。

・・・翠屋という所はすぐに見つかった。地元でも有名ならしい。

店の前に建ちドアをくぐる・・・ピークは過ぎてるだろうとあたりを付け。

完全に油断していた。

我を出迎えたのは・・・私の想い人である彼女その人だったのだ。

彼女が何か言ってるがこの時の我には聞こえなかった。

・・・段々涙目になり、トレイを持ってもしじもじとしはじめる。

私は耐え切れなくなり・・・言った。今の一瞬で10000倍好きになつた。

「見つけた・・・私の・・・私の・・・っ!!」

「な、何を・・・ひゃああっ!?!」

思わず彼女の両手を取り、トレイが床へ落ちる。

「我の・・・プリンセスよ!!!」

・・・む？ 男だからプリンスか？

いや、問題は無い。彼は我が愛す。

性別など・・・些細な問題だ・・・

・・・我は愛し合えればそれでいい。



第37話 御曹司の事情。(前書き)

ああ、アリアに質問したい人はご遠慮なく、

気軽にツイッターで話しかけちゃってくださいw

アリア「元々そのために始めたしねっ」

では・・・どうぞっ！

### 第37話 御曹司の事情。

sideアリア

ええと、まあニュースで見たギルバート君その人だったわけで・・・。

・・・うん、自己紹介されました。

今はカウンターでシュークリームを食べながら紅茶飲んでいます。

・・・し、視線が部隊に居た時よりも熱っばいんだよなあ・・・。

下手にイケメンだから男の俺も・・・うん。

思わず反応しちゃうよね。でも俺は男。そんな事はありえないって  
ねー

・・・でもさ、この人どっかで見たことがあるような・・・。

「む、店員よ・・・」

「ああ、アルトリア・ムーンライトです。ギルバートさん」

ネームプレートを摘んで言う。

でも名前を呼んだ瞬間にそっぽ向いてしまった。

「・・・ああ、ムーンライトさん・・・通報はやめてくれないか？

我にもしかと目的があり、このような逃避行をしているのだ」

「そうなんですか・・・あ、平気ですよ？ お客さんはあなただけ  
ですし、

パティシエも私が話を通しておきます・・・内緒内緒、ですね」

今は閑古鳥だ。

「ああ、助かる・・・」

「・・・あー、住むところどうするんです?」

「抜かりは無い。近くのビジネスホテルを取った。

今日中に親父に電話してヒマをもらおう事にする」

「・・・ここに滞在する許可を貰う・・・ということかな?」

確かに御曹司は疲れるだろうし・・・色々溜まるものもあるだろう。

「そうですね、休むってとっても重要ですよ・・・ふう」

「む、元気が無いな」

「ああ、いやですね・・・」

言っているのか・・・と視線をさまよわせる。

しかしギルバートは言った。

「よい、我は器が大きいからな」

・・・うづうん

「しかも・・・ここには我とそなたの二人きりだ・・・」

まあ、いいかな・・・

「ええと、ちょっとピークで疲れちゃって」

「む、それほどに忙しいのか？」

「そうですね・・・すごく忙しいです。特に放課後とか」

「アフタースクールが込むのか・・・そして今は・・・？」

「ご覧の通り、閑古鳥だね」

さむーい雰囲気を出してる店内を見る。

お客さんが来ることは殆ど無い時間帯だ。

「・・・ふむ」

「まあ、海鳴とか、遠見とか・・・休暇楽しんでってよ」

「ああ、そうだな・・・な、なあ・・・その・・・あ、あ、・・・ア  
ル・・・」

「・・・？」

なんだろ。

そう思っ言葉を待っていると、ドアのベルが鳴った。

「アリア、ただいまーっ・・・おおっと、お客さん居たか・・・」

「おかえり美由希」

「・・・」

しかし美由希は俺とギルバートを交互に見ると言った。

「あれ、楽しそうな雰囲気だけど・・・友達？」

「うん、俺の友人の・・・」

「

ギルバートが驚いた顔をする。

「…………ギルだよ？ あ、ギル、こっちは美由希」

「…………あ、ああ、どうも、美由希嬢」

「え、あ、じよ、嬢…………どうも、高町美由希です」

その後さっさと裏へ引っ込み、裏口から帰って行ってしまった……。

「…………なあ」

「ん？ なあに？」

「…………友人…………と言ってくれたのか？」

・・・？ あ、ああー・・・。

「あんまりにも気が合うから敬語無しで、愛称はギルっ！

・・・あつと・・・調子乗っちゃったかな、すみません」

流石に悪乗りしすぎたか。

そう思って軽く頭を下げる・・・が。

「・・・いや、よい・・・友人として接してくれ、『アリア』」

「・・・！ うん・・・よろしく、ギル」

その後も雑談を交わし・・・時刻は夜へと移った。

「ああ・・・む、そろそろ帰らなければな・・・」

「あ、そう？ お会計はこっちだねー」

席を立ったギルと共にレジへ進む。

「閉店間際まで話しちゃったね」

「ああ・・・次はいついる？」

・・・ここで気付いた。二週間の限定じゃないかと。

・・・まあ。

「明日いるよ」

「そうか・・・なら、明日も来るかもしれん」

この仕事を続けられただけだ。

「じゃあね、ギル」

「ああ、また会おう、アリア」

店を出て行くギル。俺はふうふうと息を吐いて……。

「……ケータイ忘れてる……」

カウンターの上にあったケータイを引つつかみお店の外へ走る。

これがないと親父さんと電話できないんじゃないかっ!？

「ギル……」

「

店の曲がり角、路地裏。そこへ入ったギルを追って俺は見た。

「……『王の財宝』!……ふむ、転移符は……?」

ギルガメッシュじゃん・・・！

・・・うん・・・。





第38話 寡黙なる性識者。 (前書き)

はい。鼻血なあの子です。

第38話 寡黙なる性識者。

季節は巡って・・・紅葉が道を彩り、衣替えの季節。

今日も翠屋は忙しいです・・・って言いたいんだけど・・・。

「けほっけほっ・・・ごめんね？ みんな・・・」

桃子さんが風邪になっちゃったのだ。

季節の変わり目、皆も気をつけよう・・・って。

「翠屋どうしよっ」

「残念だけど・・・今日は無理ね・・・」

『準備中』

そう書かれた札をドアに掛け、店内を掃除する。

「ふうー……こんなもんかな？」

モップに体を預け、ふうと一息つく。

ピッカピカです。誰も文句言えないでしょう。

その時、ドアの外からガチャガチャとドアを開けようとする音が。

……もちろん鍵は閉まっている。

『……おやすみ？』

……？ 誰だろう……。

『……………残念』

ああ、シュークリーム目当ての子かな？

ん？ ああ、翠屋ってシュークリームが一番美味しいんだよ。

もはや海鳴の名物といっても過言じゃないね。

ん？ 俺？ 俺は紅茶とコーヒーなら自信があるよ？

『……………紅茶飲みたかった』

……………うわお。

ガチャッとドアを開けて前に居る子を確認する。

小柄で寡黙そうな人だ……………年は年上か……………な……………？

「!?!?!」

「あーっと……ごめんなさい、今日はおやすみです」

「……(しょぼーん)」

がつくりと肩を落とすお客様……そこまでして飲みたかったのか？

……うーん、ちょっとくらいならいいかな……？

「ええと……」

「……？」

「……紅茶、飲んでく？」

「……いいんですか？」

無表情ではなくキラキラと目を光らせて聞くお客様。

「うん、今……俺しか居ないけど……どう？」

二人きりだけど年も近いし積極も平気だし。

「……………(ダバダバ)」

「えっ!? あ、ちよっ!? は、鼻血……………」

「……………(ブンブンブン)」

いやブンブンブンじゃなくてっ!?

「と、とにかく血を止めないと!」

「……………!」

お店の中にお客様を引っ張り、ドアを閉め鍵をかけた。

「……………止まらないなあ」

「……………(ダバダバ)」

しかたないので少年の持ってた輸血パックとバケツでその場を凌ぐ。

ああ、また汚れたところ掃除しないと……。

「なーに考えてるんだか」

「(ぶんぶんぶんぶん)」

首を横に振るお客様。でもなあ、このままじゃ紅茶の味わかんないだろうし。

……ん？

「あの、学校は？」

「……………土曜日」

「そ、そっか……」

モップで床の血を拭き取りつつ言う。

すると、彼はまた静かに口を開いた。

「……………土屋康太」

「？ あ、名前？」

こくこく。と頷く康太君。

「俺はアルトリア・ムーンライト・高町。よろしくね、康太君」

「・・・高町は学校に行っていないの？」

「うん、15だけど中卒でここに働いてるよ」

主に魔導師とウェイター、用心棒として。

「・・・一つ年上」

「・・・えっ？ 康太君が？」

「（じくり）」

た、確かに言われてみれば・・・。

「あーっと、じめんなさい」

「・・・タメ口でいい」

あああ！！！！ 思い出した！！ 春に俺の事カメラで取りまくって  
た人だ！！

「……(汗)」

いや、絶対思い出さないで欲しいって思ってる……。

カウンターに座ってる康太君をみつつ、棚を掃除する。

「えと、康太君はどこに通ってるの？」

「……文月学園。一年生」

「あー！ あの試験召喚獣システムのっ！？」

「……(コクリ)」

……実は、管理局から召喚関係のデータが持ち去られて、

あまりにも大変な事になったっていう事を訓練校時代に聞いた。

……まさか、ね。もしそうだったらミッド式の魔法になっちゃっ  
じゃんか。

「でも・・・学園から遠いんじゃない？」

「実は駅一本・・・」

「あ、そうなんだ・・・ごめん、この辺の地理、まだ詳しくないんだ・・・」

海鳴と遠見はわかるんだけどね・・・今度さ、案内してくれる？」

「・・・案内？」

「うん」

結構重要だ。なんせここで2年は暮らすんだから。

地元の人に教えてもらったほうがいいだろう。

しかし康太君はふるふると首を横に振った。

「・・・命の危険」

「ええっ!?!」

文月市はそんなに危険なのかつ!?!

そんなこんなでゴリ押しして予定をこじつけ、アドレスも交換しちゃった。

予定？ 明日の日曜日ですが何か。

ん？ ああ、あんまり使わないけどケータイ買ったよ？

康太君がメールアドレスを何故か紙に移しまくってて、

消されたらまた教えて欲しいって言われた・・・な、何かあるんだ？

「はい、紅茶どうぞ」

「・・・・・・・・・・おいしい」

「お、よかったよかった」

容器を洗いつつコロコロと笑う。嬉しいよね。

自分の作ったものが美味しいって言われると。

p i p i p i p i p i p i ! ! !

電話が鳴る。多分康太君のだろう。

「……今？ 海鳴……」

「……ムツツリーニ！ お願いだ助けて!!」

「……無理」

「わああ今須川君たちに……うおおあああつ!？」

ちよっ!？ ハンマーはないよっ!？ いや鎌もダメだからねっ  
!?!」

「死刑!! 死刑!! 死刑!!」

あ、洗剤が切れそうだな……恭也に買ってきてもらおう。

それにしても……。

「必死そうだね、康太君」

「つつ!!?!?」

『お、女の人の声・・・?』

カウンターから話すとは何か慌てて『シッシッ!』ってされた。

・・・ちよつとむつととしてしまって、更に話しかけなくなる。

ようするにスルーだ。

「あ、康太君、紅茶のおかわりいる?」

「・・・・・・終わった」

・・・?

遠い目をして言う康太君。そしてケータイから声が聞こえた。

『ムツツリーニが海鳴で女の子と紅茶飲んでるぞおおおおお!!!  
』

『ムツツリーニイイイイイイ!!!!!!』

ブツンッ！ ツーツーツー……。

あ、あれ？ もしかして大変な事しちゃった？

なんかモテない男同盟みたいなのがあつて命を狙われ……

……ああ、だから『命の危険』なのか。

主に康太君が……悪い事したな。

「……大丈夫、約束は守る」

「ええと……ごめん」

「……／＼／＼ 気にしなくてもいい。」

高町みたいな女の子と居れば逆に襲われない」

・・・ええと。

「大丈夫、俺って結構強いから。あと俺男だよ？」

「・・・そうだった」

家に帰ると、制服が土まみれでかみもぐしゃぐしゃになったのがいた。

だが高町家の皆はニコニコとするばかりで気にしてない。なんぞ？

なんだかたった今なのはのお話が終わったようだ。

「おお・・・どうしたの？」

「・・・ケンカしたの」

・・・ああ。これは確かに皆もニコニコするわ。

だってすごい嬉しそうだもん。

「シャワー浴びてきな、なのは。俺が洗淨魔法で洗っておくから」

「え・・・いいの？」

「うん、ちょっと疲れるけどあんま変わらないよ」

「じゃあするっ！ シャワー浴びてきまーすっ！」

パタパタと走っていくマスター。

・・・。

「友達ができたんですかね」

「・・・ああ、そうだな」

士郎さんとまったりして、走っていくのはの後姿を見つめた。

第39話 台風って朝に来ないことが多い。(前書き)

第39話 台風って朝に来ないことが多い。

「なのはが上がったら俺が先に入っている？」

「ああ、汗を流しておいで」

荷物を地下の部屋へ置きに行く。梯子を降り、気分はケロ 軍曹だ。

え？ 伏せてないって？ 気にしない気にしない……。

ひんやりしたコンクリむき出しの廊下。

梯子から3mほど脚の裏の冷たさを感じ、ドアを開ける。

「……疲れたなあ……」

上着を壁にかけてミニ冷蔵庫からお茶を出して口を……ん？

そこでふと机を見る。

そこには修理が終った二台のデバイス。セットアップするのは当分ないだろう。

待機モードをオミットしたブレイズエッジはぶっちゃけ銃刀法違反だ。

・・・命の危険があるっばいし、オルギアは持って行こうかな。

これはサポートオンリーだしグローブだから問題ないだろう。

パジャマと下着をクローゼットから取り出してお風呂の準備。

荷物をビニールに入れて先に上へ投げて一階へ上がる。

「楽しそうだねアリア、どうしたの？」

「ああ、美由希・・・明日ね、康太君って子と一緒に文月に行くんだ」

「あららそうなの？ 楽しんできなよ？ たまには息抜きもいいよ

っ

「うん」

「あ、でも昼か午後から台風だよ明日……」

……え？ 台風？

翌日、文月駅。AM 11:00

「あ、康太くんっっ！」

「……！！」

康太君は周囲をぶんぶんと見渡しながらかっこつちへとことこと歩いてきた。

「こんにちはっ」

「……………ん……………あ、今日は台風だけど……………」

「ああ、もし電車とか止まっちゃったらかっこつちに泊まるし大丈夫っ」

地理の把握は俺の急務だ。

あまり考えたくはないが今、俺がHC残党なんかに補足される可能性だってある。

そして……………俺はまだ十分に戦えるかどうかすらわからないのだ。

はっきり言ってHCの索敵能力は馬鹿にならない。

トップが去った後ではわからないが……………用心していたほうがいいだろう。

「……………行こう」

「はい」

「……はあ」

「？」

まずは商店街ってね。

「わあー……新鮮だねー」

そういつつ文月の地図へペンで色々と記入していく。

ミッド語だし大丈夫だろう。

「…………お昼」

「あ、そうだね……康太君、どこでお昼食べようか？」

「あそこ」

おお、シャイゼリアだっ！ まさかここにも……。

「……安いし美味しい」

「うんうん、そうだね、「こ」にしようか」

俺はシャイゼリアへ直行する。

「……ただ、友人とのエンカウント率が（ボソボソ）」

……？

「どっしたの？」

「……すぐ行く」

そんなに友達に合わせたくないだろうか俺。確かに変わり者の自覚はある。

「前」の俺は酷かった。ただピアノだけしかなくて、ピアノだけで

……まあ、違う理由が……あ、あつたらいいなあ……。

オーダーを注文した後、康太君が話しかけてきた。

ちよつと好奇心に溢れてそんな目である。

「……高町はどこから来たの？」

「んー……？ イギリスのビックベンの辺りに住んでたんだー」

「……留学……？ あ……」

「あー……うん、違う違う。ちよつと事情があつてね、

迷子になつちやつた所を高町さんちに保護してもらつた感じなんだ」

康太君は小さくごめんといい、俺はちよつと笑つ。

「そこまで重いこと無いよ」

「……そつか」

あ、トイレ言ってくる、と言って席を立った。

s i d e ム t t ( r y

s i d e 土屋康太

・・・絶対に訳あり。俺はそう確信した。

一歳年下の彼、高町からは俺たちと同じ匂いがする。

・・・それは失礼か。

高町の身長は思いのほか小さかった。

あの小さい肩に何を背負ってるんだらうと問いただしたくもなる。

うちも若干『土屋一門一派』忍者の血が入ってるから「同族」はわかる。

だから、「裏の人」と分かってしまったわけで。それ以外にも、

親父がこの間高町士郎から戸籍の割り込みについて電話をもらっていた。

喫茶翠屋、突然入ったウェイター、高町という苗字、戸籍。

・・・これだけの証拠だ。なにかある。

・・・まあ、何もするつもりなんか無いけど。

惜しむべきはっ・・・あの子が女の子じゃない件にっ・・・っついて  
・・・!!

そんな風にボタンのカメラを弄っていると・・・。

「・・・・・・・・あ」

入り口にいつもの3人が居た。明久、雄二、秀吉だ。

見つかるな見つかるなできれば

『どこでもいいです』『じゃあ喫煙席で』

の流れで店の向こう側に行ってくれ・・・!!

しかし俺のそんな希望は叶わず。

『あ、連れがいた。あそこでいい』

・・・。

sideアリア

え、えーと・・・おトイレから帰ってきました、アリアです。

今、抜けてそうな顔の男の子が俺のポストンバックを持っています。

着替えとケータイも入ってるんだけどな。あれ・・・。

てか4人シートが埋まってるから詰めてもらっしかないな・・・。

あ、俺のミラノ風ドリアが来たっ

「・・・ええと、康太君のお友達かな？」

「・・・終わった」

「「「「・・・」」」」

え、ナニコレアウエー？

「ええと、そのの．．．えと、俺のバツク．．．」

「あ、ああ、ごめんねっ！」

「詰めてもらえますか？ あう、ちょっと狭いですね．．．」

「お、おう．．．？」

赤いツンツン、トッキーみたいな髪の人を康太君と挟むように座る。

「康太君のお友達．．．ですよね」

「」「あ、はい」「」

「「どうも、喫茶翠屋で給仕をしております、アルトリア・M・高町です」

「ムツツリーニイイイイイイ！」「」

わわわっ!?

「お前!! 付き合い悪いと思ったら!! 彼女だとおおお!!」  
「!」

「何故じゃ! 何故黙っておったんじゃ! 寂しいではないか!」

「ムツツリーニの裏切り者!! 僕たちを裏切ったんだ!!」

3人から詰め寄られる康太君。

「ま、待って! 待ってよ! 俺はそんなんじゃないよっ!」

「なんだ、先に言えよ(言っのじゃ)」「」

「・・・」

なんだろう。すごいムカツク。

一旦仕切りなおし。

全員が自己紹介した後、アドレスとかを交換する。

自己紹介のときに、「いきなり男の子3人来るからびっくりしちゃった」

って言ったら、ヘアピンつけた子が詰め寄ってきて両手を握られた。

彼も容姿で苦労してるらしい。

けど俺は秀吉君に女の子に間違えられた。なんぞ。

みんなとわいわいご飯を食べた後、お開きとなった。

何故か須川には気をつけるよと雄二君が康太君に念を押ししていたが。

さて、康太君と一緒に外を回って・・・？

外を見たとき、俺の表情は凍りついた。

た、台風が・・・ヤバイです。

風びゅんびゅん言ってるし雨がもつ・・・どじャーって降ってる。

「・・・アリア、電車は？」

「・・・動かないだろうね・・・」

・・・はあ。あ、名前で呼んでくれた。

「アリア、お前海鳴の方だよな？」

「うん、まあ・・・ホテル元々取るつもりだったし」

ポストンバックを掲げて言う。

まあこうなったら外に出る人も居ないだろうし、

嵐の中をレビテトで空中偵察かな。家に帰れば帰ってたけど。

「……むう……アリアがホテルで一人とは些か不安じゃな」

「……うーん」

いや、平気なんだけどな……うん。

「……明久、お前の家に泊めらんないか？」

「夕飯が水と塩でいいなら」

こっちから願い下げだ。

「秀吉は……」

「姉上と掛け算されるわい」

……あー、事情は大体読めた。

「うちは・・・母親が・・・な・・・」

なんだか一瞬でこの3人の困りの種を見つけた気がした。

「・・・うちに泊まる？」

「・・・あー、そうして・・・ダメだ。ムツツリーニ。」

お前コイツを前に鼻血からの忠誠心押さえられんのか？」

「・・・できる、アリアは特別・・・」

んー、日常的に鼻血出してる感じ。エッチは程ほどに！・・・って  
ね。

・・・なんだろう。パラレルな俺はそんな事言っちゃいけない気がする。

その後土屋君の家に行き、「電車止まっちゃった迷い子です」

って言ったら、普通に夕飯と一日の寝床を提供してもらった。

・・・でも明日は康太君、学校なんだよね。あうあう。

俺は康太君の寝てるベットの下で、小さく身じろぎした。

第39話 台風って朝に来ないことが多い。(後書き)

あ……れ……？ 続いちゃった……？

第40話 それが私のご主人様。

新暦64年、4月。

管理局の墓地の中でも、一際目立つ十字架の前に立つ。

A l t r i a  
M o o n - l i g h t

百合の花束を十字架の前に置く。

あの人が技を放つたびに散らしていた魔力の残滓の顕現。

あの日から、アリア様がいなくなってからもうすぐ1年。

アリア様が居なくなつて、私の周りは一斉に色が無くなつてしまつた。

10年ぶりの、色の無い世界。

一年生の時、クラスで苛められていた私に積極的に話しかけてくれた。

そして自分が苛められる事になつても、私と一緒に居続けてくれて。

色が無い世界の事を話した。喜怒哀楽が私には無いと。

すると、アリア様は急に人が変わったように話し始めた。

それは、私と一緒に色が無くなったピアニストの話。

その才能からか、両親や周囲の人々に期待に期待を重ねられて。

まだ幼かった彼はその重圧に耐え切れず、その心を閉ざしてしまっ  
た。

ただ、無色無臭無味無駄無意味にピアノの音を奏で続け、

ピアノを弾くたびに近くに居る人が離れていくお話。

信用して、色が戻るのは妹と二人きりの時だけ……。

最初は友人、次に親戚、そして幼馴染、果ては両親も離れていつて。

そして最後には妹を拒絶し、最後まで一人で居続けた結果。

彼は交通事故で呆気なく死んでしまったという。天国で今も後悔してるそうだ。

アリア様は赤いペンを取り出すと、私の両頬に渦巻きを書いた。

「いつもニコニコしてほっぺがくるくる。

ね、笑うって、すっごい楽しいんだよ?」

するとその両頬をその手で挟み……。

「俺が色を塗ってあげる。だから、もう無色なんて言っちゃだめだよ。」

私はこの瞬間、この人に全てを捧げようと幼いながらも誓った。けど、その人はもういない。一人で生きれるよって、言えない。

「あなたがいなくちゃ・・・」

あなたの恋人じゃなくていい。傍にいれるだけでよかったのに。

「・・・」

私は懐からピンを取り出した。

そう、私の命を閉ざしてあなたに会いに行くためのもの。

「あなたがない世界なんて・・・私も、同じところに行きます」

錠剤を二粒。そう、飲むだけでいい。

そしたら少し眠くなった後、きつとアリア様が目の前に居るんだ。

起きたらおはようって言うてくれて、私を抱き締めてくれて。

ずっと傍に居てくれるんだ。ああ、お傍にいたい。行きたい。

あの人の麻薬だ。10年浸かっていて1年耐えられただけいい方だ。





なんで私は泣いてるの？

「……わあああああ……！」

もうやだ……こんな世界っ!!!

なんで死んじゃったのっ!?

なんで居なくなっちゃうの!?

「……..」

お父さんもお母さんも

……..

貴方も

「なんで私は死ねないのよお・・・こんな世界もつやだよお・・・」

彼の十字架の前に蹲り、ただ涙を流す。

その時、私のデバイスに着信が入った。

嘘だ。電源は切れているはず。

・・・待て。

電源が切れてても掛かって来るのは。

いつもの着信音。あの人が囁く声。

《クワイア、電話だよ？　クワイア、電話だよ？　クワあっちゃよっ  
抱きつくな！》

私は震える両手でデバイスを取り出し、画面を……。

「う……そ……？」

『From：アリア様』

私は通話のためのボタンを押せなかった。

これはきつとタチの悪いイタズラ、

あの人は脱出不可能の状況で塵も残さず消し飛んだのだ。

シルヴィアさんがどうこう言ってたけど神殿なんて無かった。

そう、生きているはずが無いのだ。

《クワイア、電話だよ？ クワ 》

電話がブツンと切れて。

《クワイアです。これが流れるなんて殆ど無いけど、

どうしても電話に出れません。後でかけなおすか、

ピー、と音のなった後にメッセージをどうぞ。》

・・・そうだ。ありえない。早く電話を切ってくれ、

私にこんな仕打ちしないでくれ。自分の醜さが見えてしまう。

・・・？

切れない。

そして5秒たった時。

『クワイアか？ 今、全力全開で魔力振り絞って通信してる。』

『だけど生憎留守電みたいだね・・・あ、メッセージといえば』

理解できない。この電話は、今、リアルタイム・・・で・・・？

『そこにいるんでしょう？ クワイア・・・』

私は通話ボタンを押し、通信した。

画面ディスプレイの先には、変わらない・・・アリア様が・・・。

「あ……ああ……」

『クワイア、1年も空いちゃったね……クワイア？ 泣いてたの？』

ああ。

「バカですかあなたはっつ！！！」

『ちんやっ！！？』

とりあえず怒鳴っておじい。

sideアリア

クワイアに俺の現状・・・虚数空間を超えたら管理外世界に着いたこと、

何故管理外なのかは魔法文化が浸透していなかったからという事、

魔力が根こそぎ無いので現地の未覚醒魔導師から魔力供給をしてもらい、

循環、増幅・・・元のリンカーコアになるまで居候してる事、

それまでは普通に安全な生活をしている事、

H.Cの残党には遭遇していない事を話した。

途中で生存を確認した伝説の3人の一人、ミゼットさんに変わった。

会話の途中で偶然お墓に花束を持ってきてくれたらしかった。

・・・俺の墓あるんか・・・。ちなみに時刻は早朝だ。

「お久しぶりです。ミゼットさん」

「ええ、ええ、生きていて嬉しいですよ・・・」

「5000円の花束が無駄になってしまいました」

「あ、あはは・・・」

「提督権限で命じます、よく聞きなさい、ランク9、エクレール」

「はっ」

オーラが変わったミゼットさんを前に直立する。

「貴方は魔力が快復次第、転移魔法で帰っておいでなさい。

通信できるだけ魔力が快復したならば・・・どのくらいですか？」

「・・・もう1年でしょうか・・・戦闘したらその分長くなります」

「わかりました・・・管理外世界の名称が分かったら・・・」

わかんないよ・・・この地球って世界がどんな名前なのかわかんないし。

568

(第97管理外世界・・・『地球』だったりする)

「とにかく・・・魔力の消費が激しいでしょうが、

月に一回は連絡なさい・・・メールはどうなのですか？」

「ええ、メールは普通に」

魔力ライン通して新着メール受信したらすっごい来てて驚いた。

「連絡の日にちはメールで追って連絡します・・・クワイアさん？」

「ハッ、ミゼット提督」

通信機の方こう側で人物が入れ替わる。

「・・・メールしますから」

「・・・うん、わかった・・・じゃあねっ」

「・・・はいっ！」

プツンと念話が切れた・・・瞬間。

《受信中》



第40話 それが私のご主人様。  
(後書き)

きんぐくりむぞんしちやいました。

第41話 そして新暦64年。(前書き)

アリアの中のギルのポジションは、

「俺様なお兄ちゃん」と言った感じですよ。

第41話　そして新暦64年。

新暦64年、4月30日。

「はあ」

「なんだアリア。溜息をしては幸運が逃げるぞ」

「ねえ、ギル、なんで俺は溜息をしてるんだと思う？」

「・・・運が無いからか？　我の黄金律を・・・」

「あんたが俺を膝に乗せてるからだよ」

HTTも終わった時間。俺はギルの膝上にちよまーんと乗っていた。

いや、本当に「ちよまーん」って表現だ。ギルは体大きいし。

「・・・くんくん」

「匂い嗅ぐなし」

「・・・ツバキ!」

「あ、正解」

「お揃いだっ!」

・・・なんでだろう、ちょっと背中がそわわーってなった。

「パスつく髪には白ツバキ!」

「詳しいね」

「アリアは髪に気を使っているのだろうか?」

あー、まあ、うん。シャンプーをしっかりと洗っただけだけど・・・。

「我は気合が入ると勝手に髪がツンツンになるのだ」

「え・・・そうなの?」

「見ている・・・ふんっ!」

シャキーンッ

おおお・・・！！

「・・・存外に疲れる」

へなーん

「あ、燃費悪いのね？」

「ああ・・・」

・・・。

「それにしても・・・アリアが魔導師の国に帰らなくて安心したぞ  
我は」

「うん・・・あと1年くらいはいるよ？」

「はっはっは。まあ、楽しい思い出を作るうではないかっ！」

「そうだね。ギル、ずっとこれからよろしくね？」

「・・・あ、ああっ！ 任せておけ！ 困ったときは我に頼るのだ

！！」

お前が困るならば1万の軍勢を片手の一振りで灰燼に返し！！

お前が泣いたのならその塵芥の輩を乖離剣で両断してやろっぞ！

「！」

・・・もう、ギルは泣きそうな顔しちゃだめだってば。

「うん。ギルに頼るよ」

「うむ。それでよい」

(この二人、傍から見るとラブラブである)

「じゃー……今日は上がるね？」

「……我も少し長居しすぎたな……ホテルへ飛んで帰らなくて  
は」

「あはは。お仕事ご苦労様」

「うむ、苦しゅうない」

そのままギルはお会計をして帰って行った。

いやあ、本当に風みたいに早かったな……。

……あ、掃除でもしようかな……と俺は箒を持って外に出る。

外は快晴、しかし夕日が掛かり始めている。

海鳴。俺が虚数の旅で辿りついた世界。

これから……ここでもう1年……か……。

何故か、更にもう1年留まりそうな予感がする俺だった。

そして、翌日・・・土曜日である。

「・・・え？ 魔法？」

「っ！っ！」

「・・・ふむ・・・」

朝、朝食の席でなのはが魔法を教えて欲しいと言ってきた。

チラリ・・・と土郎さんを見る。土郎さんは新聞で顔を隠した。

・・・一任してくれるのか・・・？

「・・・魔法は、教えてあげなくも無い」

「本当っ!?!」

「ご飯食べたら・・・なのは、美由希、ちょっと庭へ」

「はぁーいつ!」

「えっ!?! 私もっ!?!」

美由希がこちらを見て驚く。

「美由希は今日は俺と稽古だ」

「そこを何とか、恭也」

ぐむむと考える恭也。すると土郎さんがやっと新聞を降ろして言う。

「美由希に何をさせるんだい?」

「ああ、ちよまつこい弟子を与えようかと思って……」

「「「「「……え？」」「」「」」」」

「魔導師の資本は事務職、戦闘員関わらず体力づくり！」

「まずは美由希の毎朝やってるランニングに同行させてみる」

「え……」

「い、いいけど……」

「まずは体力の具合を見て……それから本場の戦いを見せようか。」

彼女が主人公ってのは覚えてるけど・・・他は覚えてないな。全然。俺と同じ金髪の子がどうこうなってあーだーこーだなのはかろうじて分かるけど。

・・・空戦適性があるかもしれないけど、AMF負荷内での活動は基本歩きだ。

・・・あとは砲撃だったかな。砲撃を打つのに体を鍛えてなかったら、

それこそ戻れないところまで体が壊れる可能性があるのだ。

あとは、その身を守るため・・・かな。

力の制御は教えておくに越したことは無い。

2時間後。

「ぜえー……ぜえー……ぜえー……」

庭に仰向けになって大の字に倒れるのは。

「おつかれさま……この距離を美由希みたいに難なくこなせない  
と」

「さ……先は遠いの……」

「じゃあ、次は俺の戦いでも見る？ 休憩ついでに」

ガタッ

ガタッ

とりあえず恭也と土郎さんは座ろっかー。

そう思いつつ、オルギアを展開してテーブルに置き、

空間モニタを展開。見るのは……。

「大剣使い・ウィンディ、現ると、

決戦。炎の道化、鳳凰院綾時と、

舞のロイ、クローバーの眩きと、

ミサイルカーニバルえいぷーと、

至高の曲弦師、クワイア現ると、

ティーダ距離八千、暁に散ると、

……このくらいか。どれみたい？」



## 第42話 天使。

貴方は見ておられるでしょう。

眠りに付いた純白の騎士姫の話を。

・・・？ 我々天使は世界の管理者にして神の代行者。

神界の閲覧者である貴方に語りかけるなど・・・造作も無い事。

・・・おや？ ああ、神界とは天界の上にある世界。

我々を作る世界のことですよ。

まあ、自覚しておられない方々が多いですが……。

さて、私は貴方方に聞きたいことがあるのです。

聖枢……についてご存知でしょうか？

ああ、ご存知のない方もいらっしゃるかもしれませんがね。

聖枢とは天使のリンカーコア。

しかし・・・イレギュラーとして人に宿る事もあります。

人の聖枢は、自らが「一番欲しかった」モノが入っている・・・。

そしてその棺の蓋は自らと他者がそれを願うことで開けられる。

・・・その変質した『欲しかったもの』は神の力、神器となる。

旧約の物語・・・騎士姫は幼少期、無意識のうちに聖枢を開けており、

それを危険と判断した我ら天界は世界の矯正を送り込んだ・・・。

勝てば全てを手にいれ、負ければその力を掃除屋や記録者として使うことになる。

彼の息子？・・・息子は・・・我々の手に負えません。

時間律上の自分を取り込んだことにより完全に一体化しましたからね。

この「天界の管理する全ての世界」で好き勝手できるのは彼のみでしょう。

まあ、彼が天使墮しを考えたなら我々も動きますがそんな気配もありませんし。

さて……説明はこの辺で……準備はよろしいですか？

……ははっ。ご冗談を。彼の『本当に欲しいもの』を辿る物語ですよ。

……ご存じ無い？ ええ、今ここで言いましたからね。

ああ、申し送れました。わたくし、慈悲と愛の天使をしております。

四天使が一人、ガブリエルでございます。

さあ、無印が始まりますよ。

どうぞ・・・照覧あれ。

s i d e じかのだねか。世界のじかの夜空。

「星降る夜に・・・鍵盤の響きを」

私は空の流星群を見て、そっと呟いた。

おまけ。

・・・？ ええ、マリアちゃんにイエス君の受胎告知したのは私ですが・・・？

・・・物凄く大変だったのですよ？

16の男がいて、同じ年の女とマリアちゃんが居て。

男は女が憧れの人で、マリアちゃんは当時自分の文字盤の裏面に、好きな人の顔を書き込みそれを三月バレないようにすると、

その人との恋が成就するという噂が流行っていきまして・・・。

マリアちゃんは男のそれを見てしまい、応援することにしたんです。ただ成就する頃マリアちゃんは彼の事が好きになっちゃって・・・。

いや、私も警告したんですよ？

ですが男は二股をかけてしまいマリアちゃんに身ごもらせてしまったのです。

・・・その身ごもった子がイエス君でした・・・。

そして・・・男となし崩しにマリアちゃんは付き合い始め、

男は女と折角結ばれたのに、捨てる形でフツてしまったのです

私はこの3人の先が不安になり、未来を占って見ました・・・。

・・・目に飛び込んできたのはマリアちゃんが女にノコギリで殺され、

腹を裂き・・・『やっぱり嘘だったんじゃないですか、誰もいませんよー』

私はあまりの光景に絶句しましたね。

・・・ええ。なんとか円満に解決しました。

ハーレムエンドでしょうか。3人で話し合いになった結果です。

・・・特にその、ハーレムモノ書いてる神界人様たちですよ？

朝起きたら勝手に更新されているかもしれない・・・お気をつけ  
て。

第43話 逆流する記憶。(前書き)

無印はアリアにとってまだまったり日常です。

「全部の厄介事に首を突っ込む事なんて滅多に無い」

作者はそう思っちゃいます。主人公の知らないこともあるって事で。

### 第43話 逆流する記憶。

新暦65年、夜。

俺は屋根の上でまったりとしていた。

行っているのは魔力充電。月明かりを浴びているだけで魔力は補給される。

・・・実はもう全盛期の頃の魔力量になっていて、帰れたりする。

リンカーコアも循環するだけの魔力を得たし・・・ね。

けど帰れないんだわ・・・まあ、いいよね、休暇ってことで。

ほとんどランカーの『序列権限』は治外法権みたいなもんだし、

今までそれを使わなかった俺を褒めて欲しいくらいだ。

ま、事件が起きたらそれに便乗して・・・

ぽーっと屋根の上に座っていると。

「・・・？ 次元跳躍・・・？」

そんな空気を察した後にくつつもの魔力反応が降り注いでくるのが分かった。

「・・・おいおいおいおい・・・」

なんだろうか、小さい反応だったがただの結晶体・・・？

放置してもいいんだが・・・うーん・・・。

「むむむむむむ・・・」

「……アリア君、何してたの？」

「407……」

Z  
Z  
Z。

・  
・  
。

・  
・  
・  
・  
。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
。

「や、屋根に上ってお月見しました」

「……そっかそっか……」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……！

しかしなのはブラックオーラなどさっちゃんに比べれば屁でもない。

ギャグ補正？……まだまだだねっ

……どうも。屋上で寝ちゃって風邪引きました。アリアです。

40度……あ、アホだなあ……。

冷えピタを貼って……なのはが煩いかもしれないけど、

昨日の結晶体の事を調べないといけない。まあ、気まぐれだけだね。

「今日は大人しくしてるの！」

「あ、はい。ごめんなさい」

「あとお母さんがここは窓が無くてぼんやりして精神的に負担掛かるから、

風邪だったら一階で過ごさなさいだって。じゃあ私学校行って来るねー!」

「いってらっしゃいっ!」

そう言って地下室からいそいそと出て行くのは。

俺はそれを見届けベッドに横になる。

「……はあ」

風邪なんて何年ぶりだろうか。

「……結構体調崩してたっけ……?」

ああー、鬱だ。

『じの…がき…』

「ぴゃっつ!!!?!」

え、え、え、ど、どこっ!?! 幻聴っ!?!

もも、もしか、もしかしてお、お、おおおお化けっ!?!

てかがキってっ!?! ガキって何っ!?!

『き・えた・、ちか・…してください』

き、えた…ち、ちか? ちかつて地下…?

…俺は考えた。考えちゃダメだと思いつつ。

ダメ、ダメ。そう考えるけど止まらなくて…。

……え……っと……？  
いるって、  
事？

「『消えた地下から出てくたさい』……？」

「……ってことは、ゆ、ゆ幽霊さんが……？」

「……」

キャパシティを超えた俺は静かに気絶した。

パチ……つと目が覚める。

ああ……寝てたのかな……？

パジャマが変わっているのと体内時計が狂ってるのを変に思いつつ、首に下げられたオルギアで時間を表示し見てみた。

「……三日も……？」

おかしい。三日も寝込むなんてありえない。

リンカーコアに……異常は……？

そう思って魔力を確認してみたら、何かが引っかかった。

なんだこれ。丸かったリンカーコアが四角く『感じられる』

それでも異常無し。魔力総量変わらず。魔力効率変わらず。

相変わらずオーデインは起きず。

まずったな……虚数空間を潜った事はマズイ事だったのかもしれない。

……まあ、オーデインが機転を利かせて放り込んでくれたから、

俺はこうやって生きてここに居るわけだけでも……。

三日か。お世話してくれた皆には感謝しないと。

時間帯は放課後……かな。

俺は立ち上がって……。

ピキンッ！

「……なの……は……?」

晴れてこの間召喚獣としてのラインは切れた。

だが攻撃的な魔力の波、大きいのもっと大きいのが一つずつ感じられる。

片方はなのは。もう片方は……。

ズキンッ!!

「……んくっ……なんだ、この悪意の塊……」

黒。いや、汚れてる……? まるで長期間放置されてきたかのよう  
うな。

危険だ。これはなのはが死んじゃうかも……危険?

……あれ、なんだこれ、おかしい。

「なのはが死ぬかもしれない」のになんで不安にならない・・・？

その時。

ああああああ。

やばいっすら気づいてたけど……。

……ここでエンカウントかぁ……。

オレンジの犬

アルフは、四肢をぐったりと投げ出し、

一目で重症とわかる傷を負い、血を流していた。

「どうしたんだよ……!」

アルフは俺の接近に気づくと……

『お願い……魔導師だったら返事をして……! フェイトを……!』

・・・念話、か。俺は今、魔力を完全にシャットアウトしてるからアルフにも探知できないのだろう。

だが、今魔導師であることを明かすとエースの時に後々面倒になる。

懇親の力を振り絞って念話してるのはわかってるけど・・・。

・・・シカトしかない。ごめんな・・・。

エース終わったらしっかり謝ろう。

「・・・エース？ い、いやいやいや・・・」

思い出した。フェイト、アルフ・・・エース。

「リリカルなのは」の一期じゃないか。

じゃあ死なない。『心配ない』・・・だって彼女は主人・・・公。

俺、  
なんで……？

「あ……？」

俺は気持ちの悪い感覚、記憶が戻ってくるような感覚に、

……ただ頭を抱え蹲るしかなかった。

第43話 逆流する記憶。(後書き)

無印でユーノのやっていた念話は、

魔力があって幽霊がだめな人には拷問だと思う。

## 第44話 進むべき道。

とりあえず現状を整理する。

俺は・・・突然記憶が戻った。そう。薄ぼんやりとリリなの記憶が。

原作知識はもう抜け落ちてしまったと思っていたのに・・・。

・・・前世の？・・・ああ、いや、考えたくない。

虚数空間・・・やばい。絶対に何か俺に起こってる。

全員翠屋へ行っているのだろう、一人だけのリビングで頭を抱えた。

・・・あ、ああ・・・なのはの事をどうしようか。

・・・放っておいた方がいいか？

彼女が未来成長する為には一番必要なイベントだろう。

危なくなったら手を出す。それが一番だ。

・・・無印の全ての事を思い出したわけじゃない。

てか、『存在』を思い出しただけという非常に不鮮明な状態。

手出ししたら速攻でBADENDもありえる。

・・・この考えは、あり・・・か・・・？

そろそろなのはが帰って来る・・・等。

なのはのぷりていー スマイルで癒してもらおう。決定。

ガチャッ！

おお、帰って来たっ！

「ただい・・・ああっ！ 起きたのっ!？」

「うん、おはようなのは、心配かけたね・・・」

「もう動いて大丈夫なの？」

「うん、平気」

万全だ。デバイスの修理も完了してる。

ただ、沢山の着信履歴が俺の罪悪感をマッハにさせるのは内緒だ。

「ありがとう、もう大丈夫だよ？」

「ん……えへへ……」

なでこなでこ。ああ、可愛いなあなのはって。

その時、何かが俺の椅子へ上ってきた。

「きゅーっ！ きゅーっ！」

「あ、この子ね、ユーノ君って言うんだよ」

……。

がしっ！

なでっ！

「……えっと、アリア君、ユーノ君は……」



いや意味わかんないのはわかるけど現にそんな感じ。

とにかく可愛い。やばい。超可愛い。

「可愛いユーノ君可愛い可愛い可愛い……！」

てか俺が変身して一緒に戯れたい。いちゃいちゃしたい。

徐に俺はオルギアに手を掛けて……。

「ユーノ君は魔導師の男の子なのっっ……！」

……

変身魔法を解いたユーノに謝って、現状を聞く。

ジュエルシード。ユーノの失態。なのはの魔導師化。

・・・高町家のメンツにはよく言っているそうさ。

よく土郎さんと恭也が許可したな。

その危険性をわかっていない可能性もあるからもう一度話しておこう。

まあなのはの魔法の力に惑わされていない熱意に打たれたのだろう。

「・・・あ、あの・・・」

「ん、ああ。確かに俺は管理局員だけど・・・」

「あう・・・その、ごめんなさい。なのはさんを・・・」

「気にしないで。俺は今休暇中だ・・・そろそろ終わるけど」

「……だけどこれは……事件の匂いがしますよさっちゃん。」

「……だけど、発掘物に封印処理しなかったのは……ね。」

「……はい、すみません。」

「その点はしっかり、叱るべき所で絞らせてもらっつ。」

「……なのは。おいで？」

「ひゃいつ!?!?」

なんでかびびってたなのはをこっちへ来させる。

「……なんで、ジュエルシードを集めようと思った？」

「……できるのが私とユーノ君だけだったから……」『その時は』

「

「できるから、仕方なくやるの？」

「違う!?!」

「……じゃあ、どうして？ ジュエルシードは危険だ。

人が死ぬかもしれない。それも沢山の人が、一歩間違えたただけで」

「……」

「……言っでらん、なのは。土郎さんにも恭也にも言ったんでしょ?」

「アリア君には、ちょっと恥ずかしい……けど、」

「うん?」

「……放っておいたら、もつと沢山の人が死んじゃう!!」

偶然でも……力を、魔法の力を持ってしまった。

なのはやりたくないって気持ちも……確かに、あるよ。

怖いよ、辛いよ? まだ……手が震えてるよ……。

けどね、今はなのはにしかできない！　アリア君も最近なんだか  
変！

魔力はあっても体の調子が最近良くないよね！！

だから・・・なのはが、なのはがやるの！！

・・・あ、違う・・・ごめんなさい。間違えた・・・。

なのはが頑張る！！　みんな、支えてくれると思う！！

なのはは！！　絶対！！　挫けない！！」

・・・。

「ユーノ」

「・・・え、は、はい」

「・・・俺は支える、お前も・・・なのはの事、頼んだ」

「・・・はいつ!」

俺はなのはを見つめ、言った。

「・・・なのは」

「・・・なあに?」

「……魔法っていうのは……怖いんだ。簡単に人の命を奪える。」

「……今言うけど……俺も、何人も人間をこの手で殺めてる」

「！」

魔力を発現したからか、感じる。

この子の魔力資質はセンター。しかも……砲撃特化型。

一歩間違えれば……本当に……。

「海鳴という小さいフィールドで、被害は0とは行かないだろう。」

何かを壊してしまう時もあるだろう。それを背負って、

この先を歩けるかい？……魔導師の道を……」

「……大丈夫……」

俺の前に拳を差し出して、なのはは言った。

「なのはは一人じゃないもん」

「・・・そっか・・・」

・・・安心・・・だな。

「俺は基本・・・なのはとの厄介事に関わらない。

俺からは口出ししないし、首も突っ込まない」

「・・・あう」

しよぼんとするなのは・・・でも。

「でも、いつでも見守ってるよ?」

「・・・! うんっ!」

・・・ちーて・・・。

「お腹空いた」

「あ、何日も食べてないもんね」

「・・・い、今までのシリアスは一体・・・？」

なのはと一緒在台所に立ち、仲良くご飯を作るのだった。

## 第45話 嫌われヒーロー。

sideなのは

こ、こんにちは。ここじゃはじめまして……。

魔法少女になっちゃいました、高町なのはです。

……今、学校でジュエルシードを封印して帰って来ました。

7時頃、リビングが何やら騒がしいの……。

『い———や———!———!』

「え、あ、泣かないでっ！ そろそろ俺も帰るからっ！」

こっそりドアから覗くと、お母さんと対面に座ったアリア君が、

モニターのようなもので会話していた・・・。

モニターには小さな女の子と高校生くらいの男の人。

兄妹だろうか。顔立ちも髪の色も似ている。

『あーいーたーいーのー!!』

うええええええええええええええええん!!』

「もうちょっと我慢して？　ね？　すぐに会えるから、ね？」

確かに明後日あたりに一旦向こうへ帰るそうだ。

・・・時期は1、2ヶ月。でも。

「何年かこつちで休暇を取る事にしました。

確かに家族とは離れてるけど、これからも会いにいける訳です。

それに危なっかしい魔導師の卵もいるし事件の匂いもします」

「僕たちは大歓迎だが・・・仕事はいいのか？　アリア君」

「ええ。実は俺、結構偉いんですよ？」

そういう事で、アリア君の滞在延期が決まった。

確かにお別れなんて寂しかったからいいんだけど……。

アリア君に問い詰めてみた。すると……事件が必ず起こるから、

俺は緊急事態専門の非常勤的な立場にいることにする。だそうだ。

事件が起こるって……よちのーりよく？

ただ、この間も関係各所さんらしき人達に、

『……都合により本隊復帰がしばらく遅れます。申し訳ありません』

ってモニター越しに頭を下げてたの。

……なのはが原因だったら、別に無理しなくてもいいのに。

……それにしても、アリア君の知り合い……かな。

オレンジの髪の子は両手で次々と落ちてる涙を、

両手で掬いながらも駄々を捏ねている……。

『アリアさんのバカーーーー!! ティア会いたいのーーー!!』

「あう、でも……」

『こら、ティア……アリアも休暇中だけど今度帰って……』

『知らないーーー!! アリアさんなんかぁ……大っ嫌い!!』

「……っ」

ああっ!! 絶対に傷ついたよアリア君!!

後頭部の縦線がどよんってなってるの!

『ティア!!!』

男の人が怒鳴る……ティアちゃんっていうの……?

『ふあああああああん!!』

ティアちゃんはそのままフレームアウト……。

アリア君……人気者なの……。

『・・・やれやれ、すまない』

「・・・いや、いいよ。寂しい思いさせてるのは俺だし」

『そうか・・・まだ帰れないのか？ 魔力は戻ったんだろう？』

「ああ、いつでも戻れる」

『じゃあ』

「この町、今も事件が起こってる・・・」

ジュエルシードの事なの・・・。

『・・・は？』

「しかも 『それ』 以外になにかがある・・・」

『・・・アリアのカンは当たるからね、で、それはなんだい？』

「今起こってる事件とは別の・・・変な空気と魔力」

『ああなるほど、いつ何が起ころうともいいようにって？』

「ああ・・・多分、ロストログアじゃないかと思う。

「それも死ぬほど危険で最悪に夕子の悪いクラスの……」

『なんだろうな……』

「どんよりしてるからまだ起動すらしてないんだろう。」

だが『感じられる』って事は起動が近いつていう……

”ロストログアのセオリー”がある

『ああ……気をつけるよ……皆には?』

「この間まとめて頭下げた。帰りが遅れるって」

『……さっちゃんは?』

「さあ?」

『乗り込んできそうだよな』

「……否定できない」

『ははは、ウインディあたりが便乗してきそうだ』

「????? なんでウインディ……?」

『……え? あ、ああ、いやなんでもない、

ただほら、アイツもすっごい心配してたし? な?』

「そっか・・・じゃあ、切るよ？」

『ああ、本当にティアが済まなかったなアリア』

「いや・・・明後日あたり謝りに行くよ」

『あー、あれか。』帰って来るけど休暇で仕事しません』ってヤツ  
『？』

「うん。資料と資材とメンテナンス器具と日用品持ってまたここに帰る」

『まあ・・・いいけど。じゃあね！』

「うん、じゃあね、ティーダ」

アリア君は通信が終わった後、はあと溜息を吐いて顔を覆う。

「・・・ユーノ君、私シャワー浴びてくるね？」

「あ、うん・・・いつてらっしやいなのは」

悲しそうなアリア君は・・・見たくないの。

sideアリア

「……さっきの女の子は……?」

「ああ……みつともない所見せちゃいましたね。」

「……友達の妹で、ある都合で俺の実家に住んでる子です」

「そう、あ、私の前であんな機密みたいな会話していいのかしら?」

「不可抗力でしょう、どのタイミングで切ればよかったですか……」

「まあ……聞かれて困る事は別に言ってないですし……」

「……アリア君、あなた……無理、してない?」

「……んー」。

「してない……ですね」

「・・・辛くなったらいつでも帰っていいのよ?」

残念だけど、

「それはできません」

「あら、何故?」

「危険がここにある。気付いちゃった。力が要る。俺にしか出来ない。」

「だからやる。例え俺の手が汚れても、救えるならば全てを救い守る」

「・・・ジュエルシードとは別の・・・ね・・・」

「俺自身のエゴってわかってます。周りの人に与える影響も。」

「・・・だけどあえてこの選択をした。これが俺の始まりだから」

桃子さんは俺を見て、見て、見て・・・破顔した。

口を押さえて笑っている桃子さんを見てしばし呆然とする。

「・・・そうね、人一倍責任感が強くて面倒見のいいのが貴方です」

ものね」

けほっ！ と笑いすぎたのか堰をしながら言う桃子さん。

「まさに海鳴の守護神ね・・・あ、アリア君、明日なのだけど・・・

」

「はい、なんですか？」

桃子さんがこっちに向き直る。なんだろう・・・。

桃子さんからの頼みはコスプレ以外じゃ珍しいな・・・。

あ、勿論お断りしてます、コスプレは。

「サッカーの応援があるって聞いたでしょ？」

「あー、はい。そうですね・・・それが・・・？」

明日は定休日だからゆっくり休もうかと思っただけども。

「勝っても負けても打ち上げをやる事になったのよ・・・

何しろ決まったのが急だから人手が足りなくて・・・」

「あれ、桃子さん・・・ホールケーキと軽食とハッピープレート、  
その他諸々の準備とかでしたらお手伝いしますよ?」

「・・・お願い、していいかしら?」

「はい。お任せ下さい」

俺は胸をぼんつと叩く。そのくらいちょちょいのジヨイヤでっ!  
そんな事を思ったとき。

「きゅーっ!」

床を走ってきたユーノ君をキャッチアンド・・・。

なでこなでこスリスリ抱きっ!

「きゅっ!?!」

「それで桃子さん、明日は何時ごろ起きれば?」

「そうね・・・8時ごろには厨房入りしてほしいわ・・・」

「いやいや二人とも話を進め、『サイレス』・・・!?!?」

ユーノ君にサイレスをかけてこちよこちよなでなで。

桃子さんは席を立ち、俺は一人でユーノを撫でる。御神流一派は道場で鍛錬だ。

ああー、癒されるわー・・・。

大っ嫌い!!

「ユーノ君……」

「……？」

俺はユーノ君を顔の前まで持ってきて、肩と喉元と両手で抱き締める。

「……嫌われちゃったかな、俺」

「……」

結局俺はなのはがお風呂から帰って来るまで、

ユーノ君をエンドレスなでなでしていた。

……俺も変身しようかな。うん。そうしよう。



第45話 嫌われヒーロー。(後書き)

次回はサッカーの打ち上げ、そして・・・。

## 第46話 帰省前の一仕事。

お皿とか残ったお菓子とかを片付けつつ、俺は息を吐く。

結果的に打ち上げは大成功。クラブの皆も喜んでくれた。

「ありがとうアリア君、上がっていいわよ?」

「ええ……もうくたくたで……」

「あらあら、帰省は明日なんだからしっかりしなさい?」

「はい……あ、なのはは?」

「さあ……アリスちゃん達と一緒にじゃないかしら……?」

まあ、今戦ってるの分かってるけどね。

……ユ一ノ君偉い。ちゃんと結界を敷けたみたいだ。

ただ……3分、戦い続けている。

「じゃあ先に戻ってますね？」

「ええ。荷造りしっかりね」

「はい」

ひーひー言いながら皿を洗ってる土郎さんを尻目に、

裏口から退出して、なのは達の様子を結界越しに視認する。

「……は？」

えっ……と……？……木……だよね。

……うん、木だ。しかも増殖して今も尚成長している。

ジュエルシードは思念体の塊。歪んだ形で思いを叶える願望器。

……要するに願いに少しでも歪んだ下心があれば結果も歪む。

でもあれは論外だ。

自己再生を繰り返し、なのはの攻撃を物ともしない。

結界が無かったらもう海鳴は壊滅しててであろう。

なのはの顔は見えない・・・予想以上に時間をかけすぎたか。

だがなのはは残り少ない魔力を砲撃魔法へ・・・チャージ。

5秒ほど待ち・・・発射。桃色の砲撃が大樹へ直撃・・・。

だが甘い。

相手は自己再生し『成長』する大樹。

大自然の適応能力が1000倍、いやもっと掛かる速さで行われているのだ。

なのはの魔力を5、10分浴び続ければ十分すぎるほどに大樹は『学ぶ』

桃色の砲撃は幾重にも重ねられた枝で吸収されてしまったのだ。

大樹はそのなのはの純度の濃い魔力を吸いもつと成長し、

ビルの上にいたなのはは膝から崩れ落ちる。

結界が音を立てて軋み始め、現界するのも時間の問題だ。

いかん。これは心叩き折られるフラグじゃ・・・？

俺は急いで結界への割り込みを行った。

s i d eなのは

決死のバスターも・・・ダメだった。

枝が私に向かってくる。脚は・・・動かない。

私はスローモーションに、どこか他人事のように。

・・・だけど。

「リフレガ」

来させてしまった。なのはが頑張るってあの時自分に誓ったのに。

頑張れてない。私はダメだった。

私はやっぱり

「……なのは。ちょっとそこで休んで下さい？」

……？

なのは、よく頑張ったね。

よくわからない白の輝きが見える。

全てを覆うアリア君の魔力光。

純白の輝きは私を照らして……。

「……背、小さいな……」

そんな事を思ってるぞ。

「折れるなよ、なのは」

・・・ああ、やっぱりアリア君かぁ・・・。

sideアリア

ポロポロのなのを見て、なんともいえない気持ちになる。

・・・いや、よく頑張った。ぶっちゃけここまで善戦はできないだ  
ろ。

『フレア』

『フラット』

『トルネド』

『バースト』

『フリーズ』

『クエイク』

術式を展開、大樹を六角形で囲むように配置する。

原書の古代語魔法・・・弾き合う筈の6つの陣は、

何故か全ての魔方陣が自動で組み変わる。属性は・・・無。

「消し飛べ」

どこまでも白い魔カスフィアは大樹の真上で光り輝き、

一瞬の輝きと共に鉄槌が・・・

「『インセプション』」

・・・下される。

純白のスフィアから降り注ぐように魔力が落ちる。

大樹は消え、ジュエルシードが空中に漂った。

「折れるなよ、なのは」

後ろで微かに聞こえた「背、小さいな」なんて声は聞こえない。

聞こえないと思ったら聞こえない。俺はジュエルシードを取りに行こうとする。

・・・さて、封印処理を。

の。する前に俺の目の前に飛来し、ジュエルシールドへ手を伸ばした黒い

・  
・  
・

あれ？

## 第47話 帰郷。

ランカー。

その順位は総合的な戦績によって評価され、

地上の平和を守る、いわば地上の守護者達。

彼らには特徴がある。

一つ・・・全員がブルームナイトと呼ばれる物を用いたデバイスを  
使用する事、

二つ・・・全員が投入次第あつという間に戦況を覆せるだけの戦闘  
力を持つ事、

三つ・・・全員が全ての管理世界で治外法権並みに自由にできる権

力を持つ事、

四つ・・・全員がBLS適正と呼ぶブルームダイトを用いるための適正を持つ事。

ブルームダイトという鉱物は魔力を通す事により、

魔導師の潜在能力を極限まで引き上げる事が出来る。

引き出す能力には無論、レアスキル等も含まれている。

しかし、適性の無い者が使用するとリンカーコアに絶望的なダメージを与える。

彼らはこの物質をデバイスに組み込むことで圧倒的な戦力を手にしているのだ。

尚、BLS適合者は非常に稀有だ。

見つけるには同じBLS適合者による『共鳴』しかなく、

エクレールのランカー入りにミセス・テレジアは一切関わっていない。

彼のBLS適正を見出したのは当時彼の教官だったシャミア・ラヴィラヴィであり、

その上層部への伝わり方も云わばアクシデント同然だった。

彼女は第4訓練校で行われた上層部への公開訓練中、

エクレールへ射撃体勢の指導を行った後、胸をきゅっと押さえたのである。

これを不審に思ったBLS関係の幹部はすぐに彼へ身体検査の名目で検査を実行。

結果は適合率68%・・・十分にブルームダイトのデバイスを扱える数値が出た。

幹部の男は狂喜乱舞し・・・数年後、HCへの対抗という形でランカー候補に。

・・・こうしてエクレールが無事に9番のランクを持つ事になったのである。

一定以上の魔力値を誇る空戦魔導師をエース、

厳しい訓練を積んで戦績を残した陸戦魔導師をストライカー、

ランク持ちのエース、ストライカー達をランカーと呼び、

その中でも優れたランカーの事を畏怖と敬意を籠め、

『ウィザード』と呼称する。

「・・・何をしている？　こんな所で・・・」

「・・・あ、有澤さん・・・」

俺の前に現れたのは黒く重そうなバリアジャケットと、

バカでかい黒塗りのバズーカを背中に斜めがけした大柄な男。

知る人ぞ知るG A系列の有澤重工のランク16、有澤さんである。

「・・・なんだこの宝石は・・・？」

「あつと・・・えと、とあるロストロギアです」

「……あ？ ロストロギア……？……ああ、なるほど」

有澤さんは顎に手を当てて考えた。

「……こんなのに大魔法ぶちかましてなかったか？」

「あ、いや……」

……。

「……そうです。魔力を溜める結晶体だったんですが、

『何故か』思いつきり暴走しちゃって……結界があつてよかったです」

有澤さんはふむ。と頷き周囲を見回して言った。

「……なんか裏がありそうだが……まあ、お前の自由にしろ」

「……ありがとうございます。有澤さんは何でここに？」

「こっちの台詞だバカ野郎。俺の故郷に居たのかよ・・・」

・・・え？

「帰省して羽田に着いたと思ったら遙か遠くからお前の魔力がな・・・」

馬鹿でかい陣だったみたいだな。鈍感な俺でも気付けるとは。

ちなみに覚えておけ。この世界の名称は『地球』だ」

え、ちょっと・・・地球って・・・そのまんまじゃないか!!

すごい損してる気がする・・・なんかもう色々と・・・。

あ、でも管理局は惑星Ⅱ世界って考えなんだっけ・・・？

・・・あー・・・もうちょっと考えればよかった。

「・・・背、縮んだな」

この人は!! この人は本当に!! 20代後半めっ!

「わかった、わかったから泣くな・・・」

「・・・泣いてないし・・・」

「・・・そうか、さて・・・」

そして有澤さんは背中ofバズーカを構えた。

「・・・いつちよやるか？」

「いえ、いいです。後ろに魔力切れの女の子もいますし」

しかも俺とこの人がやったら確実に海鳴が更地になる。

「・・・帰省したら懐かしい顔に会ってしかも女の子連れとは・・・」

「おっさん、だまらっしゃい」

高町家でなのはを除く高町家と向き合う。

ちょっと離れたところには有澤がストレッチをしながら待っていた。

「1、2ヶ月で帰ってきてもいい・・・？」

「もちろんだよ、アリアは私達の家族みたいなもんなんだしっ」

美由希が元気よく言い、恭也も苦笑いする。

「なのはには何も言わなくていいのか？」

「ええ、もう伝えましたから」

士郎さんの言葉にはつきり返す。

伝えるべき事は伝えた。あとはなのはがどんな選択をするかだ。

全員に言葉を伝え、心配とか、そんな言葉を貰い……。

「時間だ」

有沢さんが近寄ってくる。

「……じゃあ……またっ！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

「すみません。有澤重工のトランスポーター使わせてもらっちゃっ

て。

「・・・しかも、帰省・・・だったんですね。あの」

「気にするな・・・お前を送り届けたら家族に会つさ」

「あう・・・でも」

「妻に連絡したかな・・・喜んでたよ。お前も加奈子には会つただろっ?」

「あ・・・」

何回か会った事がある。加奈子さんは有澤さんの従妹で、

壮絶なドラマを繰り広げ婚姻を果たしたそうだ。

なんていつかさっちゃんとオーティーンみたいな人だ。

「・・・まあ、あいつもわかってくれる」

「・・・っうー」

時間を割いてもらっちゃって本当にごめんなさい・・・。

心の中でそう謝り、俺はトランスポーターへたどり着く。

それは有澤重工の地下に在り、構造はミッドで使ったものと同じだ。  
エネルギーが集まり重々しい駆動音が響く。

「ミッド西ターミナルだ。みんな待ってる」

「え？ みんなって・・・？」

「舌嚙むなよ？」

灰色の魔力光が俺の体を包み込んで・・・。

俺はミシド入帰ってきた。

第47話 帰郷。(後書き)

四日間京都へ行ってきました。

活動報告も更新。

第48話 2年ぶりのミッドチルダ。(前書き)

おまたせであります・・・。

第48話 2年ぶりのミッドチルダ。

聞いた？ C組の男の子の話。

ああ、聞いた聞いた。すげーよな。

バカじゃないの？ 怖いだけだし。

あの政府の発表からすごい時間経つけどねー。

研究所とかに行くんじゃない？ モルモットww

ありえるかもな。そのうち政府がうんぬんとか。

どこの中wwww

でも怖くね？ 俺らの近くにあんなのがあるんだぞ？

それわかるわ。急に暴走とかするんじゃない。

えー。まじかよこえーなー・・・。

やめて

おはよーっす・・・ってなんの話してるんだ？

おーす？ あ、おう、C組のアイツの話。

おお・・・？ なんだそれ？

知らないのかよ。今朝のニュース見てないのか？

しらねwww

おま W ほら、C組のピアニストの話だよ！

ピアニスト？ ああ、あいつか。ナニカしたのか？

すげーんだよ、あいつ昨日のコンサートでな？

やめてよ……！

観客全員を植物人間にしたらしいぜ？

4月26日。大樹との戦闘から二週間とちょっと。

「アリア君アリア君アリアくーーーーーんっっ!」

「さっちゃん、シャツがシワになっちゃっつて」

現在、自宅に帰っております。

感動の再会を得て、悠深にシフトしているさっちゃん。

「知らない」

「はぁ」

背中にコアラのように張り付き顔をグリグリと押し付けてくる。

そして前方。俺の目の前には……。

「……」

ちよっぴり悲しそうな顔のティア。ただただ膝の上にじ……っとなんて座っている。

ごめんなさいしてくれて、俺もごめんなさいしたんだけど……。

「……」

俺のシャツを無言でぎゅっと握るティア。

うっむ、また高町家へ帰るって言ったならこんなんだ。

まあ通信で1年繋がってたし、皆そこまでどんちゃん騒ぎにはならなかったけどw

「クンカクンカペるpeguばほっ!?!?」

とりあえず振り向きざまに肘鉄。変態行為は許しません。

「アリア君が帰ってきてから僕に対する扱いがハードモードっ!？」

「ええいうるさい・・・それにまだ怒ってるんだからな・・・」

こいつ、俺が初通信した時に自殺直前だったという事を最近聞かされた。

しかもこれに対してさっちゃんは全然反省していないと来た。

なんていうか・・・うん。なんてバカな事しようとしたんだって感じ。

「ぐぬぬ・・・」

「いやぐぬぬじゃないし」

ティアを抱っこして立ち上がり、冷蔵庫の前へ移動。

・・・テレジアさんはお仕事だ。さっちゃんは非番。

「ティア、何か飲む？」

「・・・(ふるふる)」



「え？ あ、うにゃああああああああっっ！！」

ドップラー効果を出しつつティアを抱えてお買い物へ出かけるさっ  
ちゃん。

確かに助かったけど・・・ティア、南無三。

「もしもし？」

通信の相手は・・・なのはだった。

『あ、えと、こんにちはっ』

「うん？ なのはじゃないか・・・どうしたの？」

『その・・・声聞きたくて・・・』

うん。可愛い。こっつ、しょんぼりしてる。

でもどうしたんだろう。本当に俯いちゃって・・・。

なんだかナーバスでブルーなのはティアで十分だ。

「なにかあったの？」

『・・・あ、アリサちゃんと・・・喧嘩しちゃって・・・』

「あー・・・魔法・・・でしょ」

ピクッと反応するなのは。

「・・・その、金髪の女の子とジュエルシードを取り合ってるの。今」

「・・・ふむふむ・・・取り合いになってるわけね？」

それから金髪の女の子と仲良くなるために一人でむっつりしてたら、うじうじしてるとこ見てたアリサちゃんにキレられたと・・・。

「・・・どうしよう」

「・・・魔法の事は話せないよね。じゃあどうしよう。

・・・でもね。それはさすがにしょうがないって事で済んじやうんだ。

アリサちゃんのはなのはが一人で悩んでるのが気に喰わない！

だけどなのはアリサちゃんに話したら・・・

アリサちゃんは確実になのはに、無理矢理にでも同行しようとするだろうね」

「……じゃあ……」

「ちゃんと、ごめんなさいって言う事。それしかないよ」

「……うう」

なのはも聡いから薄々気付いていたんだろう。

巻き込めない。これはそういう問題。

苦悩する理由も話せず、中途半端になるだろう。それでもそれしかないのだ。

だったらできる事は……誠心誠意頭を下げるしかない。

他に解決法はあるだろうけど俺は魔導師ばかりのミッドで育ったし、

こういふなのはのような状況には……いや、ある。あるけど。

それを踏まえて、なのはには教える事がある。

「言葉にしないと、何も伝わらないよ」

そう。うじうじしてるよりも、喧嘩してしまっても、

金髪の子と仲良くなるためにも、まずは話してみないといけない。

「人」は話せるんだから。そう・・・「人」というのは。

「・・・・・・・・・・そうだね・・・・・・・・そう、だよねっ！」

「ん？ お、おおっ、そうだ・・・・・・・・よ、ほらその、多分・・・・・・・・」

「ありがとうアリア君っ！ 大好きっ！」

プツンと切れる通信。ごめんなのは。君はまだ9才だろうに。

でも元気が出たようだなにより・・・

「・・・・・・・・なんだ、眩暈・・・・・・・・？」

ううむ、抱っこしてたティアが急にいなくなったからお腹冷えたのかな？

なんとなくくらくらりとする。昨日ヒーーズ一気見したから寝不足だ。

俺は自室へ潜るとおもむろにベットへダイブし意識を落とした。

## 第49話 突然の依頼って・・・どうよ。

ベッドにダイブした後、誰かに揺り起こされる感覚で目が覚めた。

横を見ると、ティアペしぺしと俺の頬を叩きまくり、

さっちゃんが・・・いや、ロングになってるからクワイアが、

俺の携帯端末を片手にとっても焦った顔をしていた。

「10分鳴りっぱなしなんですっ！ 重要なお仕事かと！」

「クワイア・・・頼むわー」

「それが・・・『非通知』なんですよっ！」

非通知。相手の番号がわからない事。

それは大抵、管理局を通していない緊急の依頼となっている。

俺はベッドから跳ね起きると携帯端末を受け取り屋上へ向かった。

「・・・この番号がわかっててかけてるの？」

『ランク9、手を貸して欲しいわ』

「ええと……どちら様？」

依頼料を多くふんだくる事でも有名な俺に、

わざわざ端末の番号探してまで掛けて来るってことは、

どんな見方をしても切羽詰ったピンチなんだろう。

『……口は堅いのよね』

「うん。クライアントの事を話さないのは基本……」

おい、待て、この人すごくないか？

俺が生還したっていう正式な発表は5月とかなのに、

もう『新しい端末』の番号を調べたって事？ どうやって……。

『心優しい協力者さんが教えてくれたわ』

「そ、そうですね……」

『初めまして。プレシア・テストロッサよ』

サウンドオンリーから変更の要請が届く。

俺は屋上からさらに空中散歩へ上に上がり承認を押した。

モニタが開き、そこにはグラマラスな衣装を身に……。

……その服は健全な男子には刺激が強すぎる件。

「……」

『あら、空中散歩とはいいご身分……っ!?!?』

「……え、あ、なんでもにゃいっ!?!?」

『……あ、あっいや……まさか男の娘だとは』

「しゅめんなさいっ!?! その、ちょっと、あのっ!?!?!」

『……』

「ちょっとびっくりしたっていつかなんていつかつ!?!?!」

『< > < >』

「そ、そんな見ちゃ嫌です……ぐすっ……」

『……』

「……い、威厳が……ランク9の威厳が……えぐっ」

『……かつ……可愛い……のね／／』

「えっ？」

何とか両者の威厳を取り戻した後。

『依頼の内容は明日、私の家に招待するからそこで話すわ』

「はい、了解ですプレシアさん」

返事をする、プレシア女史は黙ってしまった。

そして訝しげな表情を作り、俺に問いかける。

『・・・あなたを殺す罫かも知れないのよ?』

「?」

え? あ、あー・・・確かにそういう見方も出来るか。

「怖いんですか? 管理局が」

『っ!!!?!?』

凶星か。この人について今日中に調べないとな。

何よりこの人の目的がわからない。

困ってるのか、利用しようとしてるだけなのか。

「ご安心下さい。困ってる人を助けるのが俺のモットーですから」

『・・・正義、ね。とりあえず管理局を通さないと連絡をしたこと、ランク9様はしっかりその意味を把握してくれてるのかしら？』

「ええ。気に入らない仕事はやりませんが」

『・・・じゃあ、座標を送るから明日来て頂戴。何時でもいいわ』

「暇人？」

『・・・予定を空けてるだけよ』

「あはは。別に今からでもいいですよ？」

『あなたの都合もあるでしょ』

』

折角帰って来たんなら家族を大切になさい。

そう言って通話は切れた。

頬を？き、通話時間が表示された画面を見つめ思索する。

大魔導師・・・プレシア・テストロッサ。

確かエネルギー駆動炉魔力エンジンを確立した人だっけ・・・？

確か結構前に・・・爆破事故、起こしてなかったか。

ブレイズエッジのパーツを組む時に参考にした覚えがある。

でも・・・これと言って老化が無かった。

やっぱり最近囁かれてる魔力量が関係するっていう老化停滞理論なのか。

とりあえずは依頼人の詳しいことを調べようと、

俺はオルギアでSランクレベルのデータバンクを開いた。

第49話 突然の依頼って・・・どうよ。(後書き)

・・・あれ？ 最近お堅いお兄ちゃんなアリアがデレただと・・・？

第50話 響く声、震える音。

翌日、最初からバリアジャケットを展開した状態で屋上へ佇む。

座標地点は時空断層の割れ目、航行がし難くて索敵も困難。

名称はプレシアが買い取ったロストロギア、時の庭園。

まあ・・・何かしらの研究をしてるんだろっけど・・・。

「ちょっと・・・要塞じみてるよね」

直接的な座標貰ったから、庭園のどこかに出ると思っただけど。

俺はモニタを消し、振り向いてティアと母さんと向き直った。

「お仕事、行って来るね？」

「・・・うう・・・っ！」

「あはは、泣き虫さんだなあ、ティアはっ」



30分後

「じゃあ行つてきますっ」

「あう……」

「長期になりそうだったら連絡するのよ？」

「うん。あ、父さんは……？」

「また出張よ。どこで何してるのかしらね……」

おい、父さん。次会ったら絶対に泣かす。

どこで何やってるのかすらわからなくなってるって何WWW

そういえば確かに俺が帰ってきた時にもいなかった。

急に出張とか言ってたけど……ま、父さんなら平気か。

「じゃあティア、いい子でお留守番してるんだよ？」

「……」

「ぐぬぬ……っ！……」

ティアめ中々やりおる・・・この俺を萌死させようとするとは。

しかしティア、嬉しいんだけど俺にも秘策があるのだ・・・っ！

「大丈夫、お兄ちゃんが帰ってくるからさ」

「！」

「ティーダお兄ちゃんと、いい子にね？」

「はーいっ！」

元気に手を振り上げるティア。うんうん。可愛い。

・・・ロリコンって言ったヤツ手を上げる。

お、そこで整列して待ってて。ぶった切るから。

俺はゆったりと地面に降り立ち、目を開く。

そこはどこかのお城って言うか、建物の中。

恐らく正面玄関か？ 空気に清涼感がある。

「オルギア、マッピング・・・は不可か」

・・・謁見の間は真っ直ぐ進めば着くっていう王道に頼るか。

俺はブレイズエッジの柄に手を置くと、

左肩から伸びる赤いマントの様な布飾りをたなびかせ歩みを進める。

神殿・・・いや、宮殿か・・・？ 内装はそれに近い。

「・・・ふむふむ・・・んっ・・・？」

微弱な魔力波・・・でもこれ・・・悲しみ・・・？

・・・どっちにしる道聞こう・・・何故か？

分かれ道だからだよ！！！！ 5本ってなんだよ！！！！

俺は静かに歩みを進めた。

彼女は扉越しに聞こえる音に頭を抱えた。

一回、二回、聞こえる悲痛な悲鳴と叫び。

彼女は使い魔。主の感情が逆流してくる。

オシヨセテクル アノコノカンジョウト

ジブンノカンガエガ アマリニモチガウ

「せめて……せめてお……!」

なんでこんなことをするの？

ちゃんと持って来たのに

なんでこんな酷い事するの？

あんたの、娘じゃないか

なんで母さんは鞭で叩くの？

あんたの事が  
a z s x  
c f v h n j i ; /

「……泣いてるの？」

「そっか、悲しいんだ」

「俺はプレシアになっ」

「確かに使い魔だけど」

「君はどうしたいの？」

「君の声を聞かせて？」

「……うん、了解！」

論  
「

「え？ ああ、勿

「あなたのご主人様も」

「ご主人様の母さんも」

「うん。助けてあげる」

俺は気絶した誰か・・・いや、フェイト・テストロッサの使い魔。そのオレンジの髪を掻き分けて額に置かれていた手をどかした。

まずかった。主の思考パターンと使いの思考があわなくて、

相互記憶干渉を起こして使い魔の方がショートを起こしかけてた。

・・・結果、大体の事を知ってしまった訳だけでも。

ちゃんと謝ろう。てかこの子アルフだね。いや臆げだけでも。

今、俺の中にあっただ一期と呼ばれていたであろう断片と、

なのはの通信での会話内容とこのアルフの記憶。

ピッタリくっついて、思い出した。

アリシアうんぬん。リニスうんぬん。ジュエルシードうんぬん。

・・・円満家族計画・・・。

救うとしても、この段階で和解させても絶対後味悪くなる。

最終決戦？ プレシアが絶対に牢獄入りして、

上層部の介入で俺達じゃ手が出せなくなる。

ヒュードラの事故は仕組まれたものだったのは知ってる。

レベルS権限舐めんな。話したら軽く死ねるレベルだけどね。

でもだったらどうする？ 序列権限でもいいけど・・・。

上層部にマークされてのにゴリ押し上等って権限使ってもなあ。

そこまでしてマーク酷くなってやるほど交渉の武器も義理も・・・？

・・・ん？

いや・・・あるじゃん。

『……その、金髪の女の子とジュエルシードを取り合ってるの。今』

さーっと全身から血の気が抜ける。

ダメだこれは。ハッピーエンド。しかも最終決戦まで行かせないと、恐らく『この先の物語』に必ずと言っていいほど作用するだろう。

何故かというと一期と俺が呼んでるから二期以上ある事だ。

そのシリーズであろう物語の基盤である一期のストーリーを崩した  
ら、

二期での死亡フラグが折られないかもしれない。

いや……ふざけてるとか思われるだろうが実際そうなのだ。

俺がなんで断片的にとかいうのは気になるけど後でよし。

きっとすぐには解決しない問題だろうからまずは目先の問題優先。

じゃあ、どっしりする？

虚数空間に落ちるだろうプレシア。

ジュエルシード。アルハザード。

・・・虚数の、海？

「……くわん」

俺は使い魔を横たえ、悲鳴が上がり続けるドアを潜った。

第50話 響く声、震える音。（後書き）

ちなみにアリアは分厚く仮面を被ってるだけです。

その本質は泣き虫で「はうあっ!?!」な男の娘です。

案外、簡単に仮面ははがれますw

第51話 フェイトのためにできる事。(前書き)

お待たせしましたw

第51話 フェイトのためにできる事。

「それで……この研究所の記録の抹消を頼みたいんですね……」  
「？」

「ただこの研究所の破壊を請け負うだけの簡単なお仕事よ」

「……そうですね。ならお受けします」

「よろしく頼むわ」

我ながら真つ黒な取引してるな！。

俺はテーブルに置いていた右手で頬を？いた。

フェイトは先ほど俺がベッドへ運んでおいた。

復帰したしたっばいアルフが睨んでたけどしょうがないよね……。

「じゃあ今日のところはこの辺で、日程が決まったらまた呼び出す

わ

「わかりました・・・あー、質問なのですが」

「・・・なにかしら？」

薄っすらと俺の問おうとしてる事がわかるのだろうか、

プレシアさんはぴくりと眉を動かして俺を見据えた。

「・・・鞭を打つ・・・とは、個性的な教育をなさいますね」

「指導よ」

「彼女の使い魔が精神崩壊を起こそうとするほどの、

激的な痛みと絶望、感情の渦・・・スパルタですね。

・  
・  
・  
彼女にロストロギアを搜索させることも指導ですか？」

プレシアさんは目を見開くと椅子から飛びのいて杖を構えた。

「……どこで、それを……」

「……まあ、置いておくとして」

「なっ!?!」

愕然とするのも当然だ。俺は今児童虐待とロストロギア不当所持、果ては違法研究その他諸々を「置いておいて」と言ったのだから。

それも、ランカーを冠している俺が、だ。

「……どんな気持ちですか？」

「……なにを……?」

「人生の大半を娘と同じクローンを作ろうとし、出来たのは娘とは違う彼女。」

拳句の果てには娘の死体を永久保存し彼女へ理不尽な虐待……」

魔力弾が飛んでくる。俺はサマーソルトの容量でテーブルを蹴飛ばした。

浮き上がるテーブルに穴が開くが魔力弾は貫くことなく消滅する。

宙に浮かびバク転をした状態でブレイズエッジを引き抜き発砲。

三つ魔力弾を打ち落とし流れるように地面に着地し前方を視認。

続く電撃をパリィで弾いて魔素を中和し空いた左手でバリアを構築。

「お前のようなガキに！！ 私の！！！ 何が！！！」

「貴方は忘れていきます！！ もう一度考えてみてください！！！」

「黙れ！！ 私は・・・」

ごほっ・・・とプレシアさんは口元を押さえた。

だが手には収まらない量の血が零れ落ちる。

プレシアさんは杖を落としその場に崩れ・・・。

「・・・」ごほっ！！ごほっ・・・」

「プレシアさん！！！」

「・・・あ、目が覚めましたか？」

「ん・・・」

「リンカーコア調節と魔力供給制限、魔力神経も診ました。

・・・だいぶ楽に・・・なった筈だと思つのですが・・・」

円形のベッドの上で目を覚ましたプレシアさんに、

ベッドに腰掛けながら話しかける。先ほどの攻防など気にせず。

「・・・私は・・・？」

「俺が責めてプレシアさんがキレて血吐いたんで・・・」

「そつ」

「あ、あれ？」

い、意外とそつけない・・・ピンタは覚悟だったんだけどな・・・。

てか病気だったとか・・・忘れてたごめんなさい石投げないでっ！

「・・・その様子だと全部知ってそうね・・・」

「・・・はい」

俺はその後、プレシアさんから全ての告白を受けた。

大半は知っていたので確認の意味合いが大きかったけど。

「・・・で、どうするの？ 天下のランク9様。

私はアルハザードへ行くのは絶対に諦めないわ」

どうしてこの人は、どこでこの人は、間違えて、間違ってしまったんだろっ。

純粹に、世界から娘というただ一つの存在を取り戻そうとしてるだけなのに。

「……俺は、両親がいます」

「……？」

「だけど、父親とはまともにも会えて無いし、母親とも疎遠。

……けど、友達に恵まれてここまでこれた、そんな存在」

そう。そんな存在。

「だけど、もし両親が死んじゃったら……うん。

俺にはどうしたらいいのかわからないし、

ぶっちゃけた話、想像もしたくない」

だけど。

「もし……俺が死んで、幽霊になって、両親の傍に漂ってて、

両親が血反吐を吐きながら俺を蘇らせようとするのを目で見てた

「ら

俺はふとプレシアさんの真横に目を寄越す。

『ライブラ』起動。

そこにはうっすらと、涙目でプレシアさんに縋りつく何かが。

「絶対にやめてほしい。って思います」

俺の瞳の色が変わった事と発言で何かを察したのか、

プレシアさんは視線を自分の横に移し息を詰まらせた。

「思い出してください……あの子……アリシアちゃんは、

アリシアちゃんが本当に望んだモノを貴方は知ってるはずですよ」

「……私、私……は……?」

すると、反響するような音の後、何かが頭の中に響いた。

『あのね、お母さん・・・私

』

プレシアさんは口を手で覆い顔を伏せる。

『妹が欲しいの!』

これがアンサー。そして答え。故に回答。

「・・・俺には子供は居ないけど」

「・・・あ・・・ああ・・・」

「親が叶えてくれるなら、『自分の願い』がいいです」

「・・・私は、フェイトに、フェイトに・・・っ!!」

プレシアさんは顔を上げると俺の胸倉を掴み上げて言った。

「私はあの子に・・・フェイトに何もしてあげて無いわ!！」

「・・・ええ。そうだと思います」

「私は・・・私・・・は・・・どうすればいいの・・・?」

「それは、アリシアちゃんの事も助けたい、フェイトにも謝りたいと・・・?」

「・・・」

「断言します・・・アルハザードはある」

「!?!?!」

「もちろん行くための術も」

「・・・」

「プレシア・テストロッサ。俺に提案があります。

「・・・些か、結果の裏りが大器晩成型ですが・・・」

彼は動き出す。世界で一番不幸な親子のために。

彼がするのは本当に小さくてそれでいて大きい事。

世界の渦を歪ませない様に、だけど幸せになれるように。

・・・それはあの子にとっては小さいけど大きい事。

ちよつとだけ、アリアは歯車を弄る事にした。

第52話 無印の結末。(前書き)

次もあります。

## 第52話 無印の結末。

俺はミッドからアースラを中継して地球へ舞い降りた。

PT事件はプレシア・テストロツサの行方不明で幕を閉じた。

よづするに無事エンドを迎える事が出来たわけだ。

「……………」

「あははー……………ごめんなークロノー」

「……………はぁ……………我俣がすぎるんじゃないんですか？」

「ふええええいとおおおおおおおおおおー!!」

海鳴、そして5月の末……………あの一期の名場面だ。

「よりによってウィザードが保護責任者のバックアップに付く。

そして書面の提出はウィザード……………ランカーの貴方がすると?」

「そついつ事になるね」

「うわあああああああふえーいとおおおおおおー！」

フェイトの判決はほぼ無実だろう。プレシアさんは虚数空間に落ち、使い魔のメモリーとフェイト自身の証言と俺の証言がある。

「優秀な魔導師を積極的に取り込もうとするのは海の悪い癖です・・・」

「いや。確かに給料も高く死亡率も低い海に行くのは当然さ」

「いつか無くしたいものですよ・・・海と陸の確執は」

「そうだね・・・ウィザードの俺たちがいるけど・・・」

それは根本的な解決にはこれっぽっちにもならない」

「はあ・・・フェイトの・・・言わば裏のバックアップになるのも、フェイトに悪い虫が付かないようにするためなんでしょう？」

「裏のって・・・まあそうだけだね」

「どうしたんです？ 確かに貴方は優しい・・・ですが」

「こつまでする理由がわからないって？」

「あんだのこののはって子は本当にいい子だねええええ・・・」

「!!」

「あ、あはは、アルフさん、ハンカチ・・・」

クロノは静かに頷いた。まあ、確かにわからないだろう。

「純粹に放っておけなかった・・・それだけ」

「そうですね・・・あ、そろそろ時間ですね」

「ふええええええええいとおおおおおお」

「「うるさい」「」

「はい」

「変わり身早っ!?!?」

俺たち脇役4人はベンチから立ち上がり二人の元へ歩く。

リボンを交換して友達になれたみたいだ。よかったねなのは。

「・・・貴方は・・・」

フェイトがこっちを見て驚く。まあついさっき合流したし、

フェイトを介護してから会って無いから当然の反応か。

「アリアさん・・・あ、アリアさんも一緒に？」

「ああ、アースラでフェイトと話がある・・・」

するとなのはの顔が露骨に曇る。俺はそれを見て苦笑して言った。

「大丈夫、尋問とかじゃなくて少し話があるだけ」

「そうなの・・・」

「え、えっと、あの時の・・・？」

「うん・・・じゃあ行くところか。なのは、また来る時は連絡する」

「うん！ アリア君もユーノ君もまた会おうねっ！」

「じゃあね、なのは・・・僕の魔法の練習法も欠かさずにね？」

「わかったの！」

「なのは・・・またね」

「フェイトちゃん・・・またねっ！」

俺たちは魔方阵に入り、この地球から去った。

数時間後・・・。

アースラの食堂に、俺とフェイトとアルフが3人で座っている。

食事時で無い今は十分に内緒話ができる場所である。

「・・・君の保護観察者はリンディさん・・・っていうのは聞いた  
？」

「はい・・・」

「フェイト・・・」

「この話題は辛いかもしれないけど、少し我慢してくれと・・・」

「大丈夫です」

「・・・そっか」

この子は強いなあ・・・うんうん。

「まず、保護観察者はリンディ・ハラオウン提督。

保障後見人は俺、アルトリア・ムーンライトが担当します」

「・・・？」

「ようするに君に衣食住の保護をさせるのがリンディさん。

そして書類面でのバックアップが俺の主な仕事になるかな。

ちなみにフェイトの裁判、無罪はほぼ確定だね・・・」

僕はドヤ顔をして、フェイトとアルフの頬を緩ませる。

だけどアルフが「あ」と声を上げて・・・

「・・・なんで無罪って確定してるんだ？」

「・・・私も気になります」

「あー・・・」

確かに色々あるんだけど・・・。

「俺がいるからっ!」

「」  
「」

「・・・まあ、これでもやり手なんだよ」

ふんすと腰に手を当てて言う俺に対してフェイトは言った。

「あ・・・なんであの時に・・・?」

「ああ、君のお母さんからお仕事を頼まれてたんだ」

「・・・え・・・?」

「平気。犯罪じゃないから・・・研究所の後片付けを頼まれてたんだよ」

「はぁ・・・」

至って普通の事のように言うけど俺の内心は冷や汗ダラダラ。

そしてある『矛盾』に気づいたのかアルフが突っ込んだ。

「なあ・・・あんたって陸のエースですっげえ強いんだろ？」

片付けだけなら・・・まあさ、最強とはいわないけど、

・・・あんたほどのレベルのヤツに頼むかい？

もっと適してるヤツをプレシアは選んだはず・・・」

「あら・・・まあ、そこは俺も気になってた」

「・・・？　じゃあ・・・？」

「俺が有名な理由は・・・色々あるんだけどさ。

その中の一つにこんなのがあるんだよ・・・」

ランク9と関わった犯罪者は98%の確立で模範囚となるか、

もしくは刑期の短縮、犯罪率の低下と意識改善が見られる。

「多分、プレシアさんは俺に救ってほしかったんだと思う」

「「・・・っ！」「」

「自惚れかも知れないけどさ」

ランカーというのは31人居るが、大抵が実力行使に出る。

警告も無しに突撃、そして抵抗する者は皆殺しというのもよくある。

一般の陸士との突入でも怪我人が出るのは当たり前。

ランカー、中でもウイザードの出撃なら必ず一人死亡は硬い。

でもその例外が俺を含めた数人のランカーなのである。

例えば・・・質量兵器の密輸をしている組織。

管理局には尻尾を掴まれ、いつ突入してきてもおかしくない。

それも、ランカーが突入してきてもおかしくないのだ。

そこで、だ。どうしても死にたくないリーダーか、

身内が死ぬのが嫌な部下思いのリーダーか、

ここを凌いで、次のチャンスを待つリーダーか、

そんな色んなリーダーが例外に向かって自首するのだ。

一番顕著な例は俺か。いや、一番殺さない人だし。一応。

俺に電話する アジトの座標リーク テレポで超短縮移動 アジト  
なう

質量兵器持ったいかつい兄ちゃんたちがお出迎え 制圧 終了。

こんな感じで全員お縄だ。怪我人も重傷者とか再起不能とかにはし  
ない。

偽善者？ ああ、俺は全ての人間はいい人って思ってる幸せな人間  
です。

話を戻す。そんなこんなで俺に電話を掛けるのは案外犯罪者さんが  
多い。

非通知の電話に速攻で反応するのもそのためだ。

・・・カウンセリング子供110番のように、

座標だけ伝えてぶつちする人とかも居るけど・・・。

実際はそれで十分。そのまま事件を解決します。

「・・・じゃあ、母さんは・・・」

「俺の電話番号はそれなりに苦労しないと見つからないよ。

まず管理局のデータベースにハッキングするか、

他の組織から高い金を払って俺の番号を買うか、

・・・まあ、言伝に聞いたって可能性もあるけど」

「何が言いたいんだい・・・？」

いい加減苛立ってきたとアルフが口を挟む。

・・・そうだね、そろそろ核心を突こうか。

俺はとある可能性を見つけたのか、瞳が揺れて、

きゅっと拳を膝の上で握り締めるフェイトを見て言った。

「君のお母さんから伝言と手紙を預かってる・・・聞かない？」

フェイトの瞳が見開かれ、俺はアルフに胸倉を掴まれる。

「……本当……かい……？」

「ああ」

「……正直、あの鬼ババが伝言なんてありえない……」

ましては……」

フェイトに「希望」を与える内容など。

言葉には出さなかったが、俺にはわかった。

だけど。

「聞くかい？……アリシアのクローン、フェイト・テストロッサ。

……もしかしたらこれは俺の優しい嘘かもしれないし、

……もしかしたら、君に光を与えるものかもしれない。」

フェイトの瞳孔は開き、目には涙がにじみ、瞳は揺れに揺れる。

だけど、クローンと言われても尚、その少女は……。

「……聞きます」

一歩、前に踏み出したのである。

アルフに服を話してもらった後、俺は、ただ一言、言った。

「君のお母さんは……プレシアさんは生きてるよ。」

しっかりと失われた地アルハザードへ向かってる「

「……向かってる……?」

「うん……それと……これ」

俺は虚空から俺お手製の群青の便箋を取り出す。

空中で蒼い蝶々と共に回る便箋をフェイトは優しく手に取った。

封を切り……フェイトがちゃんと便箋を開くのを確認した後、

俺はフェイトの瞳の動きと合わせ、丸暗記していた手紙の内容を読んだ。

『私は貴女を沢山傷つけて、貴女の心を壊したわ。』

私はアリシアを蘇らせたくて、アルハザードへ行く。

私は・・・そう、そうね、自分に嘘を吐いていた。

ここでは多くは語らない。謝ろうとも思わない。

貴女に許してもらえるだなんて思っていない。

ただ、貴女に言いたい事があるのよ。』



フェイト、生まれてきてくれてありがとう

貴女は母さんの大切な娘よ



## 第53話 A Sの序章。

大魔導師、プレシア・テスタロッサはアルハザードへと至った。

ジュエルシードが無くても行けるような場所だったのだ。

虚数空間とは単一の世界と単一世界を繋ぐ・・・いや、

もっと大きな規模のカテゴリ。

パラレルワールドのレベルでの相互干渉ができるフィールドなのだ。

失われた都とは次元断層に飲まれた云わばパラレルワールド。

アルハザードの座標はプレシアから教わり特定が出来た。

プレシアの言う渡るとは跳躍をする事を前提としていた。

その虚数空間内での超長距離の跳躍魔法の行使中に、

効果が切れないようにするためのエネルギータンクがジュエルシード。

だけど、もっと簡単な方法がある。

跳躍するのではない。道を作ればいいのではないか。

ようするに、歩いて渡るといふ事だ。

魔力が作用しないなら魔力じゃないもので行けばいい。

重力の底まで落ちるといふので超重力が働いているわけでもない。

至って地球と同じの平均的な重力だ。まさに足場が無い状態。

ならば・・・そう。非常識の出番である。

魔力も使わずに空中を走る乗り物。

うちの白騎士サラブレットガール、オーディーンである。

俺は魔力が足らず休眠させていたオーディーンを叩き起こし、

起きて早々頼みごとごめんと謝って事情を話してから魔石状態へ。

それをプレシアに渡す。原作通りプレシアとアリシアが落下。

とりあえず目視が出来なくなった地点でオーディーン起動。

??のガチモードで顕現しアリシアのポットとプレシア回収。

あとはオーディーンがポットを小脇に抱えて肩にプレシアを乗せて、ブーンと空を飛んでアルハザードの座標へ向かっているだろう。

オーディーンは人型じゃ飛べない？ ご冗談を。彼女も神の末席。空を魔力無しで飛ぶなど造作もないことです。

天使は全て飛べます。なのに仮にも全知全能とも言われた彼女が、飛べないわけは無いでしょう？……………うん。そんな感じ。

これも一つのハッピーエンドの形。

プレシアさんは向こうでアリシアの蘇生。

……………そして、アリシアに全てを話し、生活が落ち着いたら手紙を出すらしい。

なんでも、オーディーンを渡したときに何か思いついたのかなんとか。

フェイトはというと、便箋に無数の水玉模様を見つけて感極まった。

……………後日、ちゃっかりというかアルフがDNA鑑定を行ったらしい。

使い魔って優秀なのね・・・もちろんプレシアのDNAと一致。

なにが、とは言わない。自分で察してくれ。ヒントは水玉だ。

あー、できればテストアロツサ家が一堂に会することとなりますように。

新暦65年、6月4日のムーンライ

ア氏の日記より。



この時の俺は、まだ幸せな方だったのだろう。

『ああ、やっと会えた

』

何も知らない、何もわからない、何も・・・何も。

自分の過去を棚に上げて俺は何がしたかったのだろうか。

起動する闇の書、顕現する守護騎士達、巻き起こる事件。

烈火に触れるたびに思い出す自分ではない『俺』の記憶。

この俺が俺じゃないならば、この『俺』とは一体誰なのか。

闇の書の終焉と共に消えていく。書も闇も、祝福も、俺も。

旧約の無名の書に示された、白い部屋の『俺』の目的とは。

『  
ずっと待ってたんだよ……もう一人の俺』

次回、魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫。

『A Sの始まり』

物語は、白く輝く。

第53話 A Sの序章。(後書き)

眠い・・・(現在0時45分)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0978w/>

---

魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫

2011年12月16日01時53分発行